えびの市埋蔵文化財調査報告書　第49集

島内地下式横穴墓群II

埋蔵文化財緊急調査事業報告書

2010

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第49集

島内地下式横穴墓群Ⅱ

埋蔵文化財緊急調査事業報告書

2010

宮崎県えびの市教育委員会

序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたる、南九州の要であります。北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。古代の官道も通り、古くから交通や物流の要所として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特の地域であります。

本市の西部、川内川左岸の低位段丘に立地する島内地下式横穴墓群は、古墳時代後期の甲冑や蛇行剣・刀剣類・鉄鏃・骨鏃といった多くの武具や武器に加え、鞘や鹿角製刀装具、簪石などの有機物も良好に遺存する墳墓群として周知されている極めて重要な遺跡であります。

平成13年には、101号墓までを纏めて報告いたしておりますが、以後も断続的に陥没の通報を頂き、記録保存に勤めてまいりました。

本書は、102号から112号までと116号・125～127号墓の調査報告書であります。刀剣類や弓金具・貝釧などの様々な副葬品や人骨が出土しており、貴重な成果を得ております。また、補追として、21・62・76・81号墓出土の短甲と21・76号墓出土の冑について玉稿を賜り、掲載しております。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力頂いた諸先生方、調査に対してご理解・ご協力頂いた地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

えびの市教育委員会

教育長　萩原和範

例　言

1．本書は、島内地下式横穴墓群において平成14年から21年9月にかけて緊急対応調査した102～112号および116号・125～127号地下式横穴墓の報告書である。

2．同名の報告書としては2冊目であることから、Ⅱを付している。

3．調査は、えびの市教育委員会が主体となり、発掘調査は主として、木原典子・出水一美・永田美智子・是枝利江子の4名が従事している。出土人骨の実測～取り上げ～分析は鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に委託し、玉稿を賜った。なお、104・107号墓人骨の実測～取り上げは、鹿児島大学の峰和治助教がご尽力下さった。記してお礼申し上げます。

4．既刊報告書の中で、02号上坑から出土した鐙を保存処理に出した際、鏡板の接合が誤っていたことが判明したので、改めた実測図を掲載し、お詫びしたい。加えて、101号墓出土の貝釧は現鹿児島市教育委員会嘱託の中村友昭氏の御教示により、オオツタノハ製であることが判明したので、ここに報告しておく。さらには、鹿児島大学の学術調査における76号墓から出土した三角板革綴衝角付冑と横矧板鋲留短甲の実測図を掲載する。保存処理後8年が経過したが、写真と実測図が公表されないことから、このたび鹿児島国際大学の大西智和教授に許可を頂き、日の目を見ることができた。また、21号墓出土の短甲と冑の内面、62号墓出土の短甲内面、76号墓出土の短甲と冑さらには81号墓出土の短甲内面を松本市教育委員会の片山祐介氏が8年前に作図されており未発表であるということからここに掲載し、玉稿を頂いた。記して感謝申し上げます。

なお、第35～42図と第45図下半～47図は、片山氏の原図をトレースしたものである。

5．ST-104・107の人骨の出土状態図は紛失したが、ST-104は竹中先生のメモ書きと写真を照合して、ST-107は写真のみで概略図化している。ただし、前者の4号人骨の頭部のみは竹中先生の実測途中のものであり、正しい位置にある。

6．本書の執筆と編集は、中野が担当した。

7．調査の関連資料や出土遺物は、えびの市歴史民俗資料館に保管・一部展示している。

凡　例

1．本書掲載の遺構は、ST：地下式横穴墓　として略している。
2．地下式横穴墓の主軸方位とは、竪坑から見た玄室の方位を表すものとする。
3．遺構断面図の閉塞材は、斜線は石を、格子目はアカホヤ塊を示す。
4．基準点測量をしていないため、遺構実測図の方位は大凡であり、標高も数値で示せないためにGLを0とした水平ラインを描いている。
5．鉄器・鉄製品の実測図と写真は、保存処理前のものである。ただし76号墓の甲冑は、保存処理後に実測・写真撮影をしている。
6．写真図版の個別遺構のピンポールの長さは、1mである。

調　査　組　織

特別調査員　鹿児島女子短期大学　教授　竹　中　正　巳

調査主体　えびの市教育委員会　教育長　萩　原　和　範
社会教育課長　白　坂　良　二
文化係長　岩　下　自　年
主査　西　　正　利(連絡調整、事務)
主任技師　中　野　和　浩

平成21年度
整理作業員　大田由美子、楢木たか子、橋爪真美、山元里美

目　　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査
　第１節　はじめに …… 5
　第２節　基本的層序 …… 5
　第３節　発掘調査
　　１．ST-36の竪坑 …… 5
　　２．ST-102 …… 6
　　３．ST-103 …… 7
　　４．ST-104 …… 9
　　５．ST-105 …… 11
　　６．ST-106 …… 14
　　７．ST-107 …… 15
　　８．ST-108 …… 17
　　９．ST-109 …… 17
　　10. ST-110 …… 18
　　11. ST-112 …… 24
　　12. ST-116 …… 24
　　13. ST-125 …… 27
　　14. ST-126 …… 30
　　15. ST-127 …… 32
第４章　まとめ …… 38
第５章　補追・改訂資料 …… 39
付　篇　出土人骨の分析 …… 121

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡位置図 … 1
第２図　島内地下式横穴墓群分布図 … 3・4
第３図　ST-36竪坑実測図 …… 5
第４図　ST-102遺構実測図 …… 6

第５図　ST-103遺構実測図 …… 7
第６図　ST-102・103出土遺物実測図 …… 8
第７図　ST-104遺構実測図 …… 10
第８図　ST-104出土遺物実測図 …… 11
第９図　ST-105遺構実測図 …… 12
第10図　ST-105出土遺物実測図 …… 13
第11図　ST-106遺構実測図 …… 14
第12図　ST-107遺構実測図 …… 15
第13図　ST-108遺構実測図 …… 16
第14図　ST-109遺構実測図 …… 17
第15図　ST-107・109出土遺物実測図 …… 18
第16図　ST-110遺構実測図 …… 19
第17図　ST-110出土遺物実測図 …… 20
第18図　ST-112遺構実測図 …… 21
第19図　ST-112出土遺物実測図(１) …… 22
第20図　ST-112出土遺物実測図(２) …… 23
第21図　ST-116遺構実測図 …… 25
第22図　ST-116出土遺物実測図(１) …… 26
第23図　ST-116出土遺物実測図(２) …… 27
第24図　ST-125遺構実測図 …… 28
第25図　ST-125出土遺物実測図 …… 29
第26図　ST-126遺構実測図 …… 30
第27図　ST-126出土遺物実測図(１) …… 31
第28図　ST-126出土遺物実測図(２) …… 32
第29図　ST-127遺構実測図 …… 33
第30図　ST-127出土遺物実測図(１) …… 34
第31図　ST-127出土遺物実測図(２) …… 35
第32図　ST-127出土遺物実測図(３) …… 36
第33図　閉塞タイプ別分布図 …… 38
第34図　SK-02出土轡実測図 …… 39
第35図　ST-21出土短甲実測図(１) …… 41
第36図　ST-21出土短甲実測図(２) …… 42
第37図　ST-21出土冑実測図 …… 43
第38図　ST-62出土短甲実測図(１) …… 45
第39図　ST-62出土短甲実測図(２) …… 46
第40図　ST-76出土短甲実測図(１) …… 47
第41図　ST-76出土短甲実測図(２) …… 48
第42図　ST-76出土短甲実測図(３) …… 49
第43図　ST-76出土冑実測図(１) …… 52
第44図　ST-76出土冑実測図(２) …… 53
第45図　ST-76出土冑実測図(３) …… 54
第46図　ST-76出土冑実測図(４) …… 55
第47図　ST-81出土短甲実測図(１) …… 57
第48図　ST-81出土短甲実測図(２) …… 58

表目次

表１　ST-102・103出土遺物計測表 …… 9
表２　ST-103出土貝釧計測表 …… 9
表３　ST-104出土遺物計測表 …… 9
表４　ST-105出土遺物計測表 …… 12
表５　ST-109出土貝釧計測表 …… 18
表６　ST-110出土遺物計測表 …… 21
表７　ST-112出土遺物計測表 …… 24
表８　ST-116出土遺物計測表 …… 27
表９　ST-125出土遺物計測表 …… 29
表10　ST-126出土遺物計測表 …… 32
表11　ST-127出土遺物計測表 …… 36
表12　地下式横穴墓被葬者一覧 …… 37
表13　短甲・冑計測表 …… 59

写真図版目次

図版１　島内地下式横穴墓群遺跡遠景(南東から、平成10年12月撮影)、俯瞰

図版２　ST-36竪坑検出状態（南から)、断面層序（西から)、セクション除去・竪坑上部閉塞状態、閉塞石除去

図版３　ST-102陥没坑と竪坑検出状態(南から)、竪坑断面(南から)、セクション除去・閉塞石出土状態(南から)、閉塞石除去

図版４　ST-102玄室内、１・２号人骨頭部周辺、ST-103陥没坑(奥)と竪坑(北東から)

図版５　ST-103玄室内、２号人骨頭部(右)と３号人骨頭部・鉄剣出土状態

図版６　ST-103　１号人骨(奥)と、２号人骨下肢、１号人骨左腕の貝釧

図版７　ST-104竪坑と陥没板石検出状態(西から)、竪坑断面層序(西から)、完掘(東から)

図版８　ST-104玄室内１～４号人骨上半身と副葬品、下半身

図版９　ST-104右棚上施設の鉄鏃と矢柄の痕跡、ST-105竪坑検出状態(西から)、完掘(西から)

図版10　ST-105玄室内、１～４号人骨頭部と副葬品

図版11　ST-105　２～４号人骨下肢、右側壁中央部副葬品

図版12　ST-106竪坑検出状態(西から)、　完掘(西から)、玄室内右半１～３号人骨

図版13　ST-106玄室内１～３号人骨下肢、ST-107竪坑検出状態（北から)、割れた板石除去・竪坑掘形検出(東から)、完掘(東から)

図版14　ST-107玄室内右半

図版15　ST-107下肢、ST-108羨門閉塞状態(玄室から)

図版16　ST-108玄室内１号人骨(西から)、頭骨と右側壁掘削痕(北西から)

図版17　ST-109竪坑検出状態(南から)、半截断面(北から)、完掘(南から)

図版18　ST-109玄室内(南から)、頭骨周辺と貝釧出土状態

図版19　ST-112　１～３号人骨と南隅の副葬品(北から)、上半身と副葬品(北西から)

図版20　ST-112　３・４号人骨と羨道(北東から)、１～３号人骨頭部周辺と副葬品(北西から)

図版21　ST-112南隅の副葬品(北から)、羨門閉塞状態(北東から)

図版22　ST-116人骨と北東部の弓金具(西から)、人骨(北西から)

図版23　ST-116北西部の副葬品(南東から)、羨門閉塞状態(北から)

図版24　ST-125　１号人骨(西から)、２号人骨(東から)

図版25　ST-125　２号人骨の上半身と副葬品・羨道中位の頭骨(北から)、上半身と副葬品(北から)

図版26　ST-125　２号人骨下顎～腹部と副葬品(東から)、(北から)

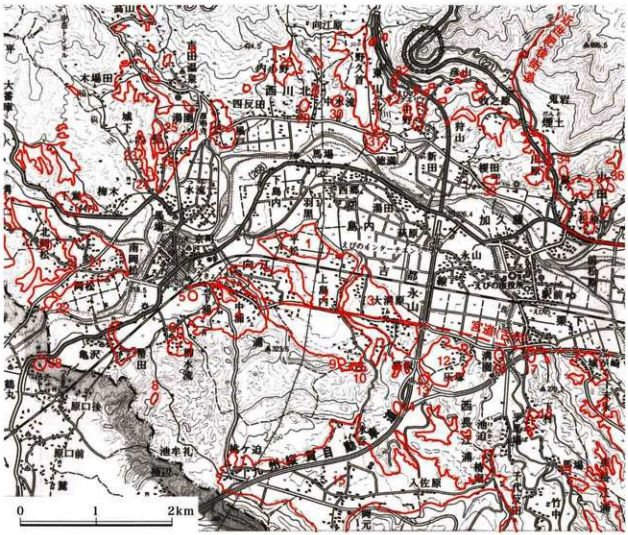
図版27　ST-125　２号人骨下半身(東から)、羨門閉塞状態(北から)

図版28　ST-126　１号人骨と副葬品(西から)、２・３号人骨と副葬品(東から)

図版29　ST-126　1号人骨上半身と副葬品(西から)、下半身(西から)
図版30　ST-126　2・3号人骨上半身(東から)、下半身と副葬品(南東から)
図版31　ST-126　2・3号人骨上半身と副葬品(北から)、羨門閉塞状態(北から)
図版32　ST-127　1号人骨と副葬品(西から)、2号人骨(南東から)
図版33　ST-127　1号人骨上半身と副葬品(西から)、下半身(南西から)
図版34　ST-127　1号人骨上半身と副葬品(北西から)、右胸～腹部の鉄鏃と矢柄(西から)
図版35　ST-127　2号人骨上半身(南東から)、下半身(南東から)
図版36　ST-127　2号人骨上半身(北から)、羨門閉塞状態(北から)
図版37　ST-102出土遺物、ST-103出土遺物（1）、（2）、ST-104・105・107出土遺物、ST-104・105出土遺物
図版38　ST-105出土剣鹿角製装具
図版39　ST-109出土貝釧、ST-110出土遺物
図版40　ST-112出土遺物（1）～（3）
図版41　ST-116出土遺物（1）、短刀(83)の側面、ST-116出土遺物（2）・弓金具
図版42　ST-125出土遺物（1）～（3）
図版43　ST-126出土剣(96)の把、ST-126出土遺物
図版44　ST-127出土遺物（1）、（2）
図版45　ST-127出土遺物（3）、（4）
図版46　SK-02出土櫛(保存処理後)
図版47　ST-76出土短甲、後胴、左側面、右側面
図版48　ST-76出土短甲・後胴の覆輪、前下半、上半内面
図版49　ST-76出土短甲・後胴最上部の獣毛様付着物、右前胴下部・蝶番、X線写真
図版50　ST-76出土冑展開
図版51　ST-76出土冑・錆除去展開
図版52　ST-76出土冑後面、錆除去後面、内面、錆後面
図版53　ST-76出土冑・錆展開

第１章　はじめに

明治38（1905）年に甲冑が出土して以降、昭和８（1933）年12月に、墳丘の遺存していた12基が県指定を受け、昭和41年に短甲が出土、昭和60年の県文化課による『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』によって名称が統一された。平成６年の陥没は41基もあり、平成11年にかけて短甲３領、冑２鉢、蛇行剣９振ほか多数の遺物が出土し、地中レーダー探査で分布範囲を推定し、101号墓までを既刊報告している[1]。それ以後も１～２年間隔で陥没の通報があり、102～112号と116号・125～127号墓の緊急対応調査を実施した。これらは開発に伴う調査ではないことから、玄室の



1：島内地下式横穴墓群　2：島内遺跡　3：大溝原遺跡　4：中浦遺跡　5：徳永牟田遺跡　6：古城跡　7：古城遺跡　8：狼ヶ城跡　9：柚ヶ迫経塚　10：三吉城跡　11：小原遺跡　12：灰塚地下式横穴墓群　13：西矢倉城跡　14：池山城跡　15：岡元遺跡　16：溝園城跡　17：稲荷城跡　18：小屋敷城跡　19：畑田城跡　20：天神免遺跡　21：岡松遺跡　22：赤花城跡　23：杉尾城跡　24：松尾城跡　25：丸ノ尾城跡　26：昌明寺跡　27：風戸遺跡　28：内小野遺跡　29：東福城跡　30：新城跡　31：徳満城跡　32：妙見遺跡（消滅）33：園田城跡（消滅）　34：浄慶城跡　35：加久藤城跡　36：新城跡　37：小城跡　38：鶴丸・馬場地下式横穴墓群（吉松町）

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡位置図（1:50,000）

みの調査で終わらざるをえないものが多く、作物の収穫後に記録保存し、シラスを充填して畑に戻すという単発的な緊急対応調査の繰り返しである。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境(第１図)

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松・杉ノ原に所在する。本市の西側、盆地中央を西流する川内川の左岸、氾濫原との比高８m、標高233～235mの低位段丘に立地する。これまでの調査で、東西650m・南北350mの分布範囲がほぼ確定し、平成21年11月現在、地下式横穴墓127基や板石積石室墓２基、横穴式石室系板石積石室墓１基、馬墓２基が確認されている[2]。周囲は、島内遺跡(２)・中浦遺跡(４)・大溝原遺跡(３)の縄文時代以降の広大な遺跡群が続くと想定されるが、半径1.5km以内の調査事例は無い。

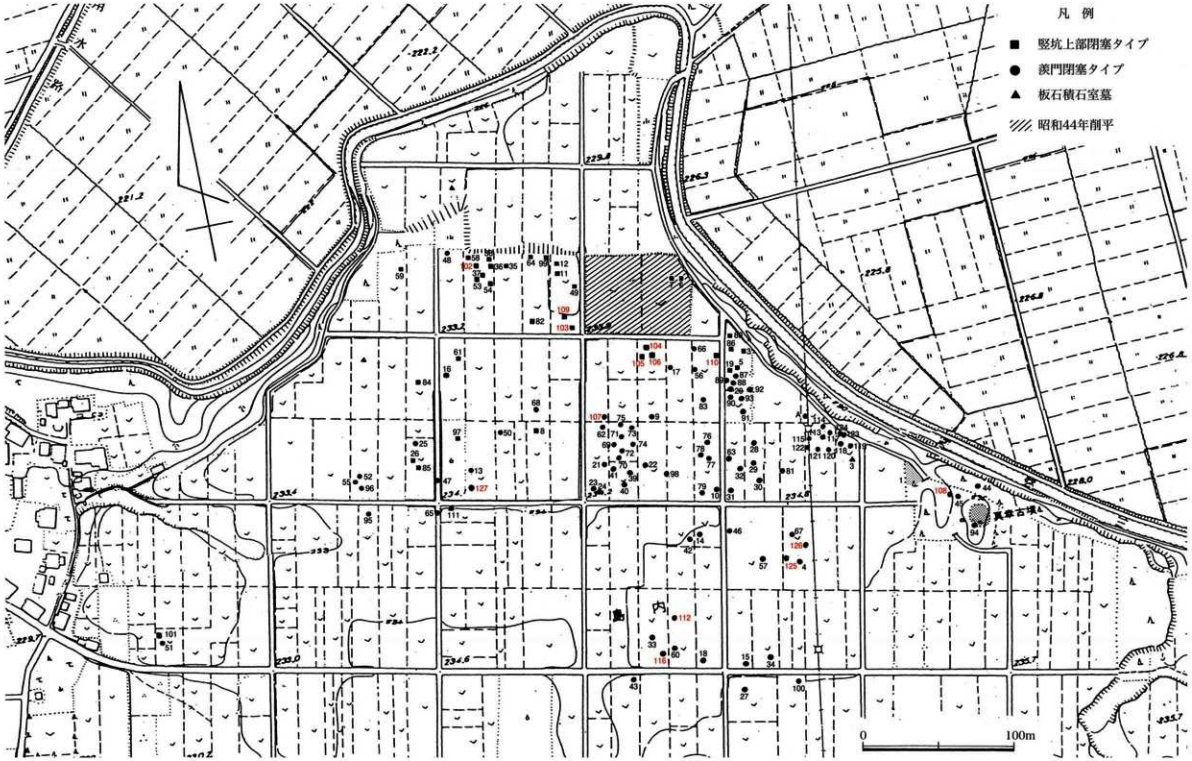
川内川左岸には、約２km間隔で、灰塚（12）・小木原・建山と大規模な墳墓群が立地し、小規模な遠目塚・杉水流の墳墓群が続く。右岸の大規模墳墓群は１ヶ所(学畑)しか無いが、小型形式の地下式横穴墓を内小野遺跡(28)で１基[3]、天神免遺跡(20)で27基[4]、岡松遺跡(21)で２基検出[5]している。このうち、灰塚・小木原・学畑においては板石積石室墓も混在する。

対岸の２km北には、弥生時代中期末～古墳時代中期の竪穴住居130（推定総数300～400）軒を検出した内小野遺跡が立地し、当墳墓群を造営した集団のうちの一つの居住地である可能性が高い。その東には、５～６世紀代の竪穴住居41軒を検出した妙見遺跡[6](32)が、３km西には、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴住居200軒余りを検出した天神免遺跡が、その東には竪穴住居28軒を検出した岡松遺跡が立地する。

段丘下の氾濫原は遺跡が少ないが、徳永牟田遺跡（５）では弥生時代後期の壷や甕数10個が潰れた状態で発見され[7]、微高地には遺跡が包蔵していることを留意する必要がある。0.6～0.7km南には古代の官道が走り、中世には左岸段丘の突出部や右岸丘陵の末端部に山城が逆立し、肥沃な盆地の覇権が争われた。三古城西隣の独立小丘陵頂部(９)には、経塚３基があると思われ、地権者によってうち１基から軽石製外容器が掘り出されている。

註

(1) えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群』 2001
(2) えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群Ⅲ』岡元遺跡　2009
(3) えびの市教育委員会『内小野遺跡』 2000
(4) えびの市教育委員会『北岡松地区遺跡群』 2010
(5) 同上
(6) 宮崎県教育委員会『野久尾遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』 1994
(7) 未発表である



第２図　島内地下式横穴墓群　遺構分布図

第３章　発掘調査

第１節　はじめに

地権者および耕作者からの通報は、全てが玄室の陥没ではなく、過去に調査してシラスを充填しきれなかった部分（玄室の頂部や竪坑上部閉塞タイプの竪坑内など）が再度陥没した墳墓もある。本書では、耕作機械の深耕や加重によって竪坑上部閉塞の板石が動いたり割れて崩落して空洞が見えて、通報された36号墓の竪坑と、新たに玄室の天井が陥没して発見された102～112号・116号・125～127号墓について報告する。

なお、111号墓は、既にシラスで充填してあり、僅かな凹み程度で、飼料作物の制約や農道下にあること等、悪条件が重なり、位置の確認のみに終わった。

第２節　基本的層序

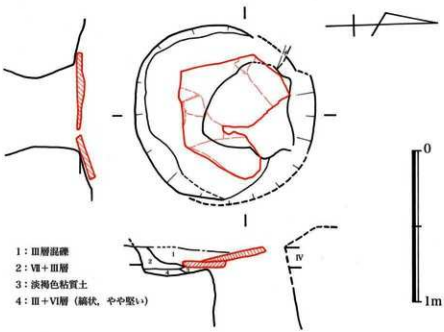
層序は上から、Ⅰ層：畑耕作土、Ⅱ層：旧耕作土・床土・客土、Ⅲ層：黒灰～黒褐色土、Ⅳ層：アカホヤ火山灰（BP7.300）、Ⅴ層：暗茶褐色＋黒褐色土、Ⅵ層：淡黒褐色土、Ⅶ層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土～細砂質土、Ⅷ層：段丘砂礫層（BC13,000）に分別した。Ⅶ・Ⅷ層には、小林軽石（BC13,000、黄白色～黄橙色降下軽石）を含む。Ⅷ層は、数10m間隔で起伏し、地形の原型を形成している。Ⅲ層はa・bに分かれ、厚さ10cm程のb層上面が古墳時代の遺構面である。

第３節　発掘調査

１．**ST-36の竪坑**（第３図）

地下式横穴墓分布域の中央北寄りに位置した36号墓の、竪坑上部閉塞の板石１枚が割れた状態で検出した。竪坑１段目は、長径1.24m・短径1.20mの円形を呈し、底面の南側は深さ20cmを測る斜面に整形される。２段目は幅60cmの歪つな形で北寄りに開口する。

開口は余裕の無い板石１枚で塞がれ、埋土の１層は追葬に伴うものと判



第３図　ST-36　竪坑　実測図

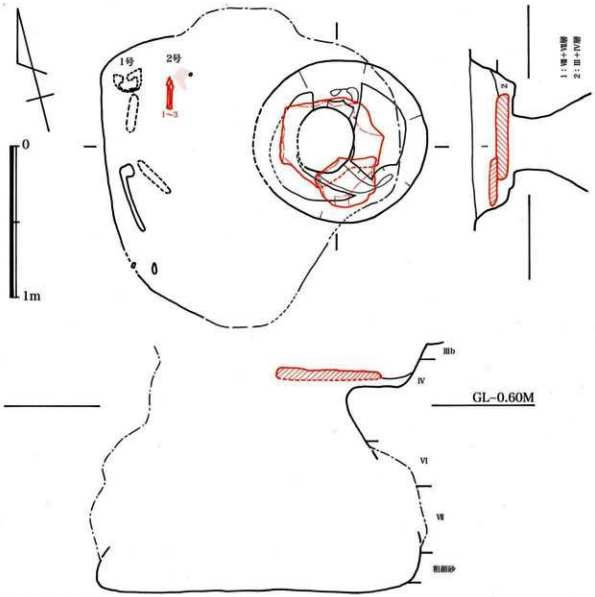
断した。削失は10㎝程と推定され、出土遺物は無い。

2．**ST-102**（第４図）

分布域の北西部、53号墓と58号墓の中間に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は、長径1.09～1.15mの円形を呈し、深さ23～29㎝を測る。底面は凹凸があり、中央やや北寄りに、長径43㎝・短径37㎝の開口を設け、板石２枚で塞いでいる。埋土からは、追葬は確認できない。開口から底面までは1.36mを測り、東壁以外は崩落しているため羨門～羨道部の詳細は不明であるが、平入り両袖タイプであることは確かである。

玄室は、幅2.0m・奥行き1.3～1.4mの隅円台形～隅円長五角形を呈する。天井は全て崩落し、形状不明である。主軸方位は、北である。

被葬者は２体であるが、遺存状態が悪い。頭部間の２号人骨寄りには、鉄鏃３本（**1～3**）が副葬されている。１号人骨は性別不明の壮年で、顔面には赤色顔料が認められた。２号人骨は、頭部の



第４図　ST-102　遺構実測図　　アミ目は赤色顔料

痕跡のみである。

出土遺物

鉄鏃は全て圭頭鏃であり、一括で副葬されている。

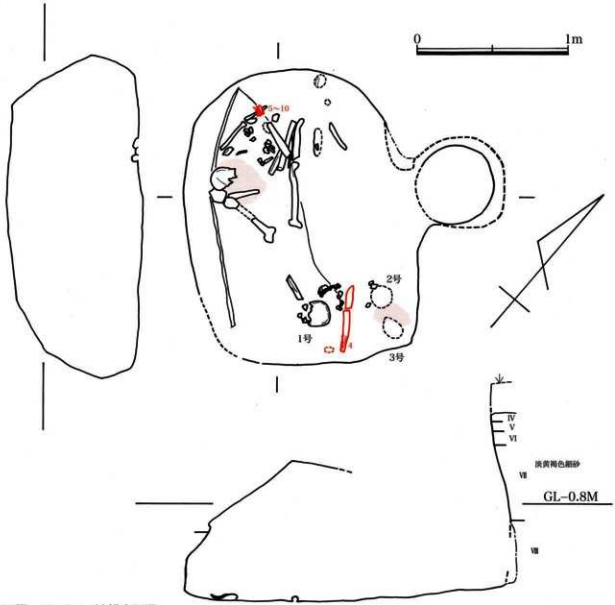
3．**ST-103**（第５図）

分布域の中央北寄りに位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑上位は削失し、閉塞板石も廃棄されている。土層的には、40㎝程の削失と推定される。開口部は、直径51～54㎝の円形を呈する。竪坑の遺存する深さは1.12～1.20mを測り、底面は羨門に向かって僅かに下降する。

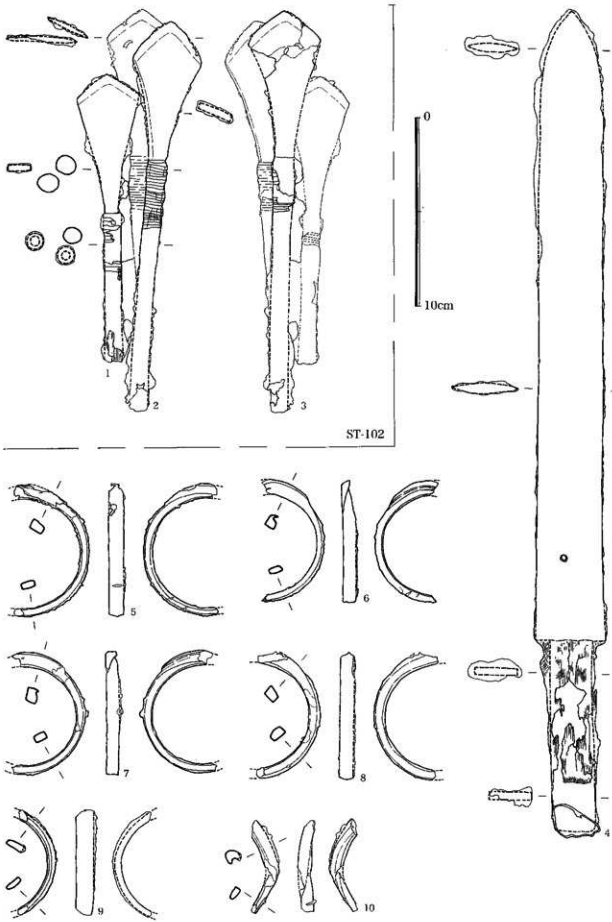
羨道部は崩落しているが、幅45㎝・長さ20㎝程である。

玄室は平入り両裾の半楕円半隅円方形プランで、寄棟の家型を呈し、奥壁のみ廂を有する。屍床は、幅1.96m・奥行き1.3～1.48m・高さ0.94mを測る。主軸方位は、南西である。

被葬者は遺存の悪い３体で、西頭位の１号人骨の足の上に南東頭位の２号人骨の右下肢が乗って



第５図　ST-103　遺構実測図



第6図　ST-102・103 出土遺物実測図

いる。1号人骨は老年女性で屈葬されており、左腕には、貝釧6点（**5**～**10**）を着装している。2号人骨は熟年の男性で、頭蓋前頭部に赤色顔料が認められた。左下肢は内側に曲がり、右側側頭部に短剣（**4**）が副葬されている。3号人骨は壮年後期の女性で、若干動いている頭部と、両下肢が遺存している。頭部には、赤色顔料が塗布されている。また、若年～壮年で性別不明の歯が混じっていた。

出土遺物

剣身には、直径2.5～3㎜の穿孔がある。貝釧は、屍床に接する下半を消失し、**9**・**10**の消失率が高い。

表1　ST-102・103出土遺物計測表

No	種類	法量（㎜）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
1	鉄鏃	(152)	13	33	
2	鉄鏃	(208)	22	36	

No	種類	法量（㎜）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
3	鉄鏃	(215)	16	38	
4	鉄剣	437	334	34	穿孔1

表2　ST-103出土貝釧計測表

No	法量（㎜）				材質
	外径	内径	幅	厚さ	
5	69	58	8	3～5	イモガイ
6	65	53	6	3～4	イモガイ
7	65	52	7	4～5	イモガイ

No	法量（㎜）				材質
	外径	内径	幅	厚さ	
8	66	54	8	3～6	イモガイ
9	60	50	5	2～4	イモガイ
10	59	44	7	2～6	イモガイ

4．**ST-104**（第7図）

103号墓の50m東に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑上位は10cm程の削失が推定されるが、1段目は1.3×1.5m程の楕円形を呈し、深さは15cm程と推定される。開口は、長さ48～50cmの不整形を呈し、深さは1.37mを測る。閉塞石は1枚であるが、崩落していた。羨道の高さは73cmで、長さ32～40cmを測る。

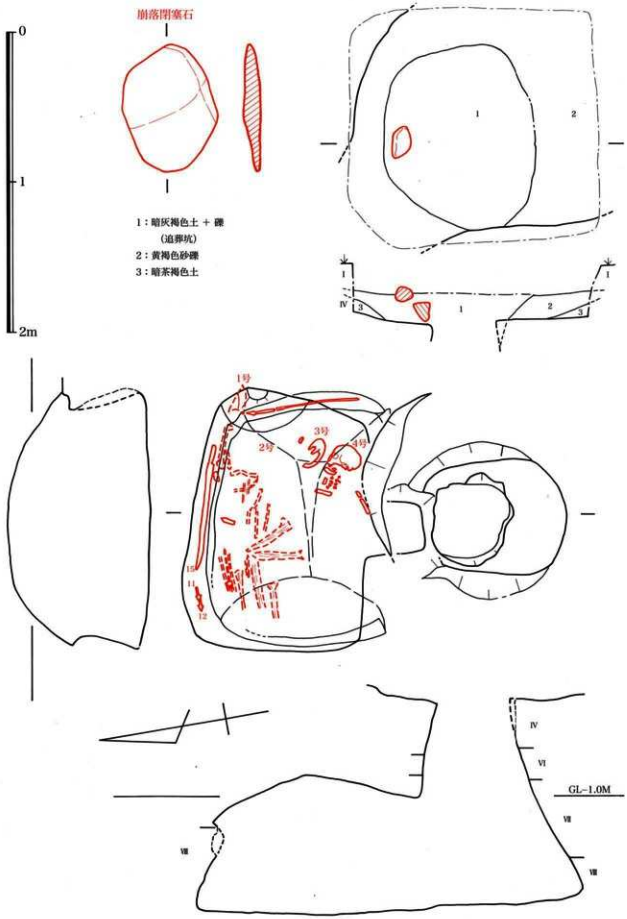
玄室は平入り両袖の隅円長台形プランで、3面に廂を有する寄棟の家型である。屍床は幅1.5～1.72m・奥行き1.04～1.20m、高さ0.92mを測る。廂は幅3～12cmを測り、副葬品を置いた東面の幅が広い。主軸方位は、北北東である。

被葬者は、東頭位の5体である。1号人骨は壮年の男性で、頭骨と右上腕、左右の腓骨が遺存し、上半身に赤色顔料が塗布されている。右（奥壁沿い）に大刀（**15**）と足先に鉄鏃2本（**11**・**12**）が副葬されている。2号人骨は、年齢・性別は不明で、廂面に鉄鏃2本（**13**・**14**）が置かれ、長さ56cmの矢柄の痕跡が明瞭であった。3号人骨は性別不明の幼児（5～6歳）で、遺存状態が最も悪い。4号人骨は熟年の女性で、主として頭骨と下肢骨が遺存する。右頭頂部に欠損があり、剣創と推定されている。5号人骨は、性別不明の幼児（5～6歳）で、歯のみ遺存する。

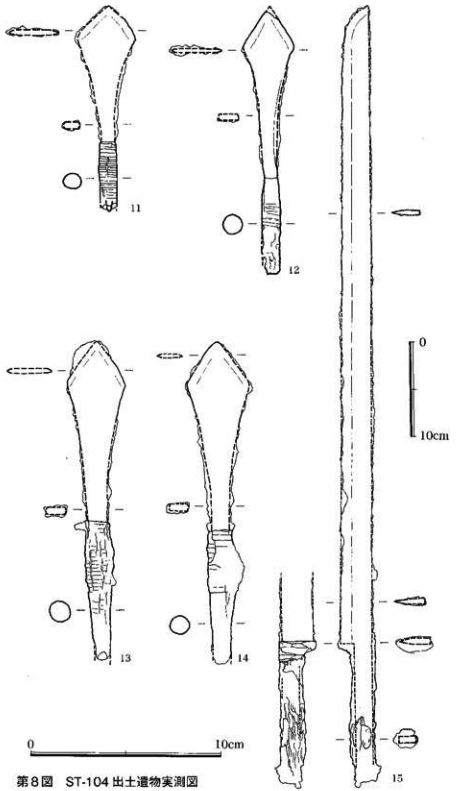
表3　ST-104出土遺物計測表

No	種類	法量（㎜）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
11	鉄鏃	108	17	30	
12	鉄鏃	132	(20)	27	
13	鉄鏃	(168)	21	30	

No	種類	法量（㎜）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
14	鉄鏃	(171)	23	33	
15	大刀	823	674	27～32	



第７図　ST-104　遺構実測図



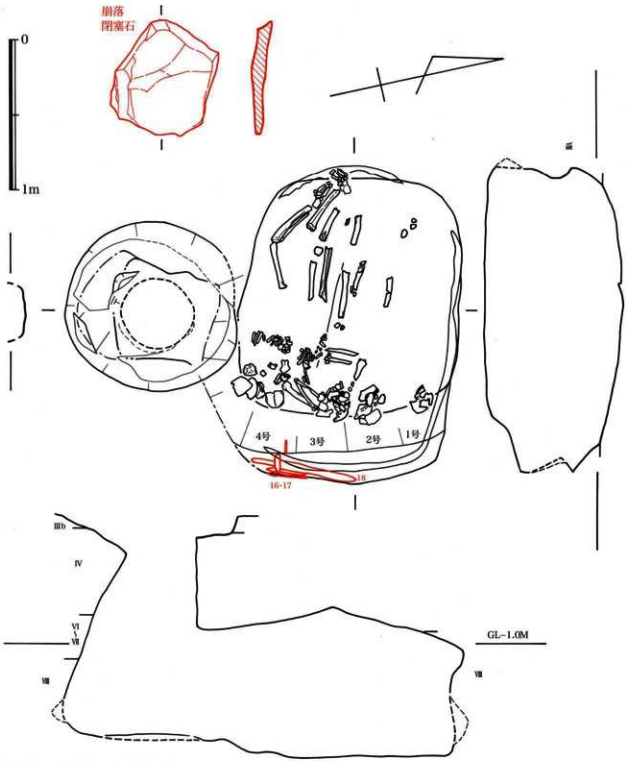
第8図　ST-104 出土遺物実測図

5．**ST-105**（第9図）

104号墓の南西に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。閉塞板石が農機に30度程起こされた状態で検出した。竪坑の1段目の掘形は直径1.12～1.18m・深さ12cm程で、南やや東寄りはスロープ状になるが、他は平坦である。開口部は直径46～48cm・深さ1.24～1.34mを測る。羨門は幅38cm、高さ72cmで、羨道は長さ20cmを測る。

玄室は、1段（10cm）下がる平入り両袖の隅円長方形プランで、北西隅の途切れる3面廂を有する切妻タイプの家型を呈する。壁面の底部は砂礫が崩落して形状不明であるが、屍床の東壁寄りは幅14～22cmの1段（14～20cm）高い面がある。屍床は、最大幅2.02m・奥行き1.22～1.46m・高さ0.99mを測る。主軸方位は、北北東である。

被葬者は、南東頭位の4体として取り上げたが、5体以上らしい。1号人骨は性別不明の幼児（3～4歳）で、頭蓋と下肢が遺存する。前頭部から顔面には赤色顔料が塗布されている。2号人骨は性別不明の壮年で、顔面部に赤色顔料が塗布されている。3号人骨は熟年の男性で、頭蓋の顔面部に赤色顔料が塗布されている。4号人骨は壮年後期の男性で、上半身に赤色顔料が塗布されている。鉄剣1振（**18**）と鉄鏃2本（**16・17**）が副葬されている。

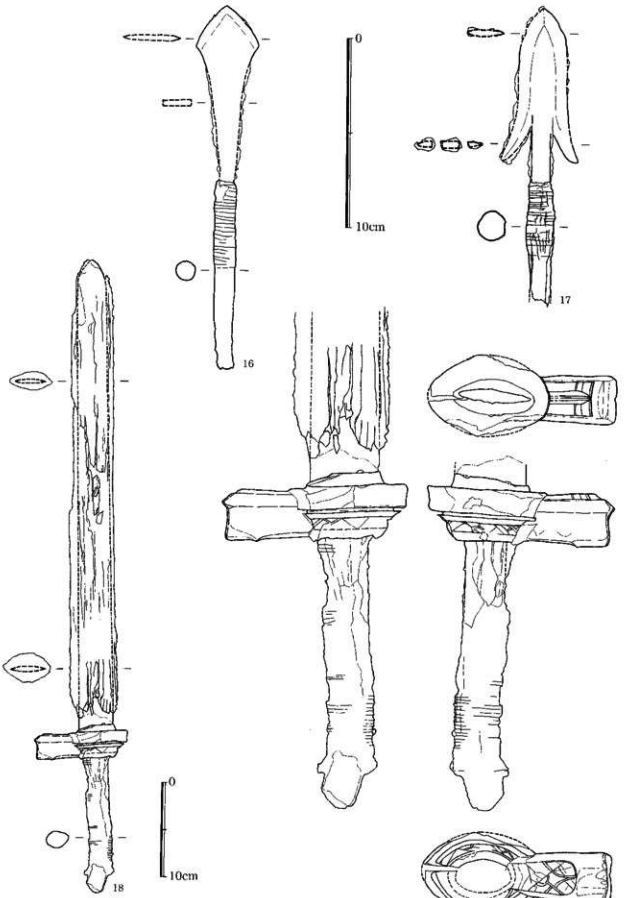


第9図　ST-105　遺構実測図

表4　ST-105 出土遺物計測表

No	種類	法　量（mm）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
16	鉄鏃	(192)	21	33	
17	鉄鏃	(159)	83	25～41	

No	種類	法　量（mm）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
18	鉄剣	668	491	32～36	鹿角装

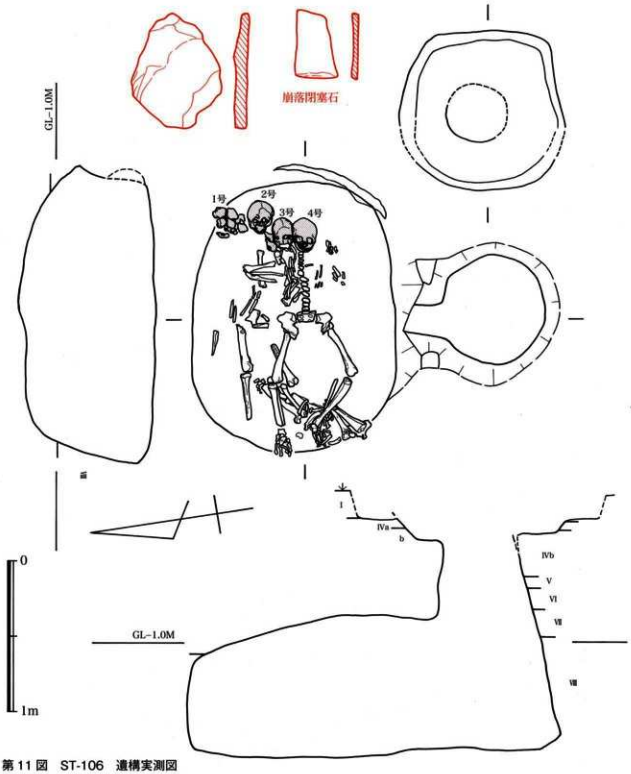


第 10 図　ST-105 出土遺物実測図

6．**ST-106**（第11図）

105号墓の東に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑１段目は、直径1.1mの半円半台形を呈し、深さ９～14cmが遺存する。開口は直径38～40cmの円形を呈し、深さ1.42mを測る。上部は板石２枚で閉塞されていたが、農機に位置をズラされた。

羨門は高さ85cmで、天井の長さは20cm、底面の長さ38cmを測る。玄室は１段（５cm）下がる平入



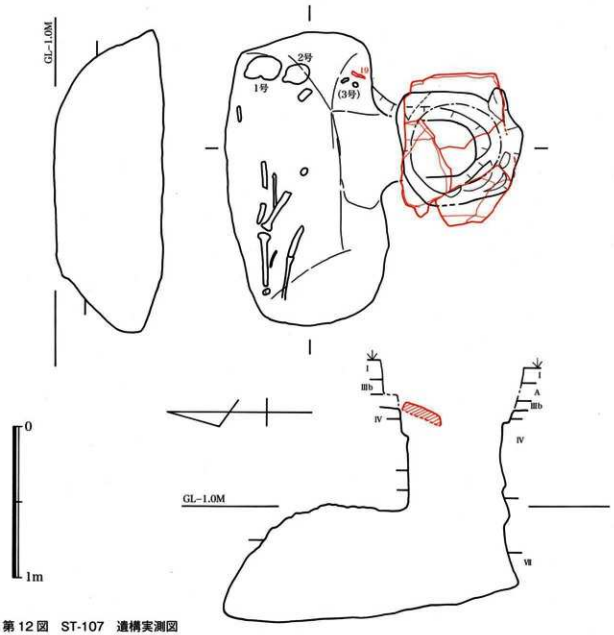
第11図　ST-106　遺構実測図

り両裾の楕円形タイプで、西壁のみ廂を有する。屍床は幅1.78m・奥行き1～1.34m、高さ0.9mを測る。主軸方位は、北である。

被葬者は東頭位の4体で、副葬品・着装品は無い。1号人骨は性別不明の幼児(5～6歳)で、頭蓋片に赤色顔料が認められる。2号人骨は熟年の女性で、頭蓋と下肢が遺存する。前頭部から顔面には赤色顔料が塗布されている。3号人骨は老年の女性で、前頭部と左肩甲骨に赤色顔料が付着する。4号人骨は壮年後期の女性で、埋葬時に3号人骨を押しており、2号人骨も若干押されている。前頭部から顔面部には、赤色顔料が塗布されている。脳頭蓋のブレグマ後方に浅い凹みがあり、頭上前方運搬が推定される。

7．**ST-107**（第12図）

105号墓の南西50mに位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は、長径93㎝・短径78㎝の



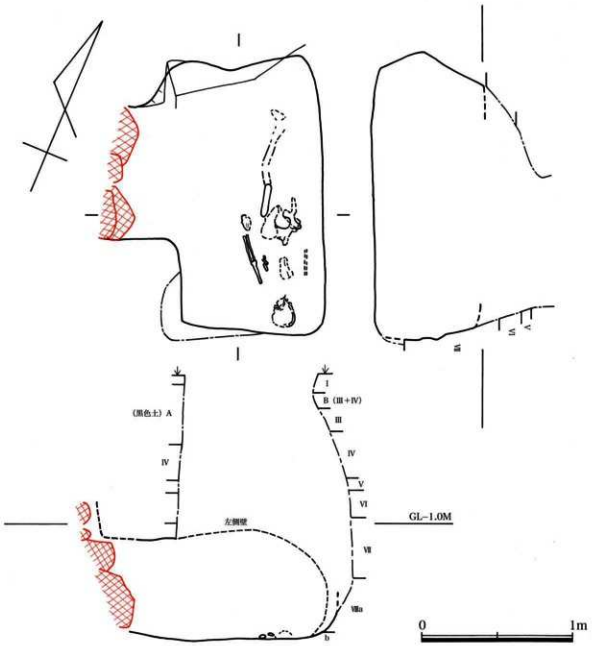
第12図　ST-107　遺構実測図

歪つな形を呈し、板石１枚で閉塞されている。15～20㎝下で直径60㎝前後の不整円形になる。深さは、1.22～1.30mを測り、玄室に向かって下降する。

羨門は、高さ65㎝、羨道の天井の長さ20㎝、底面の長さ40㎝を測る。

玄室は平入り両袴の長楕円形タイプで、寄棟の家型を呈する。廂は無く、屍床は幅1.91m・奥行き0.9～1.0m、高さ76㎝を測る。主軸方位は、北である。

被葬者は、東頭位の２体か３体である。１号人骨は、熟年の女性で、前頭部から顔面部に赤色顔料が塗布され、頭上前方運搬が推定される浅い凹みがある。２号人骨も熟年の女性で、前頭部に赤色顔料が認められる。60㎝ほど手前には刀子(**19**)と骨片があり、３号人骨が存在した可能性がある。刀子は鹿角柄で長さ125㎜・刃部長80㎜・幅９㎜を測る。



第13図　ST-108　遺構実測図

8．**ST-108**（第13図）

県指定１号墳の裾から北西へ18m程、45号墓の西側で陥没した、羨門アカホヤ塊閉塞タイプである。竪坑は未調査であり、玄室は天井の殆どが崩落している。

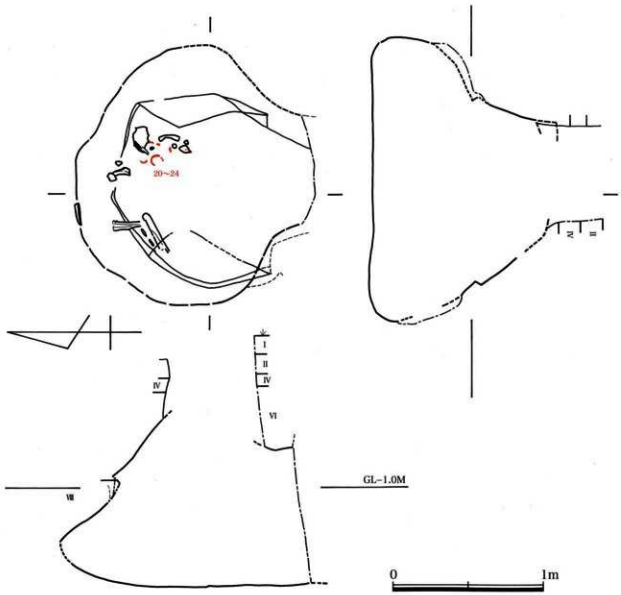
玄室は平入り両裾(左右非対称)の長方形プランで、寄棟の家型を呈する。明瞭な廂は確認されなかった。屍床は、幅1.75～1.85m・奥行き96cm、高さ70～74cmを測る。主軸方位は、北東である。

被葬者は熟年の女性１体で、顔面部に赤色顔料が付着する。頭位は東南。遺存状態は悪いが、低身長である。副葬品は無い。

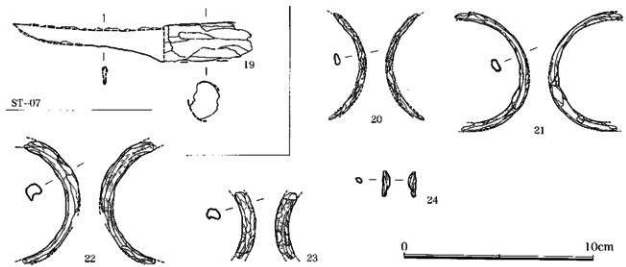
9．**ST-109**（第14図）

103号墓の北西に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は、シラスと農業用廃棄ビニールで埋められていた。土層的には、30～40cmの削失が推定される。

玄室は平入り両裾の略円形～円形タイプで、寄棟の家型を呈する。屍床は、幅1.72m・奥行き



第14図　ST-109　遺構実測図



第15図　ST-107・109　出土遺物実測図

1.28m、高さ1.1m（推定1.2m）を測る。廂は3面に設けられ、西側は弧状になる。主軸方位は、北である。

被葬者は東頭位の1体で、熟年の男性である。屍床には赤色顔料が塗布され、頭部周辺に貝釧5点が散在（崩落・流入上の影響）している他は副葬品は無い。

表5　ST-109 出土貝釧計測表

No	法量（mm）				材質
	外径	内径	幅	厚さ	
20	62	53	5	2～3	イモガイ
21	62	53	6～7	3～4	イモガイ
22	67	50	7～8	6	イモガイ

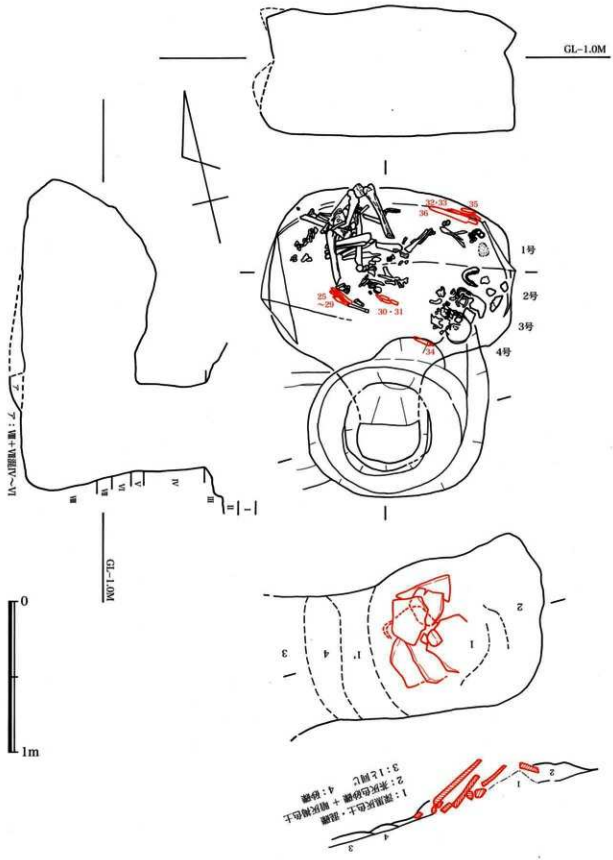
No	法量（mm）				材質
	外径	内径	幅	厚さ	
23	57	44	6	4	イモガイ
24	--	--	--	--	イモガイ

10. **ST-110**（第16図）

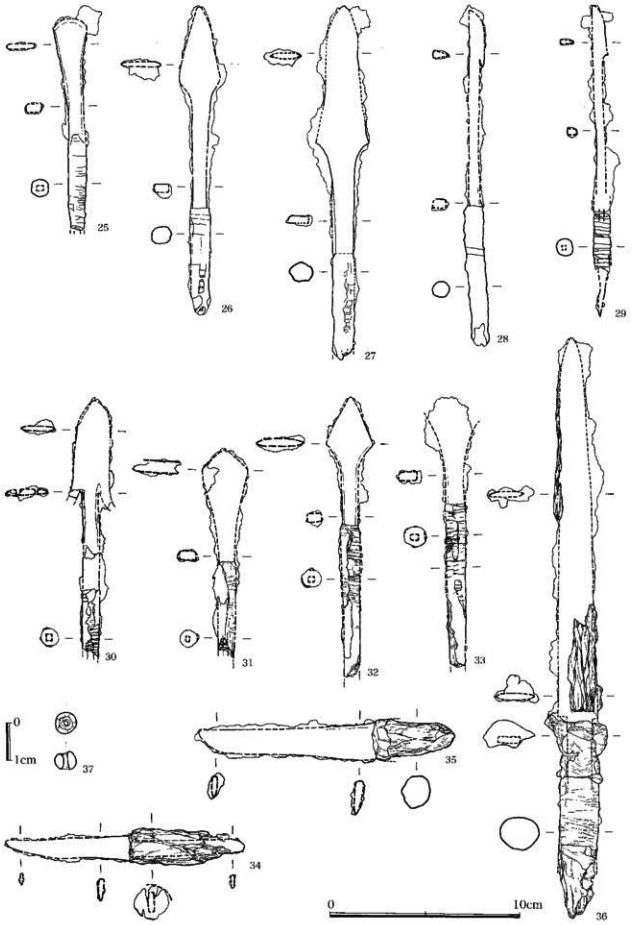
分布域の北西部に位置した、竪坑上部閉塞タイプである。竪坑掘形は、溝状掘込と重複し、1段目は、長径1.17m・短径0.91mの楕円形を呈し、深さ5～7cmを測る。開口部は、直径57cmの不整円形で、小さい板石9枚で閉塞されている。底面までの深さは1.22mである。羨門部はさらに10cm下がるが、貼り床的に埋まっている。羨道の天井の長さは、20cmである。

玄室は、平入り両袖の楕円形タイプで、切妻の家型を呈する。廂は曖昧になり、両側壁部は急角度に、奥壁部は垂直になっている。棟は左右が大きくズレたにもかかわらず修正していない。屍床は、幅1.61m・奥行き1.1m、高さ0.87mを測る。主軸方位は、北北東である。

被葬者は4体で、1・2号人骨の遺存状態が悪い。1号人骨は性別不明の小児（9～10歳）で、頭部右側に、短剣1振（**36**）と刀子1本（**35**）、鉄鏃2本（**32・33**）が副葬されている。2号人骨は、若年（18～20歳）の男性であり、顔面部に赤色顔料が塗布されている。膝を曲げ、1号人骨側に倒れている。3号人骨は壮年の女性で、鉄鏃2本（**30・31**）を伴う可能性が高い。4号人骨は熟年の男性で、膝を曲げ、3号人骨側に倒れている。頭部左の刀子1本（**34**）と腹部の鉄鏃5本（**25～29**）



第16図　ST-110　遺構実測図



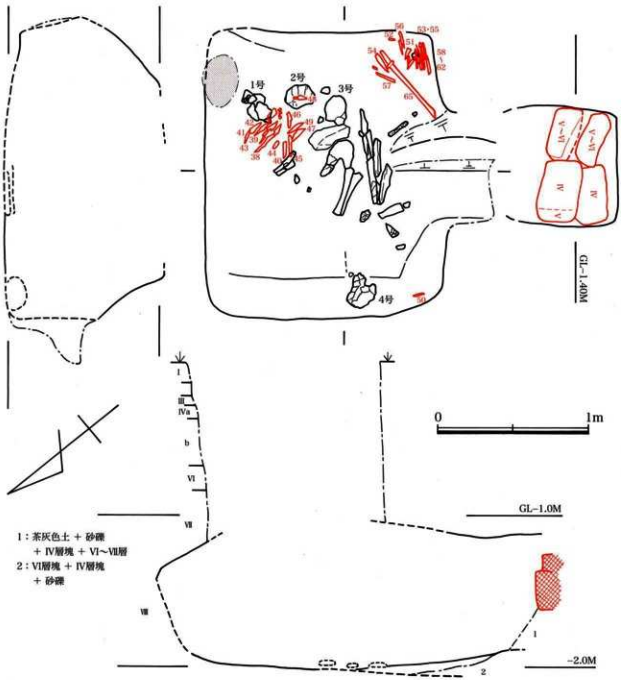
第17図　ST-110出土遺物実測図

が副葬されているほか、取上人骨の脛骨・肩甲骨の中から、直径4.7㎜の黄緑色のガラス小玉1点(37)が検出されている。

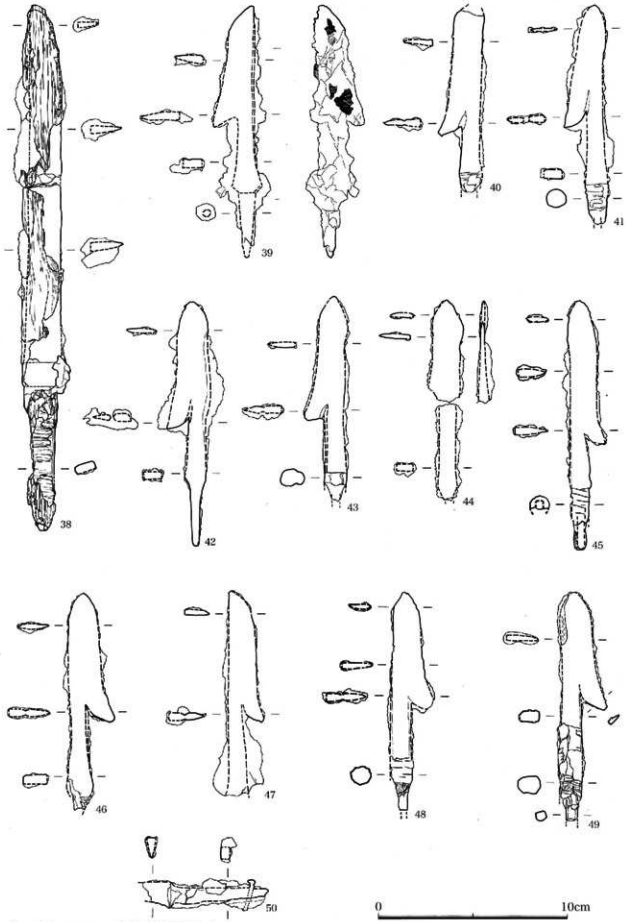
表6　ST-110 出土遺物計測表

No	種類	法　量（㎜）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
25	鉄鏃	(115)	5	17	
26	鉄鏃	(161)	40	21	
27	鉄鏃	185	72	16～28	
28	鉄鏃	180	32	8	
29	鉄鏃	165	22	7	
30	鉄鏃	(138)	(55)	18～29	

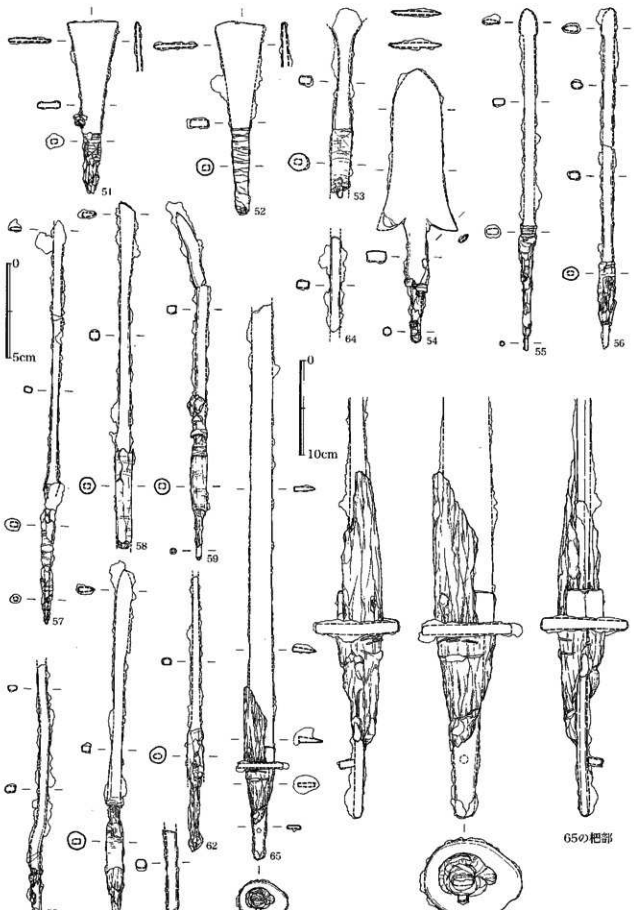
No	種類	法　量（㎜）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
31	鉄鏃	114	11	24	
32	鉄鏃	(149)	25	24	
33	鉄鏃	(85)	–	–	
34	刀子	126	66	13	
35	刀子	137	92	19	
36	短剣	306	199	20	



第18図　ST-112　遺構実測図



第19図　ST-112出土遺物実測図（1）



第20図　ST-112 出土遺物実測図（2）

11. **ST-112**（第18図）

分布域の南側中央寄りに位置した、羨門アカホヤ塊閉塞タイプである。天井は大きく崩落し、人骨が潰れていた。羨門下半はⅢ～Ⅶ層上で、上半をアカホヤ塊で閉塞している。

玄室は平入り両袖の隅円長方形タイプで、寄棟の家型を呈する。壁面下部の砂礫層は崩落し、扉の有無は不明である。屍床は、幅1.90m・奥行き1.50 ～ 1.60m、高さ1.08mを測る。主軸方位は、北東である。

被葬者は、南東頭位の３体と北西頭位の１体であるが、遺存度が悪い。１号人骨頭部の右側屍床には赤色顔料があり、初葬の痕跡の可能性が高いが、骨が遺存していないことから、被葬者に含めていない。１～４号人骨は遺存が悪く、年齢・性別は不明であるが、成人１体と小児（６歳）１体が確認された。２号人骨には小刀１振(**38**)と鉄鏃11本(**39～49**)を伴う可能性がある。鉄鏃の１本(**48**)が頭の上に乗っていたことと、全て同一形式の片刃鏃であることから、一括性が高い。４号人骨は、頭位を逆にして、頭部右側に刀子１本(**50**)を、足先に鉄刀１振(**65**)と鉄鏃13本か14本(**51 ～ 64**)が副葬されている。鉄鏃のうち、長頸鏃は束になっていた。

表７　ST-112 出土遺物計測表

No	種類	法量（mm）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
38	小刀	280	186	20	
39	鉄鏃	134	64	14～22	
40	鉄鏃	(96)	(67)	15～22	
41	鉄鏃	118	65	13～21	
42	鉄鏃	130	62	16～21	
43	鉄鏃	(109)	67	15～21	
44	鉄鏃	(106)	(46)	14～(17)	
45	鉄鏃	132	77	14～19	
46	鉄鏃	(115)	68	16～23	
47	鉄鏃	(109)	70	14～19	
48	鉄鏃	(115)	62	14～23	
49	鉄鏃	(121)	63	16～24	布痕
50	刀子	(62)	52	15	
51	鉄鏃	91	--	26	

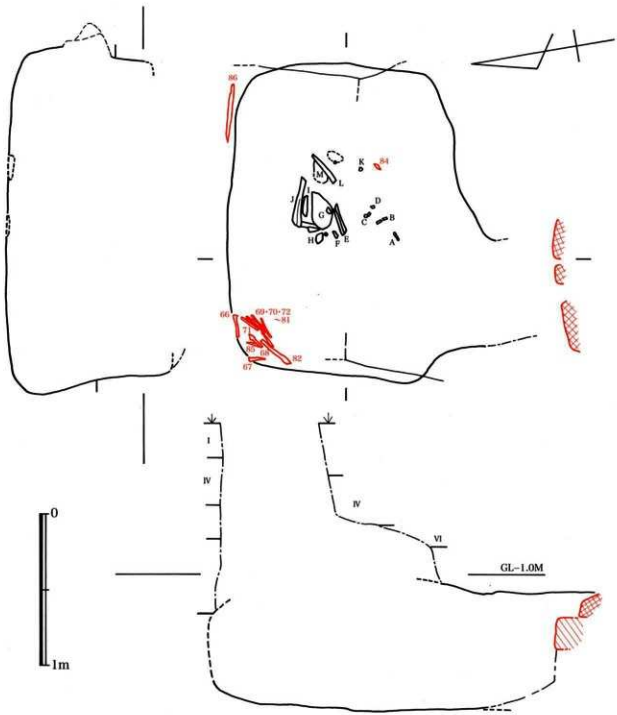
No	種類	法量（mm）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
52	鉄鏃	102	--	26	
53	鉄鏃	(101)	--	--	
54	鉄鏃	145	85	26～43	
55	鉄鏃	181	15	8	
56	鉄鏃	181	10	8	
57	鉄鏃	215	(12)	(7)	
58	鉄鏃	(183)	5	8	
59	鉄鏃	188	20	6	
60	鉄鏃	(131)	--	--	
61	鉄鏃	191	15	9	
62	鉄鏃	(150)	--	--	
63	鉄鏃	(45)	--	--	
64	鉄鏃	(50)	--	--	
65	鉄刀	(586)	(483)	22～24	

12. **ST-116**（第21図）

分布域の南縁中央寄りに位置した、羨門アカホヤ塊閉塞タイプである。人骨は崩落天井に潰されていたが、遺存度も悪い。

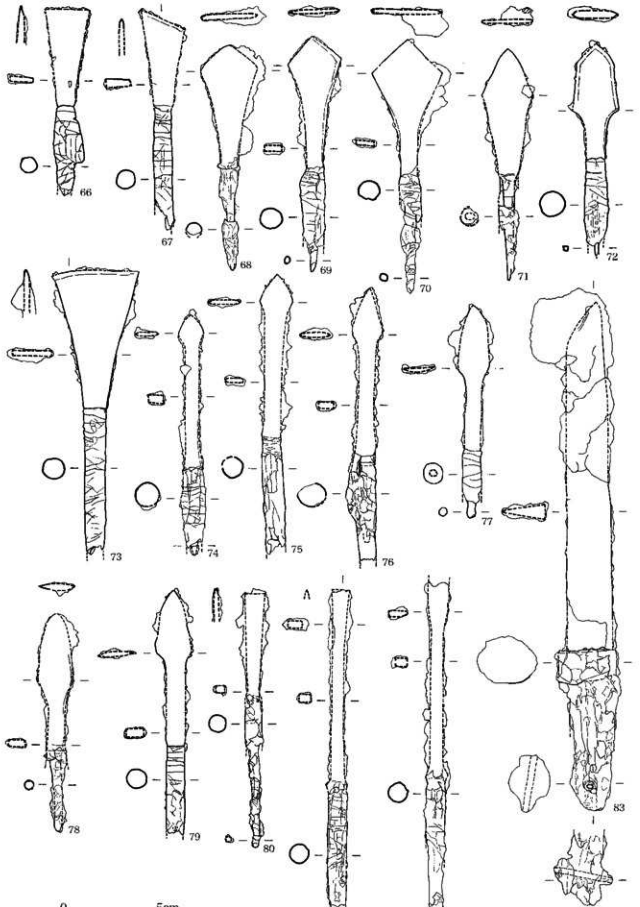
玄室は、平入り両袖の長方形タイプで、切妻の家型を呈する。扉は無い。屍床は、幅2.05m・奥行き1.3 ～ 1.44m、高さ0.9 ～ 1.1mを測り、西側のほうが高い。主軸方位は、北北東である。

被葬者は２体(成人男性と成人)であるが、頭部が中央寄りにあり、天井崩落による岩干の移動も加味されるが、北頭位の屈葬もしくは改葬的行為が推測される。奥壁右側には、長さ38cm・幅２～３cmの、菌糸塊状に風化した茶褐色の有機物があり、取り上げ時には軟質部は崩壊し、木質が誘着した両頭金具[(1)]５点が(**86a ～ e**)が遺った。中央寄りには、刀子１点(**84**)が、左奥には、ハエ埴設が付着した刀子１本(**85**)と鉄鏃17本(**66～82**)が副葬されている。刀子と鉄鏃17本は一括であるが、

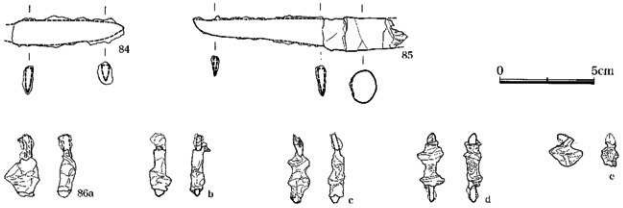


第 21 図　ST-116　遺構実測図

65 ～ **68**・**71**・**82**・**84**が一本ずつ、残りが束で置かれた可能性がある。鉄鏃は圭頭鏃を主体とし、方頭・三角形・長頸鏃が混じる。



第 22 図　ST-116 出土遺物実測図（1）



第23図　ST-116出土遺物実測図（2）

表8　ST-116出土遺物計測表

No	種類	法量（mm）（）は現存 全長	刃部長	刃部幅	備考
66	鉄鏃	99	--	23	ハエ鏃型
67	鉄鏃	91	12	22	
68	鉄鏃	119	14	30	
69	鉄鏃	124	14	27	
70	鉄鏃	134	18	36	
71	鉄鏃	122	25	27	
72	鉄鏃	114	37	20~25	
73	鉄鏃	(152)	--	45	
74	鉄鏃	129	10	13	
75	鉄鏃	(149)	14	17	
76	鉄鏃	(144)	24	15	
77	鉄鏃	113	34	16	
78	鉄鏃	115	34	17	

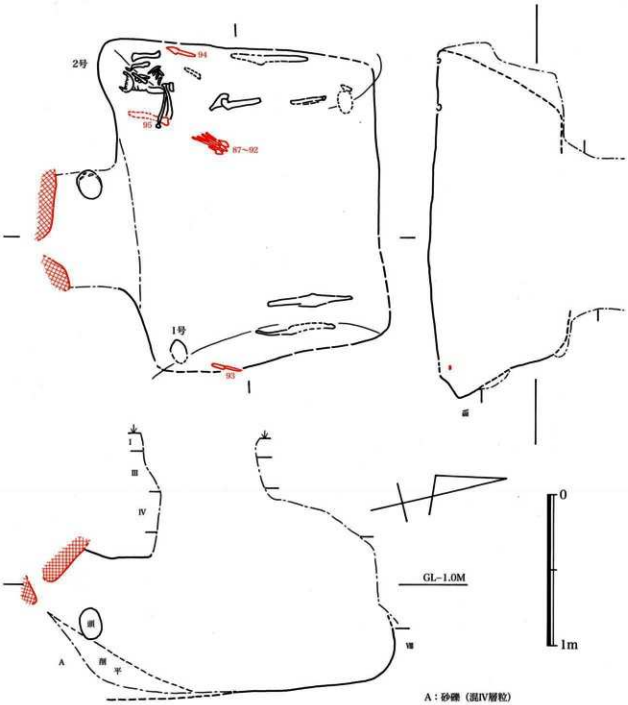
No	種類	法量（mm）（）は現存 全長	刃部長	刃部幅	備考
79	鉄鏃	127	32	18	
80	鉄鏃	137	--	10	
81	鉄鏃	171	--	9	
82	鉄鏃	175	--	(11)	
83	小刀	276	184	23	
84	刀子	(58)	57	13	
85	刀子	113	68	14	
86 a	弓金具	32	--	--	両脚金具
b	弓金具	33	--	--	a～eで1個体
c	弓金具	(36)	--	--	
d	弓金具	36	--	--	順序不詳
e	弓金具	17	--	--	

13. **ST-125**（第24図）

分布域の東側中央付近に位置した、羨門アカホヤ塊閉塞タイプである。玄室の下半分が砂礫層内であることから、天井の殆どが崩落していた。幅70cm程の羨道は、長さ45cm・高さ90cm程である。底面から55cmまでは砂礫を主とする土層(A)で埋められ、アカホヤ塊数個で閉塞している。

玄室は、半人り両袖の台形タイプで、寄棟の家型を呈する。廂の有無は、不明である。屍床は、幅1.8～2.2m・奥行き1.6～1.8mを測る。羨門部では高さ90cmを測り、中心部も同じ位であろうと推定される。2号人骨の埋葬時、頭部をきっちり入れ込むために、壁面が南へ10cmほど抉られている。主軸方位は、ほぼ北である。

被葬者は南頭位の2体で、1号人骨は右側壁の遺存状態が悪い性別不明の壮年で、歯も確認されなかったが、前頭部から顔面に赤色顔料が認められた。脾骨は、崩落土塊によってlm平に潰れている。右腕部に相当する場所に、刀子1点（**93**）が副葬されている。2号人骨は壮年の男性で、左側壁沿いに置かれ、胸部左半身の遺存状態が良い。顔面と頭頂から後頭の右半分に赤色顔料が塗布された頭骨は、東に75cm・垂直に40cm上の羨道中位に離れた位置で、顔面を西に向けて据え置かれていた。右肘の下には弓金具4点（**95**）が、長さ26cm・幅3～4cm程の茶褐色風化有機物（繭糸の塊状）

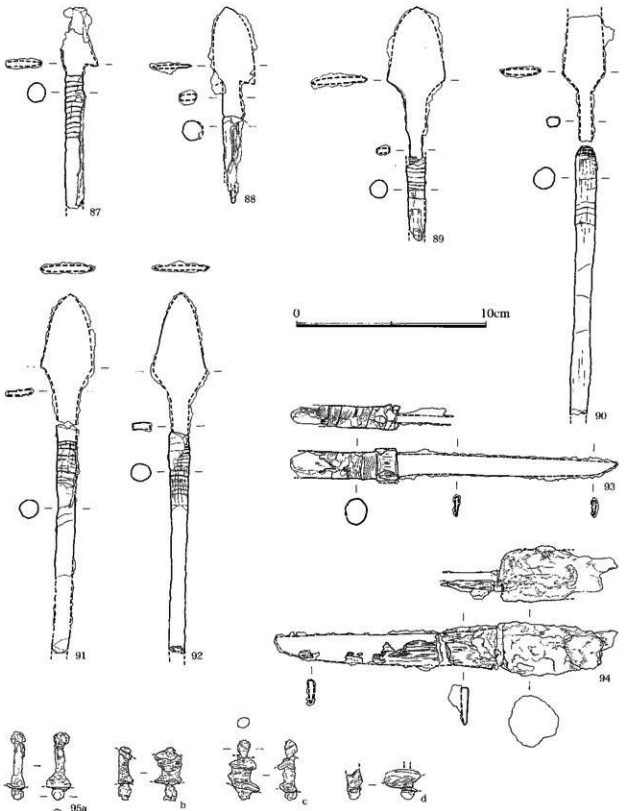


第24図　ST-125　遺構実測図

の中に1～2㎝間隔で入っていた。右腰部には、鉄鏃6本の束（**87**～**92**）が、左前腕部に刀子1本（**94**）が副葬されている。

人骨の遺存度からみると、1号→2号の順に埋葬され、赤色顔料塗布後、羨門閉塞時もしくはそれ以降に頭部に対する追悼が行われたと推定される。

鉄鏃は腐蝕が進んでいるが、大型の長三角形を主とする。**93**の刀子の把部は幅8～10㎜の樺が巻かれ、幅10㎜の木質（皮か）の鞘がある。



第25図　ST-125　出土遺物実測図

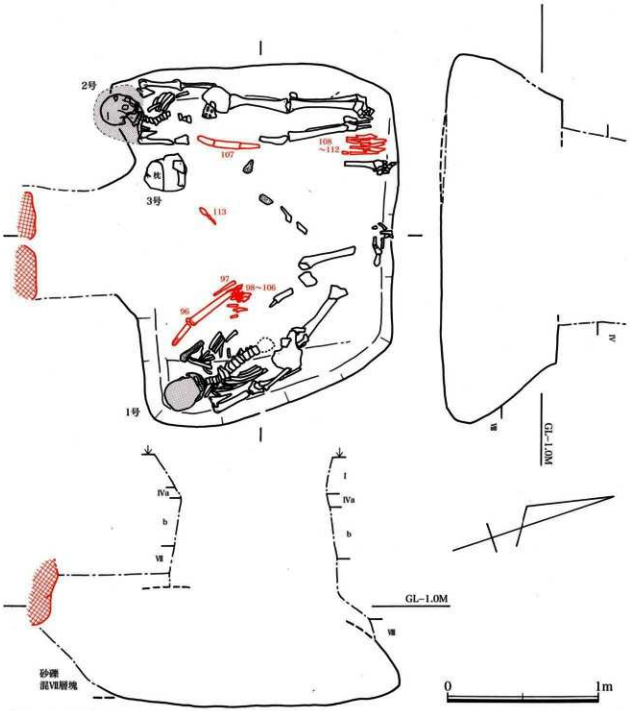
表9　ST-125 出土遺物計測表

No	種類	法　量（mm）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
87	鉄鏃	(106)	(14)	(20)	
88	鉄鏃	104	40	21	
89	鉄鏃	(124)	39	30	
90	鉄鏃	(66)+(142)	(30)	21	
91	鉄鏃	(190)	39	27	
92	鉄鏃	(192)	42	28	

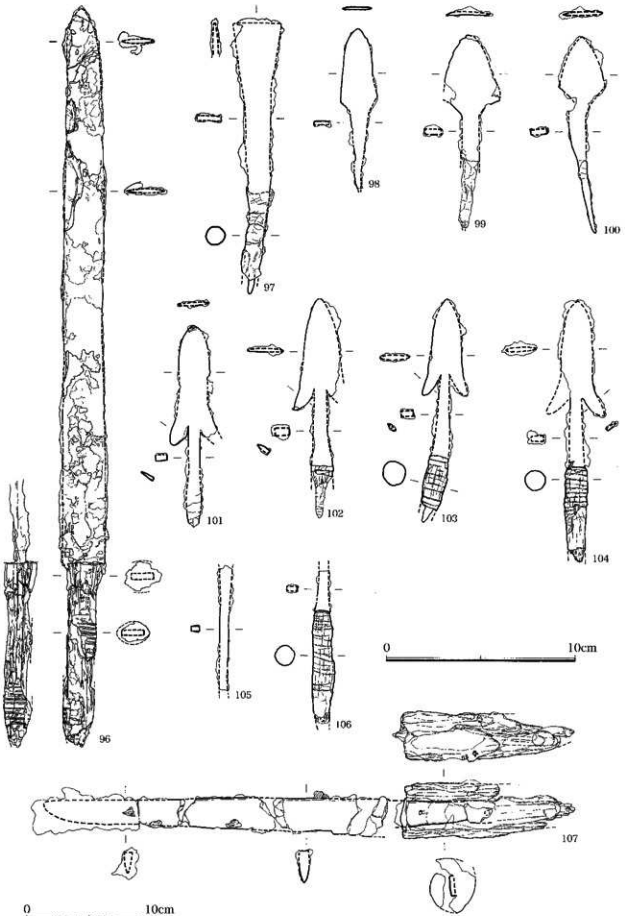
No	種類	法　量（mm）（）は現存			備　考
		全長	刃部長	刃部幅	
93	刀子	(172)	116	7～11	把部樺巻
94	刀子	(181)	113	10～21	
95 a	弓金具	36	--	--	
b	弓金具	28	--	--	両頭金具
c	弓金具	31	--	--	a～dで1個体
d	弓金具	(16)	--	--	

14. **ST-126**（第26図）

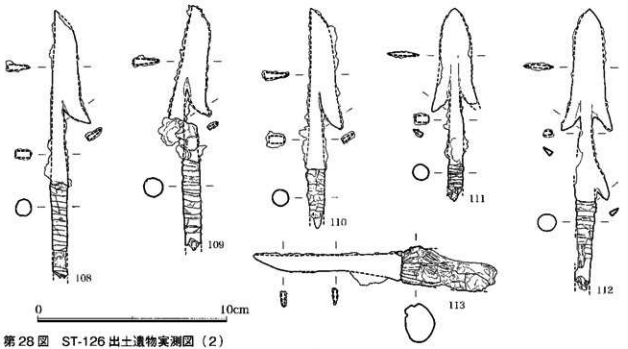
125号墓の北東部に位置した、羨門アカホヤ塊閉塞タイプで、125号墓と類似し、天井の殆どが



第 26 図　ST-126　遺構実測図



第27図　ST-126　出土遺物実測図（1）



第28図　ST-126出土遺物実測図（2）

崩落していた。羨道は長さと幅が80cm程、高さ74cmとみられるが、天井の崩落が著しい。玄室は半入り両袖の台形タイプで、幅1.7～2.3m・最大幅2.38m・奥行き1.66～1.85mを測り、左側壁南端は、125号墓と同様の抉りがある。天井は高さ80cmで、寄棟タイプ、廂は無いと思われる。

被葬者は、南頭位3体である。右側壁の1号人骨は成人の男性で、下半身は大きく西へ湾曲している。頭部には、やや紫がかった赤色顔料が塗布されている。左腕部には、鉄剣1振（**96**）と鉄鏃10本（**97**～**106**）が副葬されている。鉄鏃は、やや広がって出土しているが、崩落土塊によるものと推定され、副葬時は束であったと思われる。

左側壁の2号人骨は壮年の男性で、頭部に薄く赤色顔料が塗布されている。前頭骨左側には治癒が認められる陥没孔がある。右腰部に小刀1振（**107**）が、足先に鉄鏃5本（**108**～**112**）が副葬されている。3号人骨は、2号人骨の右上腕に一部乗る土塊を枕にした成人の女性で、右腕部に刀子1本（**113**）が副葬されている。

遺存する剣の把部は全て木製の樺巻きであり、小刀の木製把部は膨張・鉄化している。鉄鏃2群の型式構成は異なり、1号人骨に伴う鉄鏃の方が多型式で片刃鏃を伴わず、時期差が窺える。

表10　ST-126出土遺物計測表

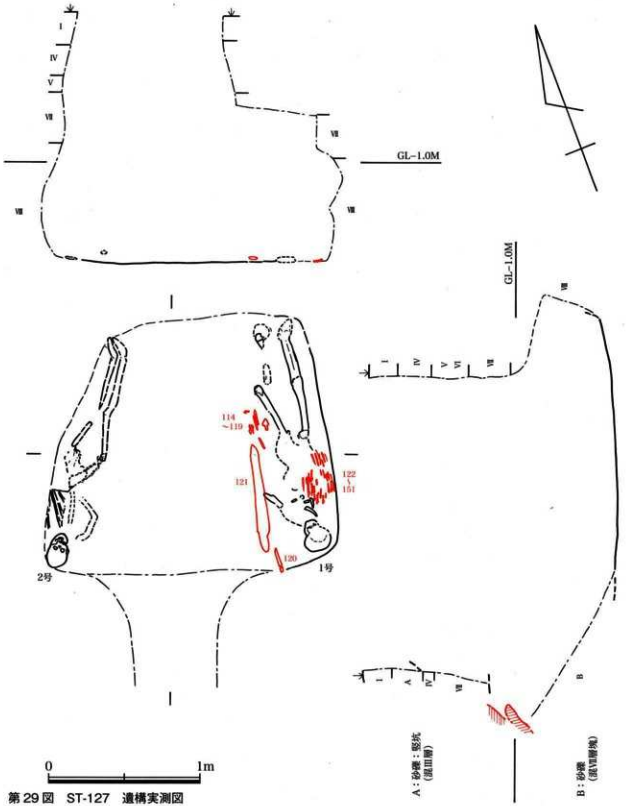
No	種類	法量（mm）（）は現存 全長	刃部長	刃部幅	備考
96	鉄剣	(596)	450	25～34	
97	鉄鏃	144	--	(23)	
98	鉄鏃	(84)	40	25	
99	鉄鏃	(101)	35	(28)	
100	鉄鏃	104	26	25	
101	鉄鏃	107	63	16～(25)	
102	鉄鏃	116	59	(21)	
103	鉄鏃	119	52	24	
104	鉄鏃	149	61	(17)	

No	種類	法量（mm）（）は現存 全長	刃部長	刃部幅	備考
105	鉄鏃	(66)	--	--	
106	鉄鏃	(80)	--	--	
107	小刀	(275)-(144)	(261)	20～31	折れ面は古い
108	鉄鏃	(142)	59	12～14	
109	鉄鏃	(129)	57	12～16	
110	鉄鏃	116	64	11～15	
111	鉄鏃	102	55	16～(24)	
112	鉄鏃	(149)	64	15～27	
113	刀子	(128)	75	8～15	

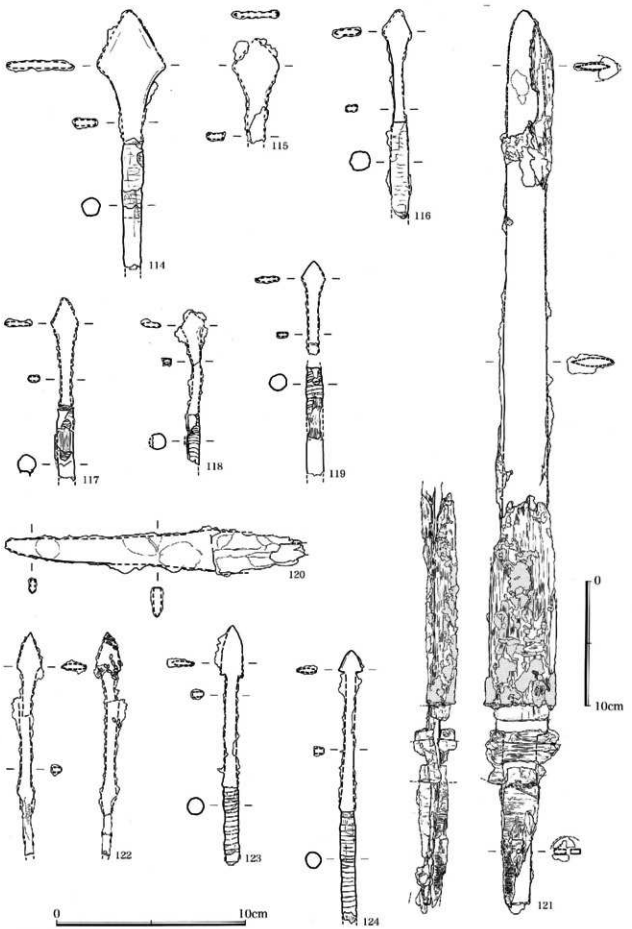
15. **ST-127**（第29図）

分布城の中央やや東寄りに位置した、羨門板石閉塞タイプで、天井全てが崩落していた。羨道は長さと高さが80cm程、幅50cm程と推定される。羨道上の崩落壁には、竪坑の掘形と埋土の一部（A層）が見える。玄室は、平入り両裾の台形タイプで、幅1.3～1.94m・奥行き1.66mを測る。

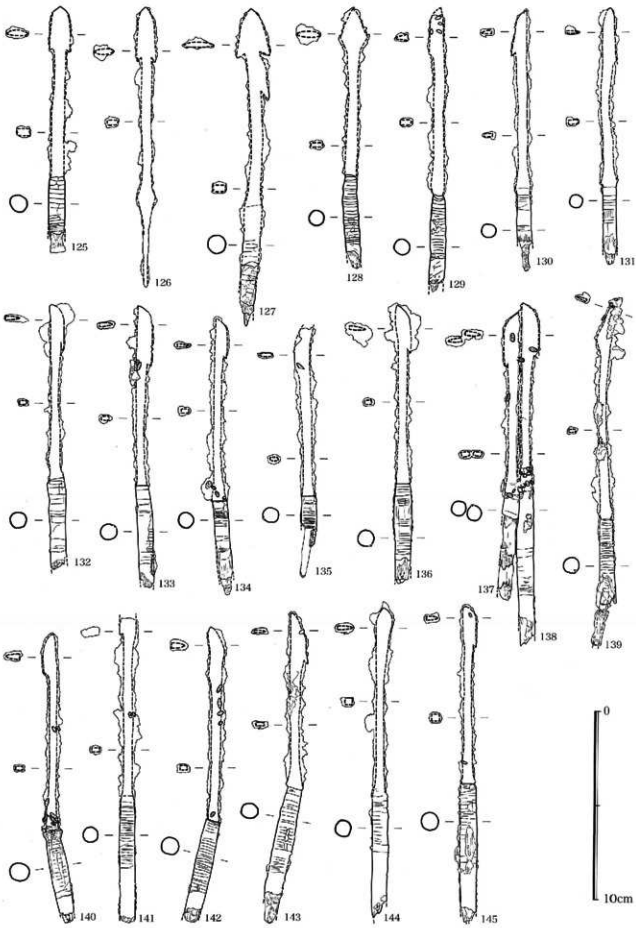
被葬者は、南頭位の２体である。右側壁の１号人骨は、壮年の男性である。前頭部から頸部にか



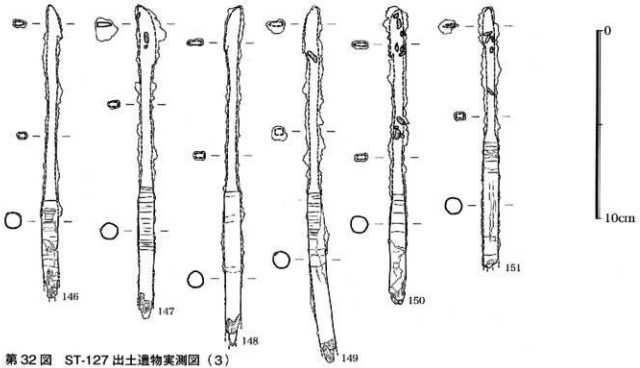
第29図　ST-127　遺構実測図



第30図　ST-127出土遺物実測図（1）



第 31 図　ST-127 出土遺物実測図（2）



第32図　ST-127出土遺物実測図（3）

けて赤色顔料が認められる。頭骨顔面は東を向いていたが、下顎が仰向けであることから、何らかの原因で東に横転したものと思われる。頭骨左側に刀子1本（120）が、左腕側に鉄剣1振（121）と鋒部に鋒を刀子・剣と同方向の奥側に向けた鉄鏃6本（114～119）が、右前腕～腹部にかけて鋒が手前に向けられた鉄鏃30本（122～151）が副葬されていた。腹部の鉄鏃には、ハエ鏑殻が大量に付着していた。このうち東端5本程には20cm程の矢柄が遺存していたが、取り上げ時に崩壊した。

左側壁の2号人骨は壮年の女性で、前頭部から頸部にかけて赤色顔料が認められる。左腕を強く屈曲し、足先が重なっている。副葬品は無い。

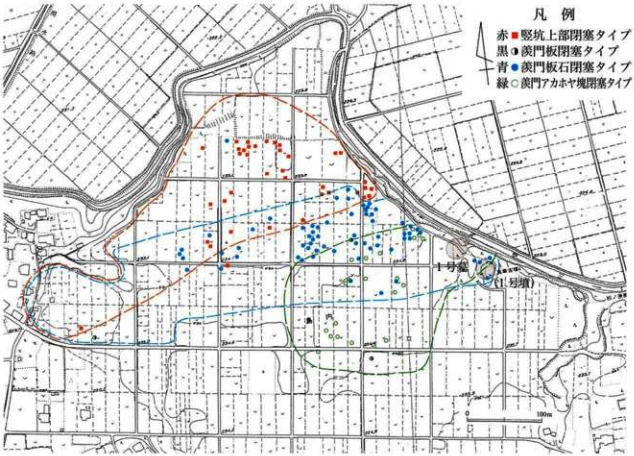
表11　ST-127出土遺物計測表

No	種類	法量（mm）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
114	鉄鏃	(137)	29	36	
115	鉄鏃	(55)	14	24	
116	鉄鏃	(110)	12	15	
117	鉄鏃	(97)	14	13	
118	鉄鏃	(81)	7	12	
119	鉄鏃	(49)+(58)	10	13	
120	刀子	(157)	110	12～22	鹿角柄
121	鉄剣	726	581	30～42	
122	鉄鏃	(118)	18	13	ハエ蛹殻
123	鉄鏃	(127)	27	11	
124	鉄鏃	(144)	11	12	
125	鉄鏃	(131)	24	10	
126	鉄鏃	(149)	29	10	
127	鉄鏃	168	26	17	
128	鉄鏃	139	15	14	
129	鉄鏃	(147)	(21)	7	
130	鉄鏃	(139)	25	6～8	
131	鉄鏃	(136)	(29)	6～8	
132	鉄鏃	(150)	32	8	

No	種類	法量（mm）（）は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
133	鉄鏃	(149)	31	8	
134	鉄鏃	147	21	6～7	
135	鉄鏃	(133)	23	8	
136	鉄鏃	(148)	25	7	
137	鉄鏃	(151)	28	7～8	
138	鉄鏃	(182)	(25)	9～10	
139	鉄鏃	178	(20)	8	
140	鉄鏃	153	22	7～8	
141	鉄鏃	(161)	(9)	9	
142	鉄鏃	(155)	26	7	
143	鉄鏃	(156)	18	5～7	
144	鉄鏃	163	7	8～9	
145	鉄鏃	166	21	7	
146	鉄鏃	155	18	6～7	
147	鉄鏃	166	30	8～9	ハエ蛹殻
148	鉄鏃	180	23	6	
149	鉄鏃	(190)	(24)	7～8	
150	鉄鏃	155	25	7	ハエ蛹殻
151	鉄鏃	138	18	5～7	ハエ蛹殻

表12　地下式横穴墓被葬者一覧

号	閉塞 閉塞材	主軸 方位	被葬 者	埋葬 順位	性別・年齢		遺存 状態	頭位	赤色顔料			副葬品・備考
									頭部	上半身	下半身	
102	竪坑上部 板石	西	1号	1	不明	壮年	×	北	○	×	×	無し
			2号	2	不明	不明	×	北	○	×	×	鉄鏃3
103	竪坑上部 板石	南西	1号	1	女性	老年	×	西	×	×	×	貝釧6、屈葬
			2号	2	男性	熟年	△	南東	○	×	×	短剣1
			3号	3	女性	壮年後期	×	南東	○	×	×	無し、別人骨の歯を検出
104	竪坑上部 板石	北北東	1号	1	男性	壮年	∧	東	○	○	×	刀1、鉄鏃2
			2号	2	不明	不明	∧	東	×	×	×	扉に鉄鏃2（矢柄痕）
			3号	3	不明	幼児 （5～6歳）	×	東	○	×	×	無し
			4号	4	女性	熟年	∧	東	×	×	×	無し
			5号	不明	不明	小児 （6～7歳）	×	?	×	×	×	無し
105	竪坑上部 板石	北北東	1号	1	不明	幼児 （3～4歳）	×	東	○	×	×	無し
			2号	2	不明	壮年	＼	東	○	×	×	無し
			3号	3	男性	熟年	×	東	○	×	×	無し
			4号	4	男性	壮年後期	△	東	○	○	×	剣1、鉄鏃2
106	竪坑上部 板石	北	1号	1	不明	幼児 （5～6歳）	＼	東	○	×	×	無し
			2号	2	女性	熟年	△	東	○	×	×	無し
			3号	3	女性	老年	△	東	○	○	×	無し
			4号	4	女性	壮年後期	○	東	○	○	×	無し
107	竪坑上部 板石	北	1号	1	女性	熟年	△	東	○	×	×	無し
			2号	2	女性	熟年	△	東	○	×	×	刀子1（3号人骨のものかも）
108	羨門 アカホヤ塊	東北東	1号	--	女性	熟年	△	南東	○	×	×	無し
109	竪坑上部 板石	北	1号	--	男性	熟年	×	東	×	×	×	貝釧5
110	竪坑上部 板石	東北東	1号	1	不明	小児 （9～10歳）	×	東	×	×	×	短剣1、刀子1、鉄鏃2
			2号	2	男性	若年 （18～20歳）	×	東	○	×	×	無し
			3号	3	女性	壮年	／	東	×	×	×	鉄鏃2
			4号	4	男性	熟年	△	東	×	×	×	鉄鏃5、刀子1、ガラス小玉1
112	羨門 アカホヤ塊	北東	1号	2か	男性	熟年か	／	南東	○	×	×	無し、初葬は屍床に赤色顔料
			2号	3か	不明	不明	×	南東	○	×	×	小刀1、鉄鏃11
			3号	4か	不明	小児（6歳）か	／	南東	×	×	×	無し
			4号	5か	不明	不明	／	北西	○	×	×	大刀1、鉄鏃13～14
116	羨門 アカホヤ塊	北	1号	不明	1体は成人男性		×	東か	×	×	×	弓金具、刀子1、鉄鏃17、ハエ銛没
			2号				／	東か	×	×	×	
125	羨門 アカホヤ塊	北	1号	1か	不明	壮年	×	南	×	×	×	刀子1
			2号	2か	男性	壮年	△	南	○	○	×	弓金具、刀子1、鉄鏃6
126	羨門 アカホヤ塊	北北東	1号	1	男性	壮年	○	南西	○	×	×	剣1、鉄鏃10
			2号	2	男性	壮年	○	南西	○	×	×	小刀1、鉄鏃5
			3号	3	女性	壮年	△	南西	○	×	×	刀子1
127	羨門 板石	北北東	1号	1か	男性	壮年	△	南西	○	○	×	剣1、刀子1、鉄鏃6＋30、ハエ銛没
			2号	2か	女性	壮年	○	南西	○	○	×	無し



第33図　閉塞タイプ別　分布図

第4節　まとめ

地権者・耕作者の方々の通報によって、既報告墓の竪坑1基と、新たな地下式横穴墓14基の報告をしたが、依然として竪坑の調査まで及ばず、将来にわたる課題である。

副葬品としては、弓金具が初めて、しかも2例出土し、県内でも数少ない遺物である。被葬者は東頭位(右側壁側)が時期的に古く、南頭位(羨門側)へと変遷することはゆるぎないが、南頭位が5世紀中葉～後半には成立していることが明確になった。人類学的にも、熟年女性の頭上運搬2例や、経産1例、剣創1例、革紐鞣しが推定される上顎切歯部舌側面摩耗(LSAMAT)3例など、生活面の復元の一資料になる事例が加わり、古墳時代の解明に一歩近づいたと言えるであろう。

このたびの調査において、竪坑上部閉塞タイプ、羨門板石閉塞タイプ、羨門アカホヤ塊閉塞タイプの分布範囲がほぼ確定したことから、平成12年度に刊行した報告書で纏めた分布図を改変した(第33図)。また、近年の鉄鏃の編年研究を参照すると、それぞれ若干の重複があるものの、3つの集団が営んだ墓域であろうことが推定される。

註

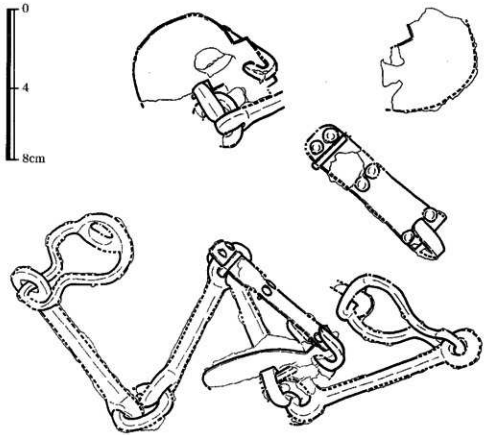
(1) 三好栄太郎「両頭金具の構造と奈良県における出土例」 杉井健編『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎研究』熊本大学文学部　2009

第５章　補追・改訂資料

県指定１号墳南縁の馬塞（SK-02）から出土した轡のほか、21号墓出土の短甲と冑、62号墓出土の短甲、76号墓出土の短甲と冑、81号墓出土の短甲について、轡以外は片山祐介氏の原稿である。なお、81号墓出土短甲を平成12年度に株式会社京都科学保存技術研究所に保存処理を委託した際、右前胴下側の蝶番の孔が異形であること（図版49）、後胴最上部には獣毛様付着物があること、前胴の覆輪は鉄板折り返し（上縁）と鉄板被せ（下縁）の２技法で、後胴上下縁の覆輪はともに鉄板被せ覆輪で施されていることが指摘されていることを報告しておく。

SK-02出土　轡

県指定１号墳南縁の馬塞から出土した轡である。保存処理の銹落とし工程において、鏡板を誤って接合していることが判明したので、ここに改訂した実測図を掲載する。なお、楕円形鏡板は片方のみで引手と衝は銹落としによって若干細くなっている。



第34図　SK-02出土　轡　実測図

島内地下式横穴墓群21・62・76・81号墓出土　短甲と肖について

片山祐介

1.　**ST21号短甲**（第35～36図）

正面は6段、背面は7段で構成されている横矧板鋲留短甲である。当該型式の短甲は前後胴ともに7段で作られるが、本例は胸部の竪上第3段がないため1段少なく、6段構成となっている。右前を別作りとし、上下に配置した2本の革紐を蝶番金具で連結している。覆輪は折り返し式である。鋲径は1.0cm、帯金幅4.0～4.8cm、背面竪上第3段は1列7鋲の少鋲式である。残存状態は良好で、錆による欠損はほとんど見られない。また、へこみや割れなどの大きな変形もなく、ほぼ埋納時の形状を保っている。外側の背面および正面上部に、錆化した布片が付着している。その他に、前胴内面の上部・脇の蝶番金具の下に革紐と思われる有機物が付着している。

鉄板の裁断はおおむねまっすぐで整っているが、縁や角の調整は雑で、とくに外から見えない地板内面や、帯金の引合板に隠れる内側の縁は角が残っている。また、鋲頭も丸く研磨されずに角がやや目立つ。外面から見える帯金の縁は斜めに調整して面取しているが、内面の縁取りはやや粗い。帯金・押付板・裾板など角が地板の裏側に隠れる部材は、角が直角になるように裁断されている。鋲周りに敲打痕は確認できない。未使用孔は見られない。

○前胴

右前胴は、押付板から裾板まで各段1枚板で作られている。左前胴は、長側第2段帯金を2枚つなぎ合わせており、やや短い鉄板を正面側に使用し、もう1枚は後胴全体まで達している。

正面引合板の内面では、左右で各段の合わせが異なる。左前胴では概ね一直線になるよう整えられているが、右前胴は凹凸が目立つ。右脇蝶番板の内面では、地板を直線的に裁断しているため、おおむね一直線にそろえている。

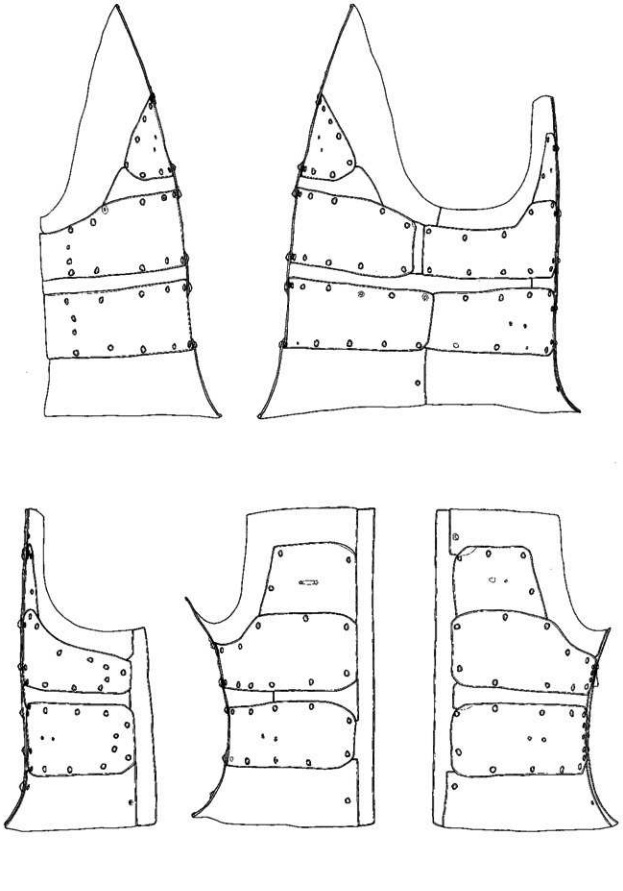
竪上第2段は長側第1段の上から留められており、竪上第2段の下縁が外面に向いている。

鋲留め位置は、3枚留めを避けて設定されている。左右でやや鋲の位置が異なり、押付板と竪上第2段を留める鋲は、右前で3カ所だが、左前では2カ所となっている。また、裾板と引合板を留める鋲は、右前では帯金に近い位置に設定されているが、左前では中央下寄りの位置である。

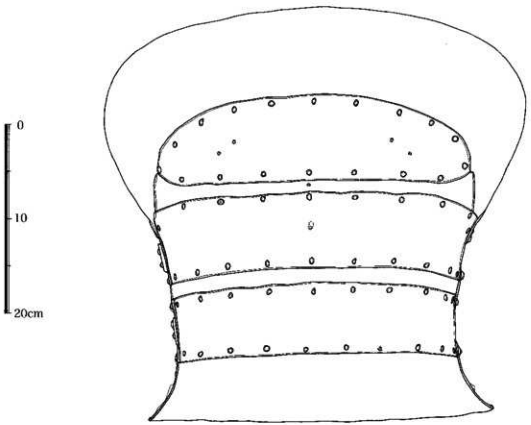
竪上第2段中央に、2孔が1.5cmの間隔で横方向に並んで開けられ、内面に革紐が残存している。ワタガミ懸緒を固定するためのものと考えられる。長側第3段にも同様に2孔が開口しており、腰緒孔と考えられるが、こちらには有機物の付着は見られない。

○後胴

後胴も前胴と同じく各段1枚で作られているが、長側第1段は前後胴の接合に継ぎ板が使用されている。継ぎ板は、前後胴両方の上から鋲留されている。継ぎ板と前胴押付板を留める鋲は、3枚留めとなっている。長側第2段は左前胴においてすでに連結されているため、左脇に接合箇所はない。おそらく左脇中央の3枚留めを避ける処置と思われる。鋲の位置は、上下方向で揃うように配



第35図　ST-21出土　短甲実測図（1）　内面



第36図　ST-21出土　短甲　実測図（2）　後胴内面

置されている。

竪上第2段は、左右両端を丸くして海鼠形に成形している。ほかの板はほぼ長方形に近い。

右脇は折り返し覆輪を採用しているが、各段別々に折り返しているため重複しない。また、長側第2段、押付板の下端、褶板の上端は折り返していない。

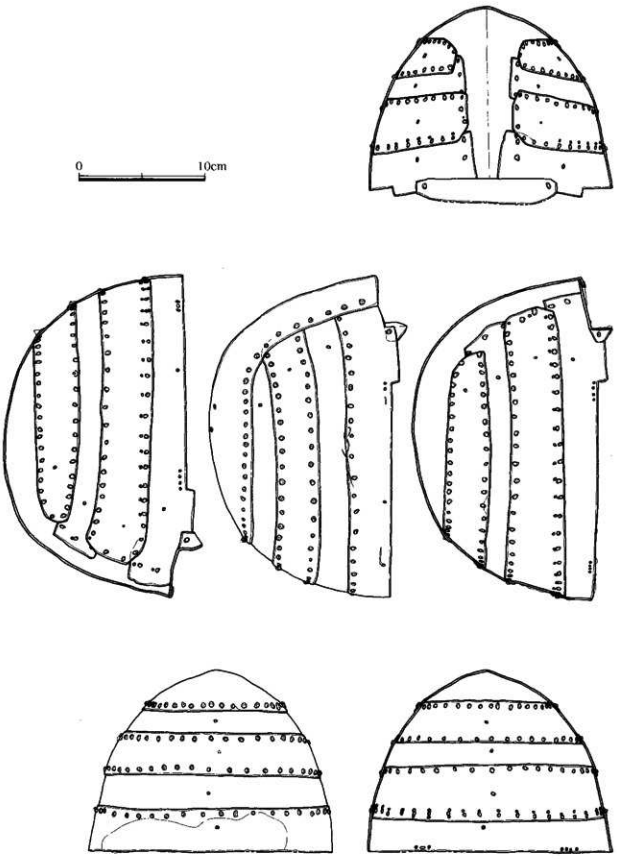
2. **ST21号冑**(第37図)

上から見た形状が桃実形、正面形状が砲弾型になるよう、横長板を上下方向に重ねて鋲留した横矧板鋲留衝角付冑である。横長板を4段重ね、上から柄杓形の鉄板を被せている。頭部が入る箇所には、先端から少し離れた部分に竪眉庇を当てている。鍬は3段横長板である。

○冑

短甲と同じく残存状態は良好で、欠損、ゆがみなどは見られず、ほぼ製作時の形状をとどめていると考えられる。腰巻板には、鍬の威し紐が付着している。

鉄板の縁はやや斜めに面取りされているが、角度は浅い。また、胴巻板・腰巻板とも内面側の角は隅を丸くせず直角を残している。地板の角落としはなされているものの、やや粗い。鉄板が重なる箇所、とくに衝角部の3枚が重複する部分では、真ん中に挟まれる胴巻板がわずかに薄く延ばされており、プレスされている。



第37図　ST-21出土　冑　実測図　　錆除去　内面

地板第1段の腰巻板と連結するすべての鋲には、近接して未使用孔が開口している。ほとんどが鋲の上側だが、後頭部左側の一部は鋲の上下に開けられている。その他の鋲列に未使用孔は見られず、最下列のみである。

衝角底板は、三角形の1辺を直角に折り曲げて竪眉庇としている。衝角部先端を折り込み、さらに腰巻板に左右各1鋲で鋲留めして固定している。

腰巻板～地板第2段の左右衝角部に近い位置と、後頭部中央に各1孔が開口しているが、内外面とも有機物の付着は見られない。また伏鉢頂部にも6孔が開口しているが、こちらにも有機物は見られない。位置から見て未使用孔とは考えにくく、胄内側で頭を保護するための帽子等を固定していたものかもしれない。

○錣

残存状態は良好である。正面側小口に孔が革包覆輪用として開口し、左右各2カ所、計4箇所に4孔ずつが相互連結と胄本体からの吊り下げに開口している。

3. ST62号出土短甲(第38～39図)

正面7段、背面7段で構成されている横矧板鋲留短甲である。右前を別作りとし、上下に配置した2本の革紐を蝶番金具で連結している。覆輪は鉄包式である。鋲径は0.5cm、帯金幅4.0～4.2cm、背面竪上第3段は1列9鋲である。全体的に残存状態は良好だが、後胴裾板下部に錆化が進んでいる。そのため、後胴は裾板右脇を欠失し、同じく裾板背面に割れが見られる。背面および正面上部に、錆化した布片が付着している。その他に、前胴内面の上部・脇の蝶番金具の下に革紐と思われる有機物が付着している。

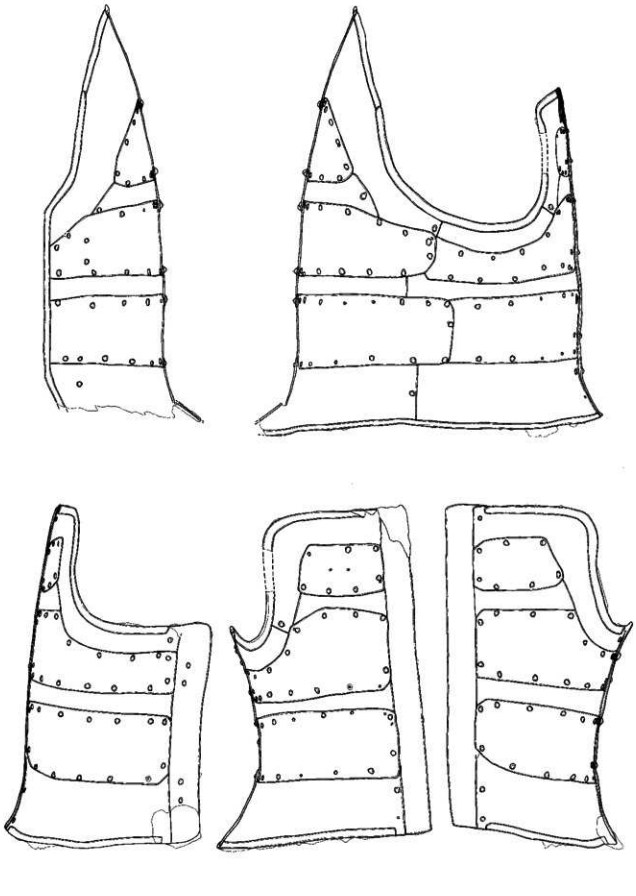
鉄板の裁断は直線的である。とくに右前胴では、内面引合板・蝶番板に隠れる箇所で隅を落としたのみの調整が目立つ。鉄板縁の面取りは錆化のため確認が困難だが、おおむね一様な調整を施しているように見える。鋲周りの敲打痕は確認できない。未使用孔が左前胴5カ所と左脇1カ所に認められるが、いずれも3枚の鉄板が重複する部分にあたる。鋲の位置は、上下方向で揃うように配置されている。

○前胴

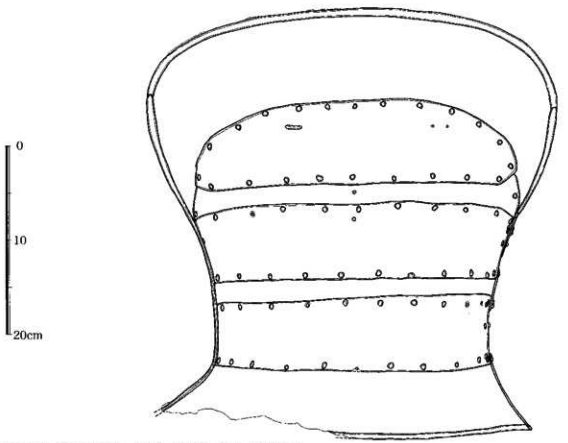
右前胴は、押付板から裾板まで各段1枚板で作られている。左前胴は、押付板を2枚で製作しており、長側第1段上縁付近で連結している。正面引合板および蝶番板の内面では、各段が一直線になるよう切りそろえているが、角調整は甘く隅を落としたのみとなっている。やや正面側が浮き上がり、長側第1段以下は、引合板に対して15°程度の角度をつけて取り付けられている。

鋲留位置は、3枚留めを避けて設定されている。そのため、引合板側の4カ所、押付板接合部分側の1カ所は、鋲の近くに未使用孔が見られる。

左前胴の引合板上面に布片が付着しているが、位置からワタガミ懸緒と見られる。内面の革紐は確認できない。



第 38 図　ST-62 出土　短甲　実測図（1）　内面



第39図　ST-62出土　短甲　実測図（2）　後胴内面

○後胴

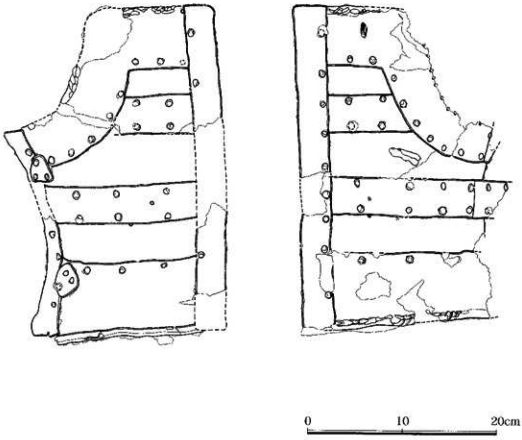
後胴も前胴と同じく各段1枚で作られており、左脇で左前胴の長側各段と連結されている。継ぎ板は見られず、帯金と地板の接合線がそれぞれ一直線になる位置で連結されている。左脇長側第1段では、押付板との3枚留めにかかる部分で未使用孔が見られる。

竪上第2段は、左右とも半月のコーナーを隅落としすることによって海鼠形に成形している。他の板はほぼ長方形である。竪上第3段の内面小口は、薄くつぶされている。右脇長側第1段に脇の抉りは作られず、斜めに裁断されている。その分、右前胴蝶番板の抉りが90°よりやや上がる位置まで来ている。

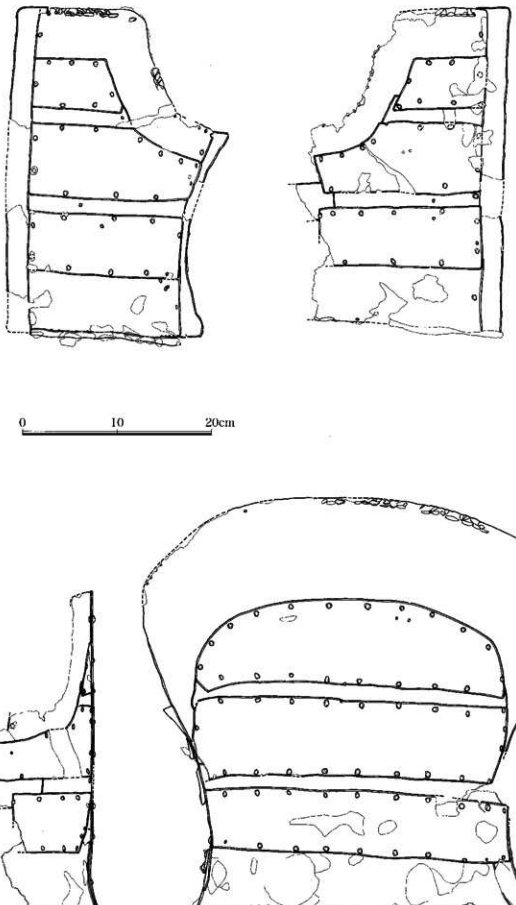
覆輪は肩の張り出し部分で継ぎ合わせている。右脇と裾板に継ぎ目が見られないが、右脇下部が欠損しているため、裾板から肩まで達する覆輪か不明である。

4. **ST76号短甲**（第40図～42図）

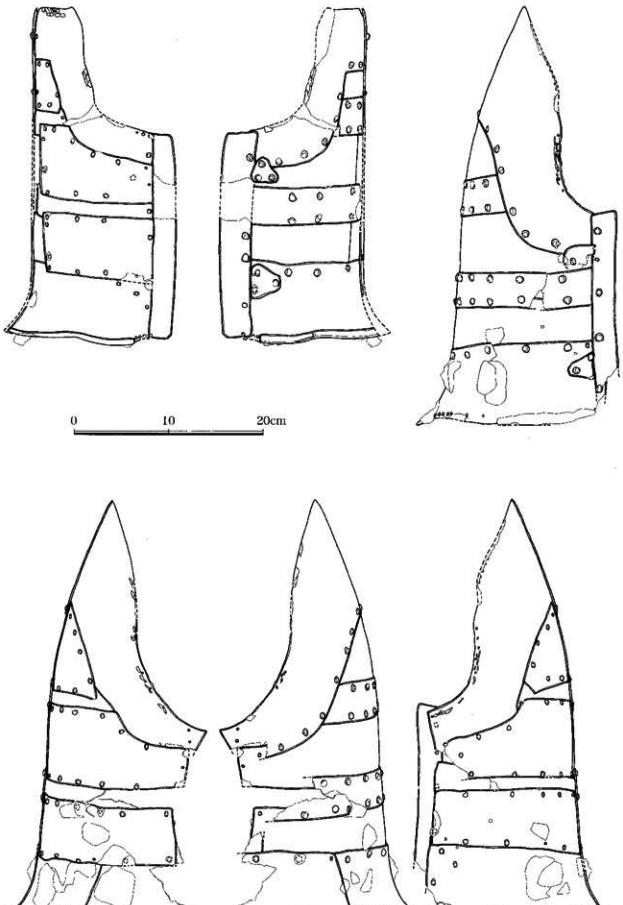
正面7段、背面7段で構成されている横矧板鋲留短甲である。右前を別作りとし、上下に配置した2本の革紐を蝶番金具で連結している。覆輪は革組式だが、右前胴裾板のみ鉄包式である。すべての部位は1枚板で作成されており、継ぎ板はない。鋲径は0.8cm、帯金幅4.0cm、背面竪上第3段は1列8鋲である。錆化が進み、端部に欠損が多く見られるほか、一部の鋲が欠失しているため、前



第 40 図　ST-76 出土　短甲　実測図（1）　外面



第41図　ST-76出土　短甲　実測図（2）　内面



第 42 図　ST-76 出土　短甲　実測図（3）　側面　内外面

胴の引合板、長側第2段は外れかけている。さらに、左脇は前後胴が完全に分離しているが、前後胴に互いに錆着している残存部同士を接合しても、元の形状には組み上がらないほどに変形が著しい。革組覆輪は、部分的に組み構造が明瞭に確認できる。後胴押付板の右側には、布片らしきものが付着しているが、ワタガミ懸緒などの布片は確認できない。

鉄板の裁断は直線的である。隅落としの裁断もほとんど行われていない。鉄板縁は面取りされず、断面は直角のままである。引合板と蝶番板のコーナーのみ、丸くおさめられている。鋲周りは、内面・外面とも敲打痕の確認はできない。鋲の位置は、上下方向で揃うように配置されている。

○前胴

正面引合板および蝶番板の内面では、各段が一直線になるよう切りそろえている。

鋲留位置は、おおむね3枚留めを避けているが、左前胴の竪上第2段と第3段を留める鋲列は、2カ所で3枚留めがされている。未使用孔は、左前胴の長側第3段と引合板を留める鋲と、長側第1段の押付板・竪上第2段側の上縁の2カ所に確認できる。そのほか右前胴長側第3段中央付近にも見られるが、鋲列から外れていることから腰緒孔の可能性がある。

覆輪は右前の裾板は鉄包式だが、蝶番金具の周辺と内面で孔列が確認できる。左前胴の裾板は錆化が著しいが、部分的に革組覆輪が確認できることから、右前胴のみが鉄包式と見られる。また、鉄包覆輪の外面は完全に孔を塞いでいるため、鉄包の上から革包などを併用したとは考えにくい。このことから、革組覆輪で設計し部品を製作されたものを、後に鉄包式に変更したと考えられる。

蝶番金具は、3鋲隅丸三角形を使用している。下部のものは蝶番板に辺を合わせて留めている。

○後胴

やや錆化が進んでおり、とくに左脇の崩壊が著しい。しかし左脇の各段接合端部が残存しており、おおむねの構造は把握できる。

左前押付板は上下2鋲で固定されているが、他は帯金が2列、裾板1列で連結している。長側第1段は左前胴・後胴双方に孔が開口している。地板各段と、押付板・帯金・裾板の接合ラインを考えると、両者を接合した鋲の痕跡とも考えられるが、仮にこの2孔が重なると前後幅がかなり狭くなるため、現時点では不明としたい。

竪上第2段は、半月形の右胴側隅を直裁した形状をしている。左胴側は端部を丸くしたのみで、角落としはされていない。右脇蝶番板の内面各段は、一直線になるように整えて裁断されているが、押付板はやや内側に角度がつけられている。

右脇に蝶番板を使用している。鋲列は均等ではなく、3枚留めを避けた位置に配置されている。蝶番金具は蝶番板の縁に沿って留められているが、上は2鋲半円形かもしれない。

5. **ST76号冑**(第43～46図)

上から見た形状が桃実形に、正面形状が砲弾型になるよう三角板と横長板を革綴じした、三角板革綴衝角付冑である。三角板を横長に綴じ合わせた段と横長板を上下方向に、交互に革綴じして4段を形成している。頭部が入る箇所には、先端から少し離れた部分に竪眉庇を当てている。鍬は1枚板である。冑本体には、ST21号出土冑にあるような側頭部・後頭部中央の孔は見られない。伏板頂部には、4孔が長方形に配列されて開口する。

○冑

ゆがみなどは見られないが、部分的に欠損がある。また内面革紐は、右側頭部から後頭部にかけた部分で残存が悪い。

鉄板縁は面取りされていない。また、三角板の端はおおむね丸く隅落としがなされているが、胴巻板と腰巻板は角が残されている。鉄板1枚1枚は丁寧に整形され、組み上げたときに三角の頂点が対応し、かつ左右対称となるように作られている。

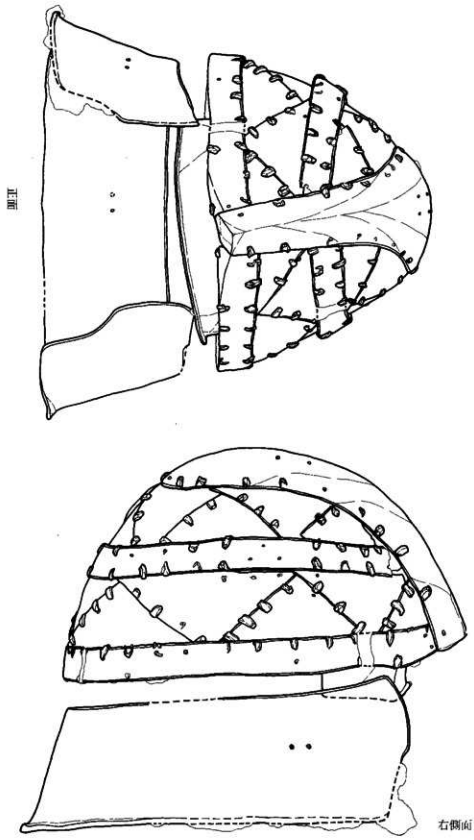
地板第1段は、9枚の三角板を使用している。綴じ孔は斜辺3孔で統一されている。革紐は部分的に確認できないが、斜辺は左前胴巻板側から始まって右前まで一気に綴じ合わせているように見える。地板第1段の下列、すなわち胴巻板との綴じ合わせは、後頭部中央板から左右それぞれ前に向かって綴じ合わせている。伏板との綴じ合わせは、残存している革紐が少ないが、後頭部の中央板から左右それぞれの前方に向かい、そのまま衝角底板の手前まで綴じ合わせているように見える。

地板第2段は、11枚の鉄板を綴じ合わせている。孔数は、鉄板サイズが正面側と後頭部側で異なるが、正面の左右4枚は斜辺3孔、その他は斜辺4孔で統一されている。上列、すなわち胴巻板との綴じ合わせは、正面では綴じ方向が左右ともそれぞれ後方へ向かっている。右側頭部は残存状態が悪く観察できないが、左側頭部では後方へ向けて、後頭部中央板では右方へ向けて綴じられている。斜辺は、右正面の2枚は前方に向けて、残りは左へ向かって綴じられている。腰巻板と結合する下列では、残存状況が悪いものの、左から右へ一気に綴じ合わせられているように見える。

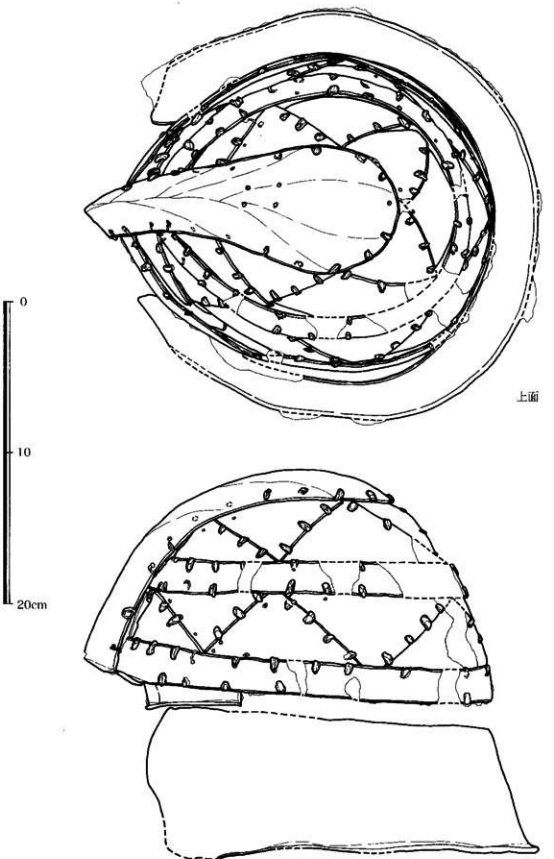
衝角底板は、三角形の1辺を直角に折り曲げて竪眉庇としている。衝角部先端を折り込んで左右それぞれを1カ所革綴じしている。竪眉庇部分は固定されていない。

○鍬

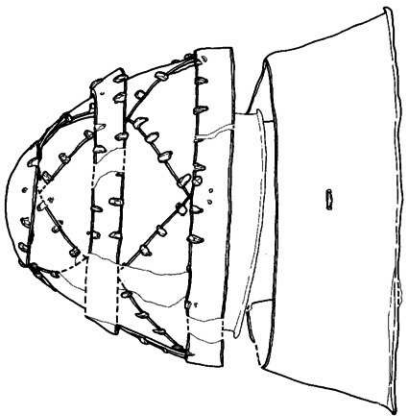
幅広のU字形1枚板を、冑の形状に合わせて湾曲させた1枚板鍬である。正面側にあたる鉄板小口は、辺の1/2で下側をゆるく抉るように整形している。覆輪等は見られないが、下辺は厚く作られている。後頭部に1孔が開口するほか、孔は観察できない。冑本体に鍬の1孔に対応する孔は見られない。

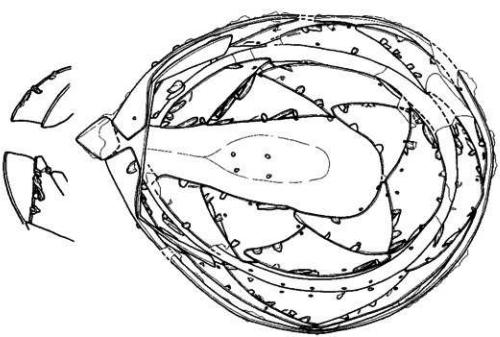


第43図　ST-76出土　冑　実測図（1）



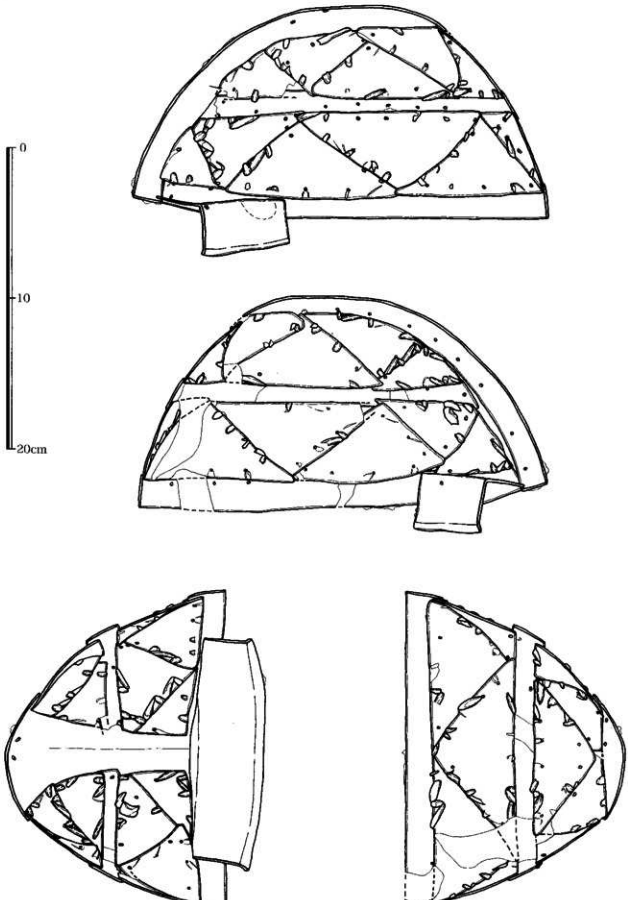
第44図　ST-76出土　青　実測図（2）





0 10 20cm

第45図　ST-76出土　甕　実測図（3）



第46図　ST-76出土　青　実測図（4）　内面

6. **ST81号出土短甲**(第47～48図)

やや錆化が進み、とくに左脇は大きく変形している。また、左前胴裾板の大半が欠損している。左側内面図は、左脇を図上で修正して掲載した。

正面7段、背面7段で構成されている横矧板鋲留短甲である。右前を別作りとし、上下に配置した2本の革紐を蝶番金具で連結している。覆輪は前胴上縁のみ折り返し式、前胴下縁および後胴が鉄包式である。ほとんどの部位は1枚板で作成されているが、左前胴長側第2段のみ2枚を接合して製作している。鋲径は1.0cm、帯金幅3.5cm、背面竪上第3段は1列5鋲の少鋲式である。錆化が進み、左脇は裾板を除いて外れかけている。左右前胴、後胴いずれにも布片が付着しておりワタガミ懸緒として使用された平絹である。

鉄板の裁断は粗く、縁の整形・調整は雑である。地板内面は直線的に裁断されず、裏側から帯金間を充填するように不規則な多角形に整形されている。鋲周りは、内面・外面とも敲打痕の確認はできない。鋲の位置は、上下方向で揃うように配置されている。未使用孔はほとんど見られない。

○前胴

正面引合板の内面では、各段が概ね一直線になるよう切りそろえている。右前蝶番板の内面では、押付板・長側第1段が揃えられていない。

鋲留位置は3枚留めを避けており、竪上第3段と長側第2段帯金は、挟み込みによって固定されている。未使用孔は、左前胴長側第2段の継ぎ目に認められる。

覆輪は、押付板上縁が折り返し式である。正面コーナーでは、脇の折り返しが正面折り返しの上に重複しているのが確認できる。左脇では、左前胴のつなぎ目から1cmほど前まで鉄包覆輪が達しているが、折り返し覆輪との重複はない。右脇では、蝶番板の下に折り返し覆輪が認められることから、蝶番板の接合は覆輪製作後であることがわかる。

蝶番金具は、3鋲方形を使用している。右前胴では、上下で鋲の配置が逆となっているが、上は正面寄りの1鋲が長側第1段と蝶番板との接合を兼ねている。下は、正面寄りの下側の1鋲が裾板・長側第3段との接合を兼ねている。

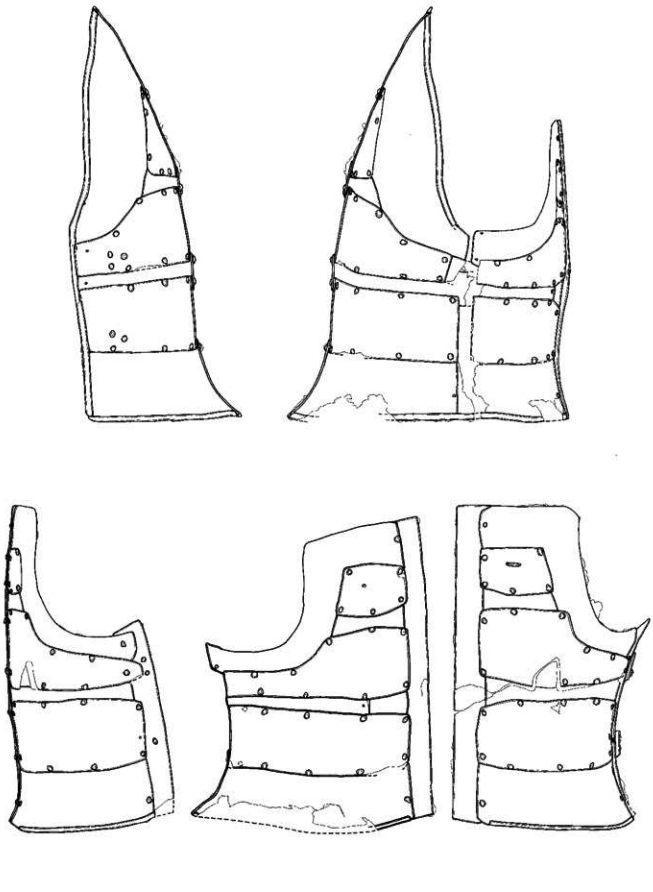
右前胴竪上第2段の内面に、革紐らしきものが残存している。ワタガミを固定するためのものと考えられる。左前胴には残存していないが、固定のための孔が確認できる。

○後胴

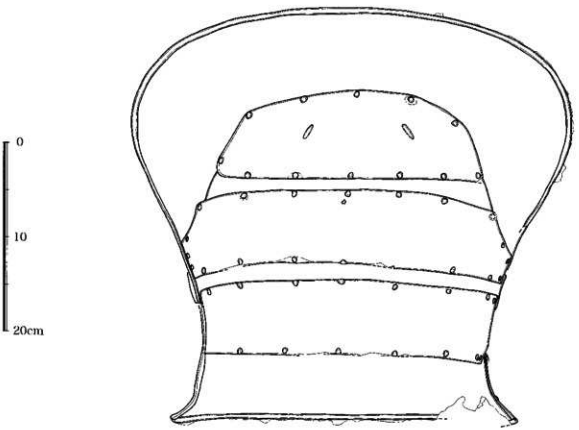
やや錆化が進んでおり、とくに左脇の変形が著しい。左脇は、概ね各段の接合線が揃えられているが、長側第1段はやや後ろよりで接合されている。長側第3段の接合部分では、後胴側は鋲で留められているが、左前胴側に鋲孔が見られないこと、長側第2段帯金が胴を一周していることから、長側第2段と裾板、後胴長側第3段との挟み込みによって固定されていたものと考えられる。

竪上第2段は、やや台形に近い半月形である。右側は隅を丸く整形してあるが、左側は端部を丸くしたのみで、角落としはされていない。その他の段も、コーナーは直角に整形されている。

右脇は、左脇折り返し覆輪の手前から始まる鉄包覆輪が裾板まで届いている。裾板覆輪とは重な



第47図　ST-81出土　短甲　実測図（1）　内面



第48図　ST-81出土　短甲　実測図（2）　後胴内面

らず、手前で止まっている。長側第1段と第2段の覆輪よりに未使用孔が見られる。また、覆輪に隠れているが、押付板にも1孔が認められる。3孔は、上下方向にほぼ揃っている。蝶番金具の鋲は前胴とは異なり、後胴側が1鋲となるよう揃えられている。下の1鋲は、前胴と同じように長側第3段・裾板との接合を兼ねている。

7. 比較

今回出土した甲冑類は、鋲留短甲4領・冑2両である。ここで、全体計測値、部品計測値、鋲数、鉄板数など個別記載の以外の数値データを提示する。全体計測値は、人体に着用することから見てもさほど大きな差はない。甲冑は結合技法・地板形状によって大きく分類されており、今回取り上げた短甲は、いずれも横矧板鋲留型式である。冑は、三角板革綴衝角付冑と横矧板鋲留衝角付冑である。ここでは、同一型式である短甲の比較を主に行いたい。

横矧板鋲留短甲は、覆輪型式・鋲径・鋲数・帯金幅で分類されているが、覆輪は、革組→鉄包→折り返しの順に時期差が認められている。鋲は、時期が新しいほど径が大きく、数が少なくなり、帯金幅は時期が新しいものは幅広になると考えられている。総じて、時期が下るほど鋲数が減り、板・

表13 ST-21・62・76・81出土 短甲・冑 計測表

短甲

外形計測値（cm）		ST21	ST62	ST76	ST81
高	胸前	33.6	33.6	33.3	33.5
	脇	20.8	22.0	22.5	21.6
	腰	7.8	8.4	9.0	8.4
	肩	31.2	32.0	34.5	31.5
	背面最大	43.8	45.0	44.5	43.4
幅	胸前	24.0	26.0	21.9	22.0
	脇	34.8	34.0	35.1	35.2
	腰	29.6	28.4	31.5	30.0
	肩	44.0	42.8	44.4	46.0
	裾	36.8	38.8	37.2	36.0

鉄板枚数		ST21	ST62	ST76	ST81
右前胴	引合板	1	1	1	1
	押付板	1	1	1	1
	竪上第2段	1	1	1	1
	竪上第3段		1	1	1
	長側第1段	1	1	1	1
	長側第2段	1	1	1	1
	長側第3段	1	1	1	1
	裾板	1	1	1	1
	蝶番板	1	1	1	1
左前胴	引合板	1	1	1	1
	押付板	1	2	1	2
	竪上第2段	1	1	1	1
	竪上第3段	—	1	1	1
	長側第1段	1	1	1	1
	長側第2段	1	1	1	1
	長側第3段	1	1	1	1
	裾板	1	1	1	1
後胴	押付板	1	1	1	1
	竪上第2段	1	1	1	1
	竪上第3段	1	1	1	1
	長側第1段	2	1	1	1
	長側第2段	1	1	1	1
	長側第3段	1	1	1	1
	裾板	1	1	1	1
	蝶番板		—	1	
蝶番金具		4	4	4	4
合計		27	29	29	29

鋲数		ST21	ST62	ST76	ST81
右前胴	引合板	6	9	7	8
	押付板	5	8	8	5
	竪上第2段	1	—	—	—
	竪上第3段		4	4	2
	長側第1段	—	—	—	—
	長側第2段	8	10	6	6
	長側第3段		—	—	
	裾板	4	5	3	3
	蝶番板	4	5	5	5
左前胴	引合板	6	7	9	8
	押付板	6	11	9	6
	竪上第2段	1			—
	竪上第3段	—	4	4	2
	長側第1段	—	1	—	—
	長側第2段	4	16	8	8
	長側第3段	—	1	—	—
	裾板	6	7	3	5
後胴	押付板	11	18	19	12
	竪上第2段	—	—	—	—
	竪上第3段	14	18	16	10
	長側第1段	—	—	—	—
	長側第2段	28	20	26	16
	長側第3段	—			—
	裾板	11	10	14	7
	蝶番板	—	—	5	—
蝶番金具		8	8	12	12
合計		123	162	158	115

部品幅（cm）		ST21	ST62	ST76	ST81
右前胴	引合板	3.4	4.4	3.1	4.0
	押付板	5.0	4.6	6.3	5.2
	竪上第2段	7.5	3.0	3.1	3.0
	竪上第3段	-	4.0	3.9	3.4
	長側第1段	5.6	5.4	4.7	6.2
	長側第2段	4.0	4.2	3.8	3.5
	長側第3段	4.5	4.2	4.0	4.8
	裾板	7.0	8.2	7.5	7.4
	蝶番板	3.4	4.5	3.1	3.2
左前胴	引合板	3.4	3.8	3.1	3.0
	押付板	5.2	4.6	6.2	5.0
	竪上第2段	7.4	3.0	3.0	3.2
	竪上第3段	—	4.2	4.1	3.0
	長側第1段	5.4	5.4	4.6	6.0
	長側第2段	4.2	4.2	4.1	3.2
	長側第3段	4.6	4.1	3.9	4.0
	裾板	7.0	8.5	8.0	7.2
後胴	押付板	10.8	11.0	12.0	10.0
	竪上第2段	6.0	6.0	6.5	6.8
	竪上第3段	4.2	4.8	3.9	3.6
	長側第1段	5.2	5.6	5.9	5.8
	長側第2段	4.8	4.4	3.9	3.8
	長側第3段	4.4	5.2	4.2	5.4
	裾板	8.4	8.0	8.1	8.0
	蝶番板	—	—	2.3	—
蝶番金具		2.0 × 3.0	1.8 × 3.0	辺3.0～3.7	3.0 × 2.5
鋲径		1.0	0.5	0.8	1.0

後胴幅左右偏差	ST21	ST62	ST76	ST81
押付板	3.30	3.25	5.03	2.33
竪上第2段	0.01	0.03	0.00	0.06
竪上第3段	0.68	0.41	0.95	1.09
長側第1段	0.18	0.11	0.04	0.03
長側第2段	0.34	0.64	0.95	0.93
長側第3段	0.55	0.23	0.73	0.10
裾板	0.73	0.38	0.48	0.52
合計	5.79	5.06	8.17	5.06

冑

外形計測値（cm）		ST21	ST76
最大	高	15.5	16.2
	幅	19.3	21.0
	長	25.6	26.0
頭備部	高	14.4	14.0
	長	21.6	22.0

鉄板枚数	ST21	ST21（鋲数）	ST76
伏板	1	55	1
地板第1段	1	—	11
胴巻板	1	81	1
地板第2段	1		9
腰巻板	1	41	1
眉庇	1	2	1
錣	3	—	1
合計	9	179	24

部品幅（cm）	ST21	ST76
伏板	3.2	1.5
地板第1段	2.0	3.9
胴巻板	3.4	2.0
地板第2段	2.0	4.2
腰巻板	3.6	2.1
眉庇	1.8	2.0
平均	2.7	2.6
錣	4.0	8.5

鋲のサイズが大きくなると見られている。また、全体的な段構成のデザインは、三角板鋲留短甲以前の形態に近い、地板と帯金の違いをはっきりさせるものと、地板と帯金がほぼ同じ幅で製作され、両者の違いが不明瞭となるものに2大別できる。以上から、今回出土した4領の短甲を検討すると、以下のようになる。

まず、覆輪はST76が革組覆輪と鉄包式を併用している。ST81は折り返し式と鉄包式を併用している。ST21は折り返し式、ST62は鉄包式である。ST76は革組覆輪を鉄包覆輪に作り直しており、製作段階と埋納段階の時期差を示している。

鉄板枚数は、ST21は竪上第3段がないタイプのため2枚少ないが、残りの3領は同じである。ST21、ST62、ST81は左側に継ぎ板を使用している。ST76には継ぎ板は使われておらず、前後左右各段1枚ずつで構成されている。ST76が他と同じ鉄板枚数なのは、蝶番板を後胴でも使用しているためであり、これは他では見られない。鋲径と鋲数では、ST62が鋲径0.5cm、鋲数162で最も多く、ST76は鋲径0.8cm、鋲数158でそれに次いでいる。ST21とST81は鋲径1.0cm、いわゆる少鋲式である。

地板と帯金のちがいを表す指標として、後胴の個体偏差を提示した。後胴各段の幅と平均値の差を二乗し、平均値で除すことによって、帯金・地板を含めた全体の平均からのズレ幅を算出している。数値が大きいほど地板・帯金の差がはっきりしていることを示している。ST21、ST62、ST81の3領は偏差値5.0に近いが、ST76は8.17と大きい。従って、ST76は地板と帯金の区別が明瞭に設計されているのに対し、残りの3領は地板と帯金の区別が不明瞭となっていると言える。

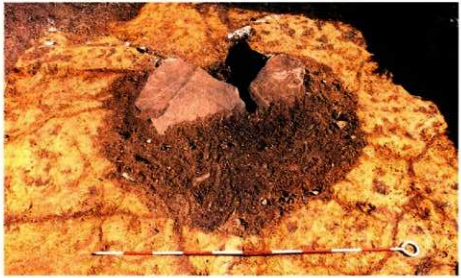
以上から、ST76は4領のうち最も古相を呈しており、ST81は新しい様相を示している、と言える。したがって、前胴7段構成の横矧板鋲留短甲では、時間的に、ST76→ST62→ST81の順を提示することができる。ST21は6段構成ではあるが、ST62が多鋲式でやや古相を示していることから、ST62の後、ST81とほぼ同時期と見られる。この小編年は、ST76に組み合わされている三角板革綴衝角付冑、ST21と組み合わされている横矧板鋲留衝角付冑を考慮すると、概ね順当と思われる。

最後に、未使用孔について若干触れたい。今回出土した鋲留甲冑には、いずれも未使用孔が見られた。未使用孔は、前胴内面地板に集中していることから、鉄板を裁断した後の、穿孔・組み上げの段階、鋲留め以前の過程で発生したものと考えられる。つまり、設計と実際が異なった時に、穿孔した孔が「未使用孔」となると考えられる。したがって、未使用孔を仮に使用した際の形状と現状の完成品を比較することによって、甲冑の設計意図を逆に推量することも可能と思われる。今回の資料では、鋲数の少ないST21とST81短甲に未使用孔がほとんど見られない。未使用孔の有無は鋲数と比例するとも思われるが、今後の検討としたい。

写　真　図　版

島内地下式横穴墓群　遺跡遠景（南東から、平成10年12月撮影）

同　上　俯瞰



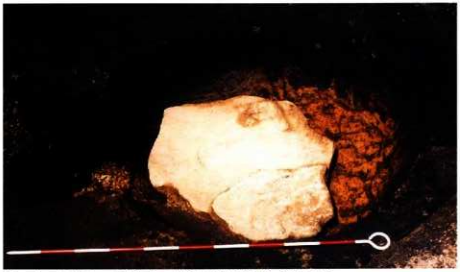
ST-36　竪坑検出状態（南から）

同　左　セクション除去，竪坑上部閉塞状態

同　上　断面層序（西から）

同　上　閉塞石除去

ST-102　陥没坑と竪坑検出状態（南から）



同　左　セクション除去，閉塞石出土状態（南から）

同　上　竪坑断面（南から）

同　上　閉塞石除去

図版 4

ST-102　玄室内

同　上　1・2号人骨頭部周辺

ST-103　陥没坑（奥）と竪坑
（北東から）

ST-103　玄室内

同　上　　2号人骨頭部（右）と3号人骨頭部，鉄剣出土状態

図版6

ST-103　1号人骨（奥）と、2号人骨下肢

同　上　1号人骨左腕の貝釧

ST-104
竪坑と陥没板石検出状態（西から）

同　上
竪坑断面層序（西から）

同　上
完掘（東から）

図版8

ST-104　玄室内1～4号人骨　上半身と副葬品

同　上　下半身

ST-104　右棚上施設の鉄鏃と矢柄の痕跡

ST-105　竪坑検出状態（西から）

同　上　完掘（西から）

図版10

ST-105　玄室内

同　上　1～4号人骨　頭部と副葬品

ST-105　2～4号人骨　下肢

同　上　右側壁中央部　副葬品

図版12

ST-106
竪坑
検出状態
（西から）

同　上
完掘
（西から）

同　上　玄室内　右半　1～3号人骨

ST-106　玄室内　1～3号人骨　下肢

ST-107
竪坑
検出状態
（北から）

同　右上　割れた板石除去
竪坑掘形検出
（東から）

同　完掘（東から）

図版14

ST-107　玄室内　右半

同　上

ST-107　下肢

ST-108　羨門閉塞状態（玄室から）

図版16

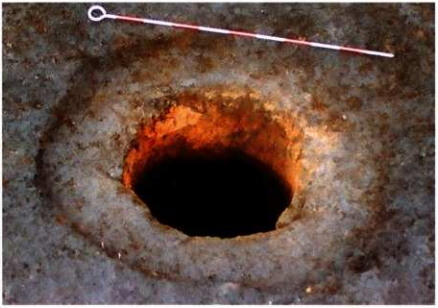
ST-108　玄室内　1号人骨（西から）

同　上　頭骨と右側壁掘削痕（北西から）

ST-109　竪坑　検出状態（南から）

同　上　半截　断面（北から）

同　上
完掘
（南から）



図版 18

ST-109　玄室内（南から）

同　上　頭骨周辺と貝鋤出土状態

ST-112　1～3号人骨と南隅の副葬品（北から）

同　上　　上半身と副葬品（北西から）

図版 20

ST-112　3・4 号人骨と羨道（北東から）

同　上　1～3 号人骨　頭部周辺と副葬品（北西から）

ST-112　南隅の
副葬品
（北から）

右：同　上
羨門閉塞状態
（北東から）

図版 22

ST-116　人骨と北東部の弓金具（西から）

同　上　人骨（北西から）

ST-116　北西部の副葬品（南東から）

同　上　羨門閉塞状態（北から）

図版24

ST-125　1号人骨（西から）

同　上　2号人骨（東から）

ST-125　2 号人骨の上半身と副葬品・羨道中位の頭骨（北から）

同　上　上半身と副葬品（北から）

図版 26

ST-125　2号人骨　下顎～腹部と副葬品（東から）

同　上　（北から）

ST-125　2号人骨　下半身（東から）

同　上　羨門閉塞状態（北から）

図版 28

ST-126　1号人骨と副葬品（西から）

同　上　2・3号人骨と副葬品（東から）

ST-126　1 号人骨　上半身と副葬品（西から）

同　上　下半身（西から）

図版30

ST-126　2・3号人骨　上半身（東から）　3号人骨は土塊枕

同　上　下半身と副葬品（南東から）

ST-126　2・3号人骨　上半身と副葬品（北から）

同　上
羨門閉塞
状態
（北から）

図版 32

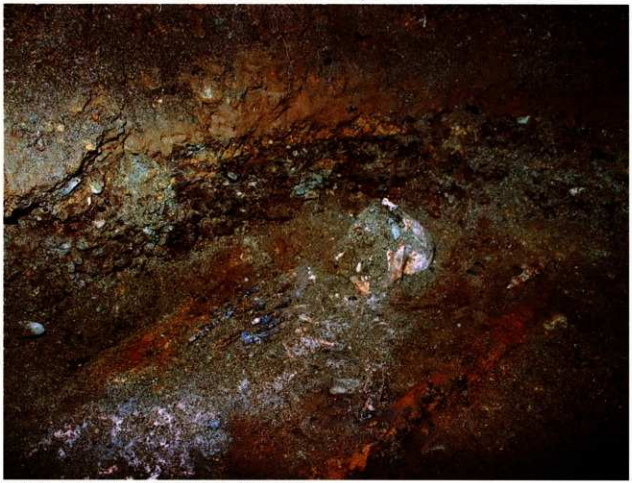
ST-127　1 号人骨と副葬品（西から）

同　上　2 号人骨（南東から）

ST-127　1 号人骨　上半身と副葬品（西から）

同　上　下半身（南西から）

図版 34



ST-127　1 号人骨　上半身と副葬品（北西から）

同　上　右胸～腹部の鉄鏃と矢柄（西から）

ST-127　2号人骨　上半身（南東から）

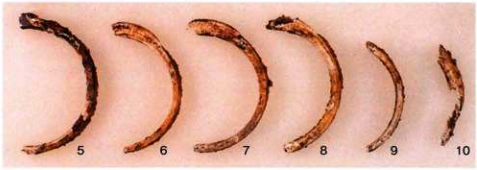
同　上　下半身（南東から）

図版 36

ST-127　2号人骨　上半身（北から）

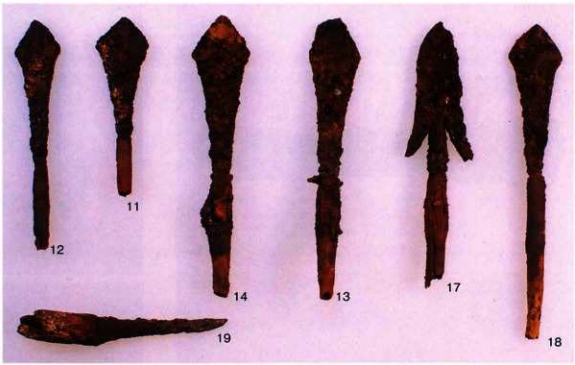
同　上　羨門閉塞状態（北から）

ST-102　出土遺物



ST-103　出土遺物（1）

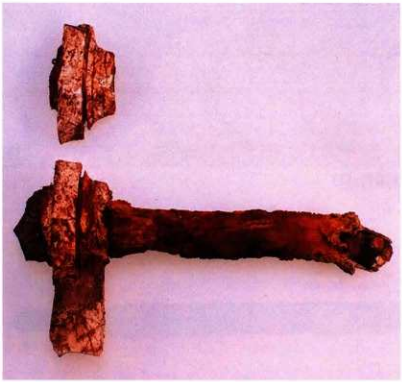
同　上　（2）

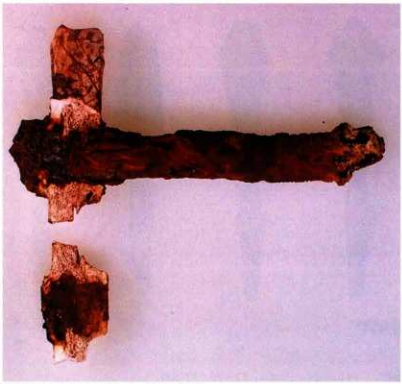


ST-104・105・107　出土遺物　11～14：ST-104、17・18：ST-105

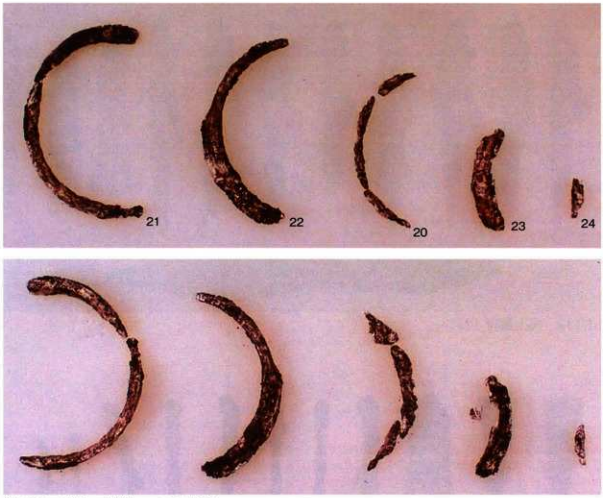
ST-104・105　出土遺物　15：ST-104

図版 38

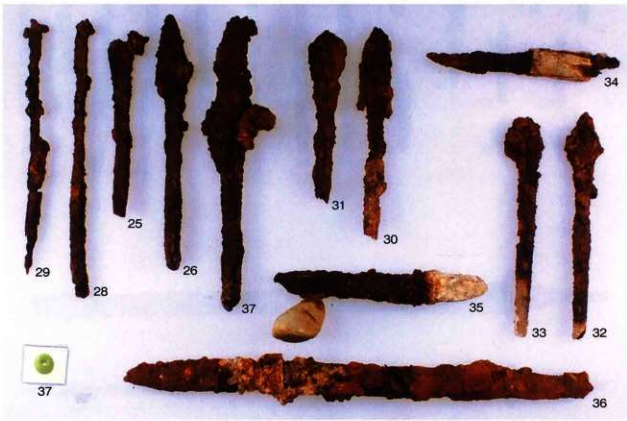




ST-105　出土　剣　鹿角製装具

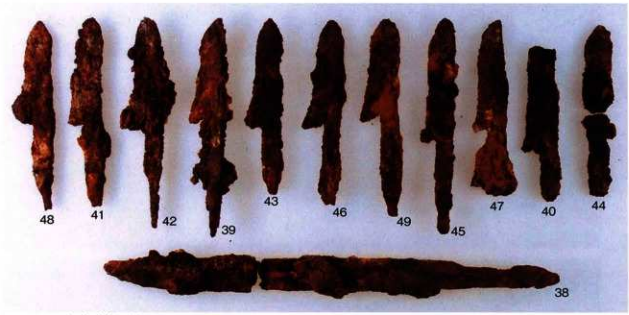


ST-109　出土　貝釧　　下：反転

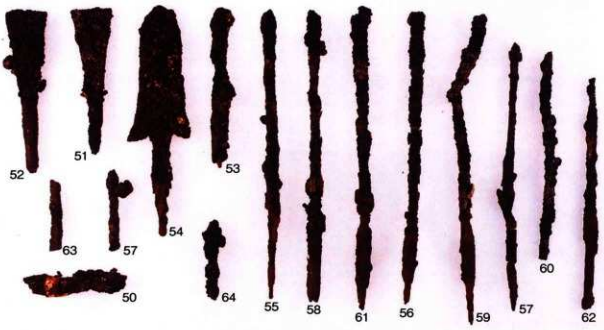


ST-110　出土遺物

図版 40

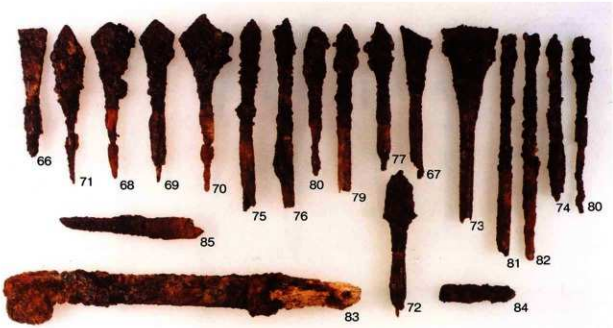


ST-112　出土遺物（1）



同　上　（2）

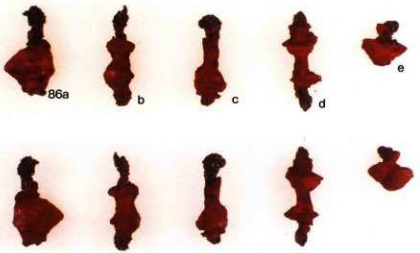
同　上　（3）



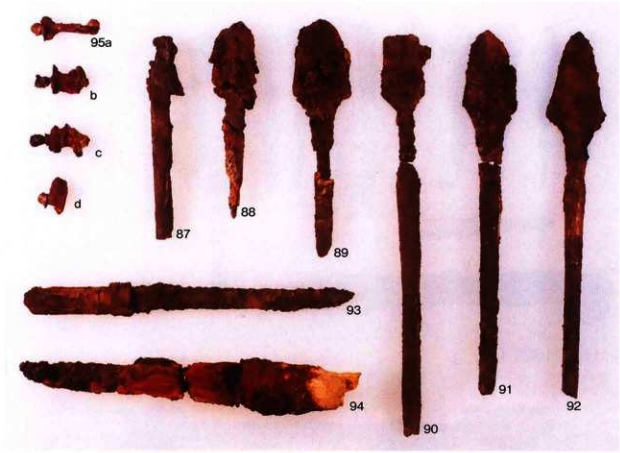
ST-116　出土遺物（1）

短刀（83）の側面

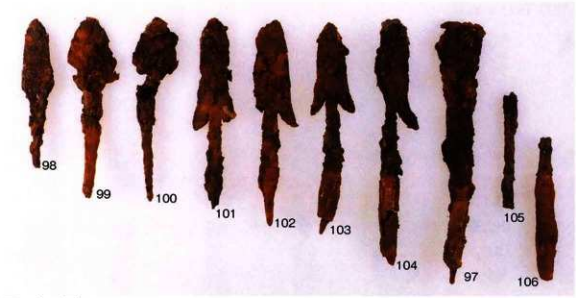
ST-116
出土遺物
（2）
弓金具



図版 42



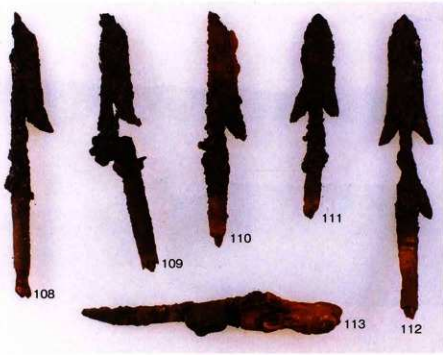
ST-125　出土遺物（1）



同　上　（2）

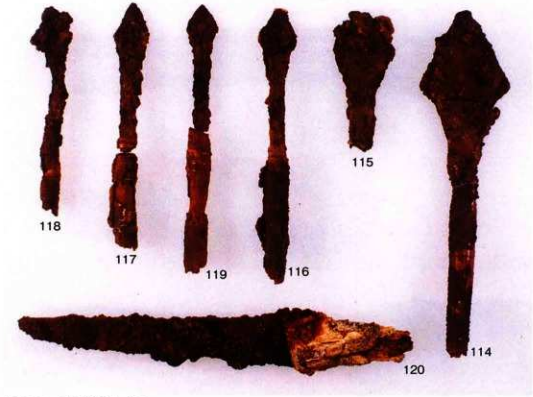
同　上　（3）

ST-126　出土剣（96）の把

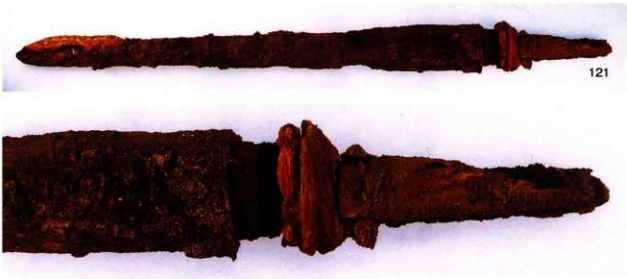


ST-126
出土遺物

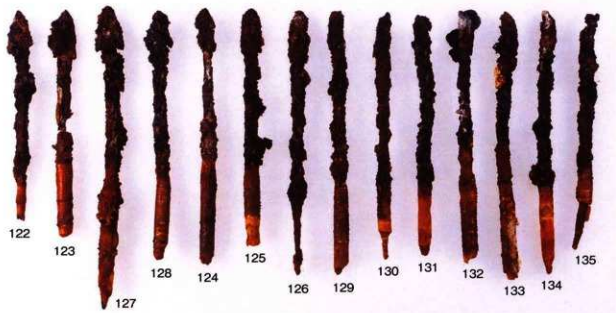
図版 44



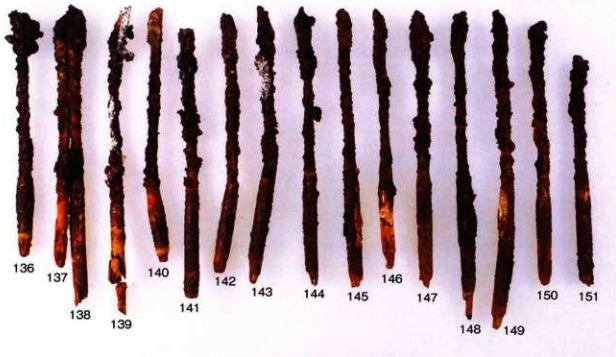
ST-127　出土遺物（1）



同　上　(2)

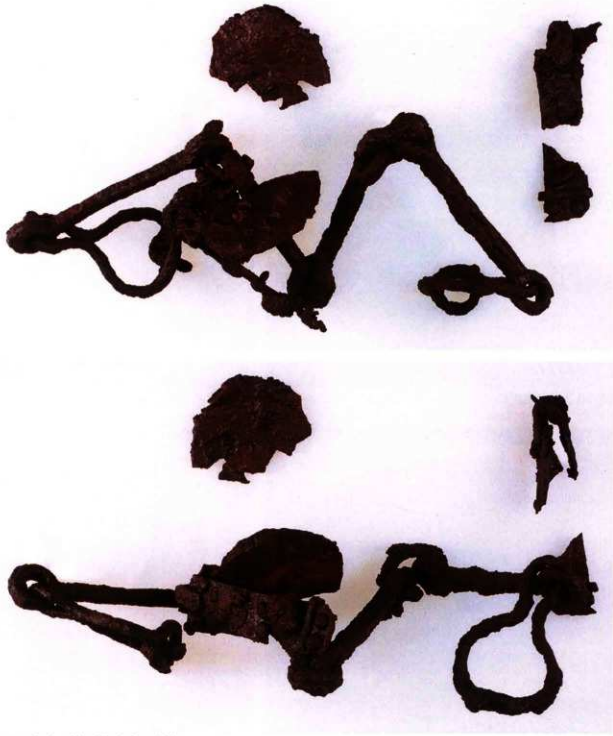


ST-127　出土遺物（3）



同　上　（4）

補　追　遺　物



SK-02 出土　轡（保存処理後）

図版 47

ST-76 出土　短甲

左側面

後胴

右側面

ST-76 出土
短甲
後胴の覆輪

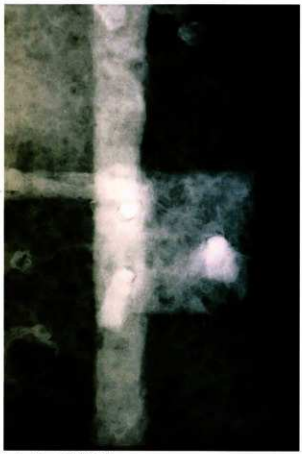
同　上
前
下半

同　上
上半
内面

図版 49

ST-76 出土　短甲　後胴最上部の獣毛様付着物（京都科学提供）

同　上　右前胴下部　蝶番



同　左　X 線写真

ST-76　出土　冑
展開

図版 50

図版 51

ST-76 出土　青
錫除去
展開

ST-76 出土　青
後面

同　鏡除去　後面

同　鏡
後面

同
内面

図版 53

ST-76 出土　青
鏡　展開

付　篇

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨

－100号墓～112号墓、116号墓、125号墓～127号墓から出土した人骨－

竹中正巳*・柄本優子**・下野真理子*

*鹿児島女子短期大学　**宮崎県立西都原考古博物館

はじめに

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松、杉ノ原に所在する。加久藤盆地を西に向かって流れる川内川の南側の河岸段丘上にあり、遺構の範囲は東西650m、南北350mに渡る。

島内は5世紀前葉から6世紀中葉に造営された墳墓群で、2009年9月末までに、127基の地下式横穴墓の調査が行われている。古墳時代の人骨の他に、甲冑、蛇行剣、骨鏃をはじめとする多数の副葬品が出土しており、多数の鉄製武具や骨鏃など特徴的な副葬品は、全国的にも注目を集めている（中野,1997;西田,1997）。南九州の古墳時代の埋葬遺跡で、人骨と副葬品の保存状態が良好な遺跡は数えるほどしかない。島内地下式横穴墓群は、南九州古墳時代人の形質・文化・生活様式を知る上で、極めて重要な遺跡である。

古墳時代の南九州には、内陸部に縄文人的な身体形質をもつ人々が、宮崎平野部に渡来系弥生人と類似する特徴をもつ人々も居住していたことが知られ、従来、頭蓋計測値、身長の分析から南九州山間部の古墳人男性は西北九州弥生人に極めて類似し、縄文人的特徴を色濃く残す古墳人であると考えられてきた（松下,1990）。西北九州弥生人は、頭蓋計測値、頭蓋形態小変異の分析のいずれもが縄文人に類似し、体質的にも文化的にも縄文人的色彩が遅くまで持続した集団と考えられている（内藤,1984;Saiki　et.al,2000）。

島内地下式横穴墓群の101号墓までの発掘調査報告書はえびの市教育委員会により2001年に公刊され、その報告書の中で竹中らは南九州の内陸深くに位置する加久藤盆地に居住した島内地下式横穴墓群を営んだ人々の形質について次のように分析し、考察した。島内の人々は、頭蓋計測値の分析結果では西北九州弥生人と類似するが、頭蓋形態小変異の出現頻度の分析結果からは類似しない。この頭蓋計測と頭蓋形態小変異の相違する分析結果は、島内の人々が縄文人的特徴を残しながらも、渡来系の遺伝子をある程度受け入れた集団であると解釈できると考えた。

平成20年（2008年）2月、島内地下式横穴墓群内の九州電力の鉄塔の移設工事に伴う発掘が行われ、113号墓から124号墓が調査された。出土した古墳時代人骨は、やはり保存状態がよいものが多く、発掘調査報告書は2009年11月に刊行された。

今回、えびの市教育委員会が発掘調査を行った島内地下式横穴墓群102～112号墓、116号墓と125～127号墓から出土した人骨について人類学的精査を行った結果を報告する。なお、100・101号墓から出土した人骨については2001年の報告書で扱ったが、今回再整理を行い、新たな知

見が得られたので再度報告する。今回報告する人骨は、烏内地下式横穴墓群を営んだ人々の形質、社会、文化、生活をさらに詳細に解明するために、貴重な追加資料である。

出土人骨の所見

表1に示すとおり、烏内地下式横穴墓群100～127号墓の16基の墓から、少なくとも48体の古墳時代後期人骨が出土した。各人骨の個別の計測値、観察データは、付表1～11に、推定身長は付表12に示す。

烏内地 下式横穴墓群100号墓

3体が遺存している。

1号人骨(女性・壮年)

全身の骨が遺存している。前頭部に赤色顔料が付着している。保存状態は悪い。性別は頭蓋の外後頭隆起の突出が弱いことから女性と推定した。年齢は、頭蓋縫合(矢状縫合・ラムダ縫合)の癒合状態と歯の咬耗度がMartinの2度以下であることから、壮年と推定される。歯式は次の通りである。

	4 7
●7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

う蝕は認められない。左右の外耳道に骨腫が認められる。

その他に特に特記所見はない。

2号人骨(性別不明・壮年)

頭蓋が遺存するだけである。保存状態は悪い。頭蓋の破片の一部に赤色顔料が付着している。歯式は以下の通りである。

	5 6 7 8

咬耗度はMartinの1～2度であり、このことから、本人骨の年齢は壮年期と推定される。性別は不明である。

う蝕は認められない。

他に特記所見は認められない。

3号人骨(男性・熟年)

保存状態は悪い。前頭部から頭頂部にかけての頭蓋片が残るのみである。

赤色顔料は前頭部に付着している。性別は、眉弓の突出が強いことから男性である。年齢は前頭縫

合と矢状縫合の内板が閉鎖し、外板も閉鎖し始めていることから熟年と推定した。その他の特記所見は認められない。

島内地下式横穴墓群101号墓

1号人骨(性別不明・熟年)

全身が遺存しているが、保存状態は悪い。頭蓋の顔面から側頭部にかけて赤色顔料が付着している。

性判定が可能な骨の部位が遺存していないので、性別は不明である。年齢は歯の咬耗度がMartinの2～3度であることから熟年と判定した。歯式は次の通りである。

$\dot{3}$	$\dot{3}$
×●●●○3○○	×○3 4 5●●×

その他に特記所見は認められない。

2号人骨(男性・熟年)

全身が遺存しているが、保存状態は悪い。赤色顔料は遺存している人骨に付着していない。歯式は次の通りである。

$\dot{\dot{3}}\times\dot{\dot{1}}$	$\dot{\dot{1}}\,\dot{\dot{2}}\times\times\times\times\times$
8●●5 4 3 2 1	$\dot{\dot{1}}\times\dot{\dot{3}}\,\dot{\dot{4}}\,\dot{\dot{5}}\,\dot{\dot{6}}\times\times$

咬耗度はMartinの2～3度であり、熟年と推定される。性別は眉弓の突出が強いことから男性と判定される。

遺存している上顎切歯(上顎左中切歯、上顎右中切歯、上顎左側切歯)の舌側面に磨耗痕が認められる。これまでに島内から出土した人骨に確認された上顎切歯部舌側面磨耗(LSAMAT)と同様のものである(写真1)。

四肢骨は、上腕骨は三角筋粗面が良く発達している。大腿骨にも弱い柱状性が認められる。脛骨の扁平性は左が観察する限りにおいては扁平のように見える。

3号人骨(男性・壮年)

全身が遺存しているが、保存状態は悪い。赤色顔料は検出されていない。

歯式は次の通りである。

××××××××	$\dot{\dot{1}}\times\times\times\times\dot{\dot{7}}\times$
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度である。歯の咬耗度から、本人骨の死亡時の年齢を壮年と推定した。性別は頭蓋の側頭骨の乳様突起が大きいことから男性と判定した。

上腕骨の筋付着部はあまり発達していない。下肢は大腿骨に強い柱状形成が認められるが、脛骨には認められない。

そのほか、特に特記すべき事項はない。

島内地下式横穴墓群102号墓

1号人骨(不明・壮年)

頭蓋と下肢の一部が遺存するだけで、保存状態は悪い。赤色顔料は顔面部に付着しているだけである。

性別は不明である(性判定できる骨の部位が遺存していないため)。年齢は、下顎左第三大臼歯が萌出しており、歯の咬耗度がMartinの1度と2度であることから、壮年と推定した。歯式は次の通りである。

××××××××	×××××××××
××××××××	××××××× 8

他に特記すべき所見はない。

島内地下式横穴墓群103号墓

1号人骨(女性・老年)

頭蓋と四肢の一部が遺存するだけで、保存状態はよくない。遺存している人骨に赤色顔料は確認できない。

年齢は、観察できる頭蓋3主縫合(矢状縫合・ラムダ縫合)の内外板のほとんどが癒合していることから老年と推定される。性別は、左側頭骨の乳様突起が小さい骨、遺存している四肢骨が華奢であることから女性と判定される。

頭蓋の右頭頂骨に陥凹が認められる。最深部はもともとの外板の位置から約5mm凹んでいる(写真2)。これは、骨実質の減少によるもので、老年期の女性に報告されている。

2号人骨(男性・熟年)

頭蓋と下肢が遺存する。保存状態はよくない。頭蓋の前頭部にのみ赤色顔料が検出された。歯式は次の通りである。

××××××××	×××××××××
××6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 ●××

遺存している歯の咬耗度はMartinの2～3度である。また頭蓋3主縫合は内板は癒合し、外板もそのほとんどが癒合している。したがって、本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。性別は頭蓋

の側頭骨の乳様突起が大きいことから男性と判定した。

下肢は大腿骨に強い柱状形成が認められるが、脛骨には扁平性は認められない。

そのほか、特に特記すべき事項はない。

3号人骨(女性・壮年後期)

頭蓋と下肢が遺存しているが、保存状態は悪い。赤色顔料は、頭蓋から検出され、前頭部、頭頂部、側頭部に認められる。

性別は、側頭骨の乳様突起、後頭骨の外後頭隆起の大きさが小さいことから女性と判定される。年齢は、頭蓋の縫合の内板が癒合している部分があること、歯の咬耗がMartinの1～2度であることを考え合わせると壮年後期と推定される。

3号人骨+(性別不明・若～壮年)

歯だけが3号人骨の中に混入していた。性別は不明である。歯の咬耗はMartinの0～1度であり、若年～壮年と推定される。他に特記すべき事項はない。

島内地下式横穴墓群104号墓

天井の崩落によって、かなり人骨が動いており、発掘時、1号人骨から4号人骨として取り上げたが、その他にも埋葬されていた。少なくとも5体の人骨が埋葬されていた。

1号人骨(男性・壮年)

全身の骨が遺存するが、保存状態はよくない。頭蓋では側頭骨から顔面にかけて、上半身では、鎖骨や肋骨に赤色顔料が検出された。

歯式は次の通りである。

×7̇6̇5̇4̇×××	××3̇4̇5̇6̇××
×7̇6̇5̇4̇3××	××3̇×5̇6̇7̇×

遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度である。観察可能な頭蓋3主縫合は内外板とも癒合しておらず、本人骨の死亡時の年齢を壮年と推定した。性別は頭蓋の後頭骨の外後頭隆起が大きいことから男性と判定した。

上肢は左の上腕骨が太く、三角筋粗面が発達している。下肢は左右の脛骨に扁平性は認められない。

そのほか、特に特記すべき事項はない。

2号人骨(不明・不明)

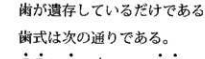
下肢が遺存するのみ。遺存する右脛骨の太さは細い。赤色顔料の付着状況等、不明。そのほか、

特に特記すべき事項はない。

3号人骨(性別不明・幼児5～6歳)

歯が遺存しているだけである。保存状態はよくない。歯に赤色顔料が付着している。

歯式は次の通りである。

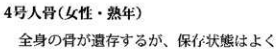


下顎の歯は遺存していないので、上顎に関してしか記載できないが、永久歯は萌出しておらず、萌出しているのは乳歯のみである。歯の萌出状況と咬耗度、顎骨中で発育途中の永久歯の歯冠や歯根の形成状況から考えると、本人骨の死亡年齢は5～6歳と推定される。性別は不明である。遺存している乳歯にう蝕は認められない。他に特記すべき事項はない。

4号人骨(女性・熟年)

全身の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。赤色顔料の付着は認められない。

歯式は次の通りである。



遺存している歯の咬耗度はMartinの2～3度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内、矢状縫合やラムダ縫合の内外板の一部が癒合しており、本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が弱いこと、後頭骨の外後頭隆起が小さいことから女性と判定した。

上肢は右上腕骨が非常に華奢である。下肢も華奢で、左右の大腿骨に柱状性は認められない。また左右の脛骨にも扁平性は認められない。

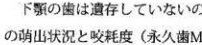
頭蓋の右頭頂骨のラムダ付近の骨欠損(写真3)

頭蓋の右頭頂骨のラムダ近くにだ円状の骨欠損が認められる。ラムダから約2cmのところにある。ラムダ近くの骨欠損は、外板表面では長径16mm、短径6mmのだ円である。内板表面では長径9mm、短径4mmのやはりだ円である。だ円状の骨欠損の左側(欠状縫合に近い側)の縁および右斜め下側は海面質が露出しているが、凸凹はない。だ円の左右の長い縁は滑らかな平面をなし、上下の強い弯曲部分も滑らかに弯曲している。他の骨の部位の色調と変わるところもない。したがって、この欠損は最近生じたものではない。この骨欠損は何らかが刺さった時にできた傷痕の可能性が高い。それは傷口の大きさから、鏃または剣の切っ先が刺さってできた傷痕であろう。内板も貫通しており、切っ先は少なくとも数mmは頭蓋内に入っていたと推定できる。そうだとすると、入った切っ先が脳膜中の血管を傷つけ、この傷が致命傷になった可能性は十分考えられる。また、海面質の右斜め下方の海面質の露出した滑らかな弯曲部分の面積は大きい。これはこの傷を作った武器がこの方向から達したことを示している。

5号人骨(性別不明・小児6～7歳)

歯が遺存しているだけである。保存状態はよくない。赤色顔料は認められない。

歯式は次の通りである。



下顎の歯は遺存していないので、上顎に関してしか記載できないが、永久歯は萌出している。歯の萌出状況と咬耗度（永久歯Martinの1度）、顎骨中で発育途中の永久歯の歯冠や歯根の形成状況から考えると、本人骨の死亡年齢は6～7歳と推定される。性別は不明である。う蝕が上顎右第一大臼歯の咬合面に認められる。

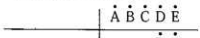
烏内地下式横穴墓群105号墓

天井の崩落によって、かなり人骨が動いており、発掘時、1号人骨から4号人骨として取り上げたが、その他にも埋葬されていた。少なくとも5体の人骨が埋葬されていた。

1号人骨(性別不明・幼児3～4歳)

頭蓋と下肢の一部が遺存しているだけである。保存状態はよくない。赤色顔料は前頭部から顔面にかけて確認される。

歯式は次の通りである。

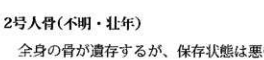


永久歯は萌出していない。歯の萌出状況と咬耗度（永久歯Martinの1～2度）、顎骨中で発育途中の永久歯の歯冠や歯根の形成状況から考えると、本人骨の死亡年齢は3～4歳と推定される。性別は不明である。う蝕が上顎左乳犬歯の唇側面に認められる。

2号人骨(不明・壮年)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。頭蓋では顔面部に赤色顔料が検出された。

歯式は次の通りである。



遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度であり、年齢を壮年と推定した。性別は不明である。

他に特記すべき事項はない。

3号人骨(男性・熟年)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。頭蓋の顔面部に赤色顔料が付着している。

歯式は次の通りである。

7 6 5 4 3 2 1	1○3 4 5○7
⑧7 6 5 4 3 2○	○2 3 4 5 6○×

遺存している歯の咬耗度はMartinの2～3度である。本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が強いことから、男性と判定した。

左右の大腿骨に柱状形成が認められる。

4号人骨(男性・壮年後期)

全身の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。頭蓋の前頭部から顔面部にかけてと上半身の内、右鎖骨や右肩甲骨に赤色顔料が付着している。性別は頭蓋の右乳様突起が大きいこと、後頭骨の外後頭隆起が大きいことから、男性と判定した。

歯式は次の通りである。

××××××××	○●○4 5×××
××××××2×	××3××××

遺存している歯の咬耗度はMartinの2度である。観察可能な頭蓋3主縫合は内外板とも癒合しておらず、したがって本人骨の死亡時の年齢を壮年後期と推定した。う蝕が上顎左小臼歯部に認められる。

左右の大腿骨に柱状形成が認められる。左右の脛骨の扁平性は著しい。

島内地下式横穴墓群106号墓

1号人骨(不明・幼児5～6歳)

全身の骨が遺存しているが、保存状態は悪い。赤色顔料は頭蓋片に付着している。

歯式は次の通りである。

E D	
E D	

永久歯は萌出していない。歯の萌出状況と咬耗度(永久歯Martinの1～2度)、顎骨中で発育途中の永久歯の歯冠や歯根の形成状況から考えると、本人骨の死亡年齢は5～6歳と推定される。性別は不明である。

2号人骨(女性・熟年)(写真4)

頭蓋と下肢の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。頭蓋の前頭部から顔面にかけて赤色顔料が付着する。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が弱いこと、左右の側頭骨の乳様突起が小さいこと、後頭骨の外後頭隆起の突出が弱いことから女性と判定した。

歯式は次の通りである。

●●●5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7○
×7 6×4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6●●

遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内、矢状縫合やラムダ縫合の内外板の一部が癒合しており、本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。

上顎右中切歯にC4のう蝕が認められる。上顎左中切歯の唇側面全体のエナメル質が欠けており、破折による剥落の可能性が考えられる。左右中切歯の舌側面のエナメル質は遺存しており、生前の状態を保っている。これから見ると、生前、左右の中切歯の咬合面は、隣接する側切歯の咬合面よりも約1～2mm低くなっている。左中切歯の唇側面の広範なエナメル剥落や右中切歯のC4う蝕を考えると、左右の中切歯を何らかの作業等によく使っていて、左右の中切歯の咬合面が早くさがった。それらの作業の際に歯質の破折や剥落が起こり、左ではエナメル質の剥落、右ではC4となったことも十分考えられる。歯質の破折や剥落の後、咬合面が下がった可能性も完全に否定はできないが、咬合面に残る歯質の面積を考えると、残り少ない歯質がこのようにうまくすり減るとは考えにくい。

右の大腿骨に柱状形成は認められない。

3号人骨(女性・老年)

全身の骨が遺存するが、保存状態は比較的よい。頭蓋の前頭部から顔面にかけてと左肩甲骨に赤色顔料が付着する。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が弱いこと、左右の側頭骨の乳様突起が小さいこと、後頭骨の外後頭隆起の突出が弱いことから女性と判定した。

歯式は次の通りである。

●●●●●3●○ | 1●○●●●●●
○○6 5●○●● | ●●3 4○○○○

遺存している歯の咬耗度はMartinの2度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内、矢状縫合やラムダ縫合の内外板のかなりの部分が癒合しており、本人骨の死亡時の年齢を老年と推定した。

下顎右第1小臼歯にC4のう蝕が認められる。

上肢は上腕、前腕ともに華奢である。下肢も華奢である。

4号人骨(女性・壮年後期) (写真5)

全身の骨が遺存する。保存状態はよい。頭蓋の前頭部から顔面部に赤色顔料が付着する。性別は左右の寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と判定した。右寛骨には耳状面前溝が認められる。これは妊娠を経験した女性に認められるといわれており、本人骨も経産婦であった可能性が高い。

歯式は次の通りである。

7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7
●6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7×

遺存している歯の咬耗度はMartinの2度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内板は癒合が始まっている。本人骨の死亡時の年齢を壮年後期と推定した。

咬合は鉗子状咬合であり、上顎の左右の犬歯間の舌側面に磨耗面が認められる。これは、鋏状咬合によるものではない。これまでにも、島内で報告されてきた上顎前歯舌側面磨耗(LSAMAT)である。

また、脳頭蓋のブレグマ後方に帯状の浅い凹みが確認できる。帯状の凹みは、ブレグマ後方から左右に側頭窩に向かってドる。幅は約25mm、最深部はブレグマから約14mmのところの矢状縫合上にある。深さは一番深いところで約1～2mm程度しかない。この凹みは、金関丈夫がアイヌや台湾原住民(タイヤル族)の頭蓋中に指摘した頭上運搬の痕跡の可能性がある。金関は頭上運搬の風習のない現代日本人にも、ブレグマ後方に帯状の凹みが出現することを指摘している。本例の場合、後頭顆の関節面が左右ともに大きい(上関節面よりも5mm大きい)。後頭顆と環椎の上関節面が作る関節は可動性が低いと言われていたと思うが、本例のこの関節面の大きさの違いは何に由来するのだろうか。これも頭上前方運搬の影響とも考えてよいのではなかろうか。古墳時代の島内の人々も、頭上前方運搬を行っていた可能性を考えてよいのではなかろうか。

四肢骨の筋付着部はそれほど発達していない。左大腿骨の最大長が計測できたので、ピアソン式により身長を推定すると、150.3cmとなる。

島内地下式横穴墓群107号墓

1号人骨(女性・熟年) (写真6)

頭蓋と下肢の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。頭蓋の前頭部から顔面部にかけて、赤色顔料が付着する。

歯式は次の通りである。

7 6 5 4 3 2 1	i̇×3 4 5×7̇
7 6 5 4 3 2○	○○○4 5 6 7

遺存している歯の咬耗度はMartinの2～3度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内、矢状縫合やラムダ縫合の内外板の一部が癒合しており、本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が弱いこと、側頭骨の乳様突起が小さいことから女性と判定した。

咬合は鉗子状で、上顎の左右中切歯の舌側面に磨耗が認められる。これは、これまでにも島内地下式横穴墓群から出土した人骨に認められた上顎前歯部舌側面磨耗(LSAMAT)である。食事または生業に関する作業の一環として、上顎左右の中切歯の舌側面を使って何かをしごく作業をしたために生じた磨耗面である。本例は象牙質まで露出はしていない。

下肢は遺存している右脛骨に扁平性は認められない。

脳頭蓋のブレグマ後方に帯状の浅い凹みが確認できる。帯状の凹みは、ブレグマ後方から左右に側頭窩に向かって下る。幅は約25mm、最深部はブレグマから約12mmのところの矢状縫合上にある。深さは一番深いところで約1mm程度しかない。この凹みは、前述した頭上運搬の痕跡の可能性がある。本例の場合、後頭顆に骨棘が認められ変形性関節炎が起こっていた。変形性関節炎も、頭上前方運搬の影響とも考えられる。古墳時代の島内の人々も、頭上前方運搬を行っていた可能性がある。

2号人骨(女性・熟年)

頭蓋と下肢の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。頭蓋の前頭部に赤色顔料が付着する。

歯式は次の通りである。

$\dot{8}\times\times\times\times\times\times$	$\times\times\times\times\times\times\times\times$
$\times 7\,6\,5\,\dot{4}\times\times\times$	$\times\times\times\times 5\,6\,7\times$

遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度である。観察可能な頭蓋3主縫合の内、矢状縫合やラムダ縫合の内外板の一部が癒合しており、本人骨の死亡時の年齢を熟年と推定した。性別は頭蓋の前頭骨の眉弓の突出が弱いこと、左側頭骨の乳様突起が小さいこと、後頭骨の外後頭隆起の突出が弱いことから女性と判定した。

左右の大腿骨に柱状形成は認められない。左右の脛骨に扁平性が認められる。右大腿骨の最大長は415mmであり、右大腿骨の最大長を用いてピアソン式で推定身長を計算すると、153.6cmとなる。

島内地下式横穴墓群108号墓

1号人骨(女性・熟年)

全身の骨が遺存するが、保存状態はよくはない。顔面部に赤色顔料が付着する。

歯式は次の通りである。

$\times\dot{7}\bigcirc 5\,4\times\times\times$	$\bullet\bullet 3\bullet\bullet\bullet\bullet\bullet$
$\times\times\times\dot{5}\times\times\times\times$	$\times\times\times\times\times\times\times\times$

遺存している歯の咬耗度はMartinの1～2度である。性別は右寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいこと、頭蓋の左右の側頭骨の乳様突起が小さいこと、後頭骨の外後頭隆起の大きさが小さいことから女性と判定した。

大腿骨には、柱状形成が認められ、遺存している右脛骨には、扁平性が認められる。

島内地下式横穴墓群109号墓

1号人骨(男性・熟年)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。赤色顔料の付着については不明である。

歯式は次の通りである。

×7̇○54×××	●●3●●●●●
×××5̇××××	×××××××××

遺存している歯の咬耗度はMartinの2～3度である。性別は頭蓋の左の側頭骨の乳様突起が大きいことから男性と判定した。

下顎右第一小臼歯の近心舌側に集合性歯牙腫が認められる。少なくとも4つの矮小歯が存在する(写真7)。

四肢骨は遺存しているが、小骨片のみのため、特に所見は認められない。

島内地下式横穴墓群110号墓

1号人骨(不明・小児9～10歳)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。赤色顔料の付着については不明である。

歯式は次の通りである。

××6̇×××2̇×	×××D̈Ë6̇××
××6̇E④③21	12③④Ë6̇××

遺存している乳歯の咬耗度はMartinの2度、永久歯の咬耗度はMartinの1度である。性別は不明である。遺存している歯にう蝕、エナメル質減形成など認められない。

四肢骨は遺存しているが、特記すべき所見は認められない。

2号人骨(男性・若年18～20歳)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。頭蓋の顔面部に赤色顔料が付着している。性別は右側頭骨の乳様突起の大きさが大きいことから男性と判定した。

歯式は次の通りである。

⑧×××××××	××××6̇7̇×
⑧7654321	12345678

観察できる歯の咬耗度はMartinの1～2度である。遺存している四肢骨の中で骨端の癒合状況を観察できる左大腿骨の骨頭は癒合している。右大腿骨遠位端は未癒合、右脛骨近位端は癒合しているものの癒合線が観察できる。したがって、年齢は若年(18～20歳)と推定される。遺存している歯にう蝕、エナメル質減形成など認められない。

四肢骨は遺存しているが、特記すべき所見は認められない。

3号人骨(女性・壮年)

全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。遺存している人骨に赤色顔料の付着は認められない。性別は右側頭骨の乳様突起の大きさが小さいことから女性と判定した。

歯式は次の通りである。

$$\frac{8\,7\,6\,5\,\dot{4}\,\dot{3}\times\times}{\bullet 6\,5\,4\,3\,2\,1} \;\Big|\; \frac{1\,2\,3\,4\times\times\times\times}{1\,2\,3\,4\,5\,6\,\dot{7}}$$

観察できる歯の咬耗度はMartinの1～2度である。観察できる頭蓋3主縫合に癒合は認められない。したがって、年齢は壮年と推定される。遺存している下顎の左右の犬歯にエナメル質減形成が認められる。外耳道に大きな骨腫が認められる(写真8)。

四肢骨は遺存しているが、特記すべき所見は認められない。

4号人骨(男性・熟年)

全身の骨が遺存するが、保存状態はよくない。遺存している人骨に赤色顔料の付着は認められない。性別は眉弓の突出が大きいこと、左右側頭骨の乳様突起が大きいことから男性と判定した。

歯式は次の通りである。

$$\frac{8\,\dot{7}\,6\,5\,4\,3\,2\,\dot{1}}{\times\,\dot{7}\,\dot{6}\,5\,4\times\times} \;\Big|\; \frac{\dot{1}\times\times\dot{4}\times 6\,7\,8}{\times\times\times\times\,\dot{6}\times\times}$$

観察できる歯の咬耗度はMartinの2～3度である。観察できる頭蓋3主縫合は内板は全て癒合し、外板も矢状縫合のすべてとラムダ縫合の一部に癒合は認められる。したがって、年齢は熟年と推定される。

四肢骨は、左右の大腿骨に柱状形成が、左脛骨に扁平性が認められる。その他、特記すべき所見はない。

島内地下式横穴墓群112号墓

玄室の天井が陥没して発見されたため、人骨がかなり動いている。骨の保存状態も悪いため、取り上げた人骨の詳細な個別同定はできない。この墓に4体は埋葬されたと思われる。少なくとも成人1体、小児(6歳) 1体は埋葬されている。

島内地下式横穴墓群116号墓

玄室の天井が陥没して発見されたため、人骨は崩落土の影響により、原位置を保っているのか定かではない。骨片に番号をつけて、取り上げた。Hには下顎骨と植立している歯(下顎左第一小臼歯から第二大臼歯)が遺存している。また、JとEには左右の大腿骨片が遺存している。

取り上げた骨片の数は多くはないが、下顎左第一大臼歯が2本検出されており、少なくとも2体は埋葬されている可能性が高い。

遺存している大腿骨は骨体部が太く、柱状形成も発達していることから、成人の男性が1体は含まれている可能性が考えられる。遺存人骨に特記所見は認められない。

烏内地下式横穴墓群125号墓

1号人骨(性別不明・壮年)

頭蓋と体肢骨の一部が遺存する。保存状態はよくない。頭蓋は脳頭蓋片が遺存するのみである。遺存する人骨に赤色顔料の付着は認められない。性判定が可能な部位が遺存していないので、性別は不明である。年齢は、頭蓋のラムダ縫合の内板の一部が癒合していることから壮年と推定した。

四肢骨の筋付着部は発達していない。大腿骨に柱状性は認められない。脛骨に扁平性は認められない。

2号人骨(男性・壮年)

全身の骨が遺存する。保存状態は悪くはない。前頭部から頸部にかけて赤色顔料が付着している。性別は前頭骨の眉弓の突出が強いことから男性と判定される。観察できる頭蓋3主縫合に癒合は認められない。歯式は次の通りである。

7 6 ○ ○ ○ × ×	× 2̇ × 4̇ × × × ×
× ● 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 ○ 7 ○

観察できる歯の咬耗度はMartinの1～2度である。したがって、年齢は壮年と推定される。遺存する4本の歯にう蝕が認められる。

四肢骨に特記すべき所見は認められない。

烏内地下式横穴墓群126号墓

1号人骨(男性・壮年) (写真9)

全身の骨が遺存する。保存状態は非常によい。前頭部から顔面部にかけて赤色顔料が付着している。性別は右寛骨大坐骨切痕の角度が大きいことから男性と判定される。観察できる頭蓋3主縫合に癒合は認められない。歯式は次の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

観察できる歯の咬耗度はMartinの1～2度である。したがって、年齢は壮年と推定される。遺存している3本の歯にう蝕が認められる。

四肢骨は、筋付着部が発達している。特に、上腕骨の三角筋粗面、大腿骨の柱状形成、脛骨の扁

平性が著しい。

2号人骨(男性・壮年) (写真10)

全身の骨が遺存する。保存状態はよい。頭蓋に赤色顔料が付着している。顔面から右後頭部にかけての部位に付着している。左頭頂骨から後頭骨の左半分には付着していない。性別は、左寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいこと、眉弓の突出が大きいこと、外後頭隆起が大きいことから男性と判定した。

歯式は次の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ○
○ ● 6 5 4 3 2 ○	○ 2 3 4 5 6 ● ○

年齢は歯の咬耗がMartinの1～2度、頭蓋3主縫合の内板の一部が癒合し始めていることから壮年と推定される。

四肢骨の筋付着部は126号墓1号人骨ほど発達していない。大腿骨に柱状形成が認められる。

前頭骨に認められた受傷痕

本人骨には前頭骨の左側に大きな骨欠損が認められる。この陥没の大きさは左右36mm、前後21mmの蒲鉾形をした骨欠損である。ちなみに蒲鉾形の頂部は前方側、前頭縫合側の後方は蒲鉾の底部に相当する。前方の傷口周囲は上前方に隆起している。前方の傷口の深さは深いところで約12～15mmである。海面質は露出しておらず、治癒機転が働いたことがわかる。後壁も傷口の深さは深いところで約12mmで、海面質は露出しておらず、治癒機転が働いている。頭蓋外板の右側の傷口の縁は正中線を越えており、その右約7mmの点に向かって外板の表面が沈んでいる。また、傷口の後縁の約5mm後方には2次骨折線が治癒した痕跡が肉眼でも確認できる場所がある。頭蓋内腔の方向から内板表面を観察しても、受傷時、傷口の後縁に2次骨折線が存在し、それが治癒したことがわかる。この傷は、受傷痕であり、傷口の形状は蒲鉾形に近い形状をしていたと推測される。石斧のようなものを想定してみたい。この傷をもたらした武器は頭蓋の後上方から前下方に打ち下ろされたものである。治癒の痕跡からこの傷は少なくとも1年以上前に受けた傷であろう。

3号人骨(女性・壮年)

頭蓋と体肢骨の一部が遺存する。保存状態はよくない。頭蓋は脳頭蓋が遺存するのみである。前頭部に赤色顔料が付着している。性別は、眉弓の突出が小さいことから女性と判定した。年齢は、観察できる頭蓋3主縫合の内・外板が癒合していないこと、遺存している左腸骨の遠位端は癒合が完了していることから壮年と推定される。

遺存している四肢骨に、特記すべき所見は認められない。

島内地下式横穴墓群127号墓

1号人骨(男性・壮年)

全身の骨が遺存する。保存状態は悪くはない。前頭部から頸部にかけて赤色顔料が付着している。性別は前頭骨の眉弓の突出が強いことから男性と判定される。観察できる頭蓋3主縫合に癒合は認められない。歯式は次の通りである。

8 7 6 5 ○ 3 ○ ○	○ ○ 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 ○ 3 4 5 6 7 8

観察できる歯の咬耗度はMartinの1 ～ 2度である。したがって、年齢は壮年と推定される。遺存する6本の歯にう蝕が認められる。

四肢骨に特記すべき所見は認められない。

2号人骨(女性・壮年) (写真11)

全身の骨が遺存する。頭蓋の保存状態は大変よいが、体肢骨の保存状態は悪い。前頭部から頸部にかけて赤色顔料が付着している。性別は右寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と判定される。観察できる頭蓋3主縫合に癒合は認められない。歯式は次の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

観察できる歯の咬耗度はMartinの1 ～ 2度である。したがって、年齢は壮年と推定される。遺存する5本の歯にう蝕が認められる。

四肢骨に特記すべき所見は認められない。

島内地下式横穴墓群出土人骨の形質

今回報告した島内地下式横穴墓群の100 ～ 112号墓、116号墓と125 ～ 127号墓から出土した古墳時代人骨は、これまでに島内から出土した人骨とほぼ同様の特徴を持っている。これまで報告された島内の男性成人骨の頭蓋計測値と今回報告したそれらを集計し、比較したのが表2である。島内の成人骨は周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴を多く持つ(表2)。サイズの比較的大きな脳頭蓋、頭蓋長幅示数が中頭型、広鼻、前頭部の突出、鼻骨の湾曲などが、周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴である。計測値の比較から、島内古墳人は集団としては、基本的に縄文人的特徴を多く持つことがわかる。

参考文献

松下孝幸(1990)「南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究」.『長崎医学会雑誌』65巻. 781-804.

内藤芳篤(1984)「九州における縄文人骨から弥生人骨への移行」.『人類学　その他様な発展』. pp. 52-59. 東京. 日経サイエンス.

Saiki K., WakebeT., Nagashima S. (2000) *Cranial nonmetrical analyses of the Yayoi people in the northwestern Kyushu area.* Anthropological Science. Vol.108. 27-44.

竹中正巳・大西智和(1998)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70号墓発掘調査概報」.『人類史研究』10号. 5-6,185-189.

竹中正巳・大西智和(1999)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70・71・72・73・74・75号墓発掘調査報告」.『人類史研究』11号. 5-9,159-188.

竹中正巳・大西智和(2000)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群76・77・78・79・87・88・89・90・91号墓発掘調査概報」.『人類史研究』12号. 3-4,141-150.

竹中正巳・峰　和治・大西智和・小片丘彦・染田英利(2001)「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨」.『島内地下式横穴墓群』. えびの市埋蔵文化財調査報告書29：別編 1-109.

表1. 島内地下式横穴墓群100～112、116、125～127号墓出土人骨一覧

墓番号	人骨番号	性別	年齢	保存状態	赤色顔料			特記事項
					頭部	上半身	下半身	
100号墓	1号人骨	女性	壮年	×	○	?	×	
	2号人骨	不明	壮年	×	○	?	?	
	3号人骨	男性	熟年	×	○	?	?	
101号墓	1号人骨	不明	熟年	×	○	×	×	
	2号人骨	男性	熟年	×	×	×	×	LSAMAT
	3号人骨	男性	壮年	×	×	×	×	
102号墓	1号人骨	不明	壮年	×	○	?	×	
103号墓	1号人骨	女性	老年	×	×	×	×	
	2号人骨	男性	熟年	△	○	?	×	
	3号人骨	女性	壮年後期	△	○	?	×	
	3号人骨＋	不明	若年～壮年	×	?	?	?	
104号墓	1号人骨	男性	壮年	×	○	○	×	
	2号人骨	不明	不明	×	不明	不明	不明	
	3号人骨	不明	幼児(5～6歳)	×	○	不明	不明	
	4号人骨	女性	熟年	△	×	×	×	
	5号人骨	不明	小児(6～7歳)	×	不明	不明	不明	
105号墓	1号人骨	不明	幼児(3～4歳)	×	○	不明	不明	
	2号人骨	不明	壮年	×	○	不明	不明	
	3号人骨	男性	熟年	×	○	×	×	
	4号人骨	男性	壮年後期	△	○	○	×	
106号墓	1号人骨	不明	幼児(5～6歳)	×	○	不明	不明	
	2号人骨	女性	熟年	△	○	不明	×	
	3号人骨	女性	老年	△	○	○	×	
	4号人骨	女性	壮年後期	○	○	×	×	LSAMAT、頭上前方運搬の可能性
107号墓	1号人骨	女性	熟年	△	○	不明	×	LSAMAT、頭上前方運搬の可能性
	2号人骨	女性	熟年	△	○	不明	×	身長153.6cm
108号墓	1号人骨	女性	熟年	×	○	×	×	
109号墓	1号人骨	男性	熟年	×	不明	不明	不明	歯牙腫
110号墓	1号人骨	不明	小児(9～10歳)	×	不明	不明	不明	
	2号人骨	男性	若年(18～20歳)	×	○	不明	×	
	3号人骨	女性	壮年	×	×	不明	×	
	4号人骨	男性	熟年	△	×	×	×	
112号墓	4体以上		成人1、小児1ほか	×	不明	不明	不明	4体は埋葬された。成人1個体、小児(6歳)1個体が含まれる。
116号墓	2体以上		成人1ほか	×	不明	不明	不明	少なくとも2体内1体は成人男性
125号墓	1号人骨	不明	壮年	×	不明	不明	×	
	2号人骨	男性	壮年	△	○	○	×	
126号墓	1号人骨	男性	壮年	○	○	×	×	
	2号人骨	男性	壮年	○	○	×	×	前頭部に骨欠損
	3号人骨	女性	壮年	△	○	不明	不明	
127号墓	1号人骨	男性	壮年	△	○	○	×	
	2号人骨	女性	壮年	○	○	○	×	

表2　男性頭蓋計測値（mm）および示数の比較

		島内 (古墳)			南九州 山間部 (古墳)[1]		宮崎 平野Ⅰ (古墳)[1]		宮崎 平野Ⅱ (古墳)[1]		大隅半島 (古墳)		山陽 (古墳)[2]		津雲 (縄文)[3]		北部九州・山口 (弥生)[4]		西北九州 (弥生)[5]		広田 (弥生)[6]		松之尾 (弥生)[7]		鹿児島 (近世)[7]		鹿児島 (現代)[8]	
		N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	20	181.8	5.47	15	181.1	4	176.8	1	171.0	4	186.3	44	180.8	16	186.4	179	183.4	21	182.8	23	164.4	11	185.2	26	177.4		
8	頭蓋最大幅	22	143.9	4.85	24	141.3	5	142.0	1	(130)	5	148.4	46	141.6	18	144.4	179	142.3	20	145.0	23	146.8	12	138.4	26	143.4		
17	バジオン・ブレグマ高	27	137.4	3.93	22	135.8	5	136.2	1	129	4	134.5	35	134.0	13	134.0	146	137.0	15	134.6	15	129.9	7	137.4	26	139.1		
8/1	頭蓋長幅示数	13	78.4	4.01	9	77.2	4	80.9	1	(76.0)	2	79.2	39	78.8	16	77.7	163	77.7	20	79.2	23	89.4	11	74.9	26	81.0		
17/1	頭蓋長高示数	17	75.8	2.26	12	75.0	4	76.5	1	75.4	2	72.6	31	74.2	13	71.6	134	75.0	15	74.2	15	79.0	6	74.9	26	78.5		
17/8	頭蓋幅高示数	20	96.2	3.56	14	96.1	4	94.6	1	(99.2)	3	89.2	34	94.5	13	92.2	136	96.3	14	93.1	15	88.4	7	97.8	26	97.1		
23	頭蓋水平周	11	529.9	7.12	8	512.8	2	513.5	1	499	3	533.3	32	519.0	15	532.3	143	528.4	19	530.4	17	497.6	10	527.1				
24	横弧長	16	321.6	9.41	16	308.8	5	310.0			2	318.5	35	311.7	16	310.3	173	316.1	15	324.7	19	321.6	8	310.8				
25	正中矢状弧長	12	377.2	9.68	8	371.6					2	372.5	23	367.7	13	375.0	119	377.6	17	376.5	12	344.6	5	379.8				
45	頬骨弓幅	10	139.8	3.12	10	139.8	1	138.0	1	[134]	4	144.0	32	136.6	6	143.2	147	139.8	12	138.4	7	137.7	5	133.4	23	135.2		
46	中顔幅	20	101.1	4.39	19	101.9	1	98.0			4	104.0	44	102.1	9	103.6	160	104.6	17	105.0	8	98.9	10	100.4	26	99.5		
47	顔高	24	116.8	6.56	22	114.2	2	120.5	1	124	5	121.8	27	115.8	11	115.8	107	123.2	14	117.1	9	109.3	11	120.3				
48	上顔高	28	69.3	3.92	29	64.0	5	68.0	1	72	7	71.7	49	68.8	13	67.0	152	74.3	17	68.1	10	62.2	8	66.8	10	68.5		
47/45	Kollmann 顔示数	5	86.9	3.14	8	81.3	1	89.1	1	[92.5]	3	84.1	18	79.9	4	79.6	95	88.0	12	84.6	7	79.9	5	87.9				
47/46	Virchow 顔示数	14	116.5	5.94	15	112.0	1	125.5			3	115.7	26	112.8			101	117.6	14	111.8	7	111.6	10	120.0				
48/45	Kollmann 上顔示数	6	51.2	2.00	8	45.3	1	47.8	1	[53.7]	4	49.7	29	50.7	6	48.3	129	53.0	12	49.3	7	45.6	3	48.7	8	51.1		
48/46	Virchow 上顔示数	17	69.1	2.38	15	62.6	1	67.4			4	68.7	41	67.5	8	67.7	142	71.0	17	64.8	8	63.4	7	67.5	10	69.5		
51	眼窩幅	27	42.5	1.62	25	43.0	4	42.0	1	45	4	44.5	46	43.0	14	43.5	128	43.3	15	43.1	8	43.1	9	42.9	26	43.0		
52	眼窩高	26	33.7	1.57	33	32.6	4	33.3	1	33	4	32.0	43	34.1	12	33.5	134	34.5	15	32.8	9	31.8	9	33.7	26	34.8		
52/51	眼窩示数	21	79.2	3.96	25	76.4	2	77.3	1	73.3	4	72.0	43	79.4	12	76.5	124	79.7	15	76.2	8	74.2	9	78.6	26	80.9		
54	鼻幅	28	27.3	1.57	34	27.5	5	25.4	1	28	7	26.9	53	26.4	13	26.6	160	27.1	16	27.8	10	26.1	10	25.6	26	26.3		
55	鼻高	30	49.8	3.11	36	49.4	6	52.0	1	52	7	53.0	53	51.8	14	48.6	158	52.8	16	51.0	10	45.2	11	52.5	26*	52.0		
54/55	鼻示数	22	55.0	3.83	32	55.7	5	49.6	1	53.9	7	50.8	50	51.2	12	54.5	154	51.3	16	54.4	9	57.0	10	48.7	26	50.6		
57	鼻骨最小幅	26	9.0	1.48	29	9.6	5	8.4	1	9	7	8.4	47	7.7	9	9.2	155	8.2	13	10.2									
50/F	鼻根湾曲示数	21	80.7	7.20	29	83.5	6	86.2	1	81.0	5	82.6	42	88.7			150	88.5	13	76.7									

[1]松下(1990)，[2]池田(1993)，[3]清野・宮本(1926)，[4]中橋・永井(1989)，[5]内藤(1971)，[6]九州大学医学部解剖学第二講座(1988)，[7]松下(1981)，[8]現代日本人頭骨研究班(1983)

＊ NLH 鼻高の値を代用

付表 1.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の脳頭蓋計測値（mm）及び示数

M No.	人骨番号	島内 103-2	島内 110-4	島内 125-2	島内 126-1	島内 126-2	島内 127-1
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	熟年	熟年	壮年	壮年	壮年	壮年
1	頭蓋最大長			177	184	179	181
8	頭蓋最大幅				148	141	143
17	バジオン・ブレグマ高		136		139	140	140
3	グラベロラムダ長			174	174	176	176
20	耳ブレグマ高						
5	頭蓋底長				108	100	100
9	最小前頭幅				107	97	95
10	最大前頭幅				122	123	
11	両耳幅		126		135	125	123
12	最大後頭幅		114		114		
13	乳突幅		104		106	102	
7	大後頭孔長		33		34	35	35
16	大後頭孔幅		31		31	29	30
23	頭蓋水平周				536		525
24	横弧長		303		315	322	
25	正中矢状弧長				380	383	
26	正中矢状前頭弧長			129	120	133	
27	正中矢状頭頂弧長		132	127	125	139	
28	正中矢状後頭弧長	120	113		135	111	130
29	正中矢状前頭弦長			112	104	113	
30	正中矢状頭頂弦長		117	112	114	120	
31	正中矢状後頭弦長	103	97		108	92	106
8/1	頭蓋長幅示数				80.4	78.8	79.0
17/1	頭蓋長高示数				75.5	78.2	77.3
17/8	頭蓋幅高示数				93.9	99.3	97.9
20/1	頭長耳ブレグマ高示数						
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数						
9/10	横前頭示数				87.7	78.9	
9/8	横前頭頭頂示数				72.3	68.8	66.4
16/7	大後頭孔示数		93.9		91.2	82.9	85.7
1+8+17/3	頭蓋モズルス				157.0	153.3	154.7
26/25	前頭矢状弧示数				31.6	34.7	
27/25	頭頂矢状弧示数				32.9	36.3	
28/25	後頭矢状弧示数				35.5	29.0	
27/26	矢状前頭頭頂示数			98.4	104.2	104.5	
28/26	矢状前頭後頭示数				112.5	83.5	
28/27	矢状頭頂後頭示数		85.6		108.0	79.9	
29/26	矢状前頭示数			86.8	86.7	85.0	
30/27	矢状頭頂示数		88.6	88.2	91.2	86.3	
31/28	矢状後頭示数		103.5		80.0	82.9	81.5

付表 1.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の脳頭蓋計測値（mm）及び示数

M No.	人骨番号	島内 103-3	島内 104-4	島内 106-2	島内 106-3	島内 106-4	島内 107-1	島内 107-2	島内 108-1	島内 127-2
	性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	年齢	壮年後期	熟年	熟年	老年	壮年後期	熟年	熟年	熟年	壮年
1	頭蓋最大長		168	167						179
8	頭蓋最大幅		139			134	136			137
17	バジオン・ブレグマ高		136		133	125	120			139
3	グラベロラムダ長		165	165		166				177
20	耳ブレグマ高									
5	頭蓋底長		98			93	94			100
9	最小前頭幅					91	96			95
10	最大前頭幅		112			110	118			115
11	両耳幅		124	122	113	113	123			126
12	最大後頭幅		101	113	105			112		116
13	乳突幅				101					
7	大後頭孔長	32	31		32		30	36	30	36
16	大後頭孔幅	28	26		25	26	29		27	31
23	頭蓋水平周		487							506
24	横弧長		312			294	303			296
25	正中矢状弧長		360							363
26	正中矢状前頭弧長		121			109	115	120		118
27	正中矢状頭頂弧長		130			132				132
28	正中矢状後頭弧長		109	113				116		113
29	正中矢状前頭弦長		108			94	99	106		108
30	正中矢状頭頂弦長		115			115				118
31	正中矢状後頭弦長		92	99				96		96
8/1	頭蓋長幅示数		82.7							76.5
17/1	頭蓋長高示数		81.0							175.9
17/8	頭蓋幅高示数		97.8			93.3	88.2			101.5
20/1	頭長耳ブレグマ高示数									
20/8	頭幅耳ブレグマ高示数									
9/10	横前頭示数					82.7	81.4			82.6
9/8	横前頭頭頂示数					67.9	70.6			69.3
16/7	大後頭孔示数	87.5	83.9		78.2		96.7		90.0	86.1
1+8+17/3	頭蓋モズルス		147.7							151.7
26/25	前頭矢状弧示数		33.6							32.5
27/25	頭頂矢状弧示数		36.1							36.4
28/25	後頭矢状弧示数		30.3							31.1
27/26	矢状前頭頭頂示数		107.4			121.1				111.9
28/26	矢状前頭後頭示数		90.1					96.7		95.8
28/27	矢状頭頂後頭示数		83.8							85.6
29/26	矢状前頭示数		89.3			86.2	86.1	88.3		91.5
30/27	矢状頭頂示数		88.5			87.1				89.4
31/28	矢状後頭示数		84.4	87.6				82.8		85.0

付表 2.1. 島内地下式横穴墓群出土男性人骨の顔面頭蓋計測値（mm）及び示数

M No.	人骨番号	島内101-2	島内101-3	島内103-2	島内110-2	島内110-4	島内125-2	島内126-1	島内126-2	島内127-1
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢	熟年	壮年	熟年	若年（18-20歳）	熟年	壮年	壮年	壮年	壮年
40	顔長							104	101	101
45	頬骨弓幅					137		145	139	
46	中顔幅					((104))		102	104	
47	顔高							129	128	115
48	上顔高							76	77	67
51	眼窩幅（左）					41		43	41	40
	眼窩幅（右）						43	43	41	39
52	眼窩高（左）					36		35	33	
	眼窩高（右）						35	35	33	
54	鼻幅							28	29	24
55	鼻高							54	53	48
H.	NI-H 鼻高							54	53.5	48
43	上顔幅							113	108	
44	両眼窩間幅							102	99	96
50	前眼窩間幅						20	23	24	21
F.	鼻根横弧長						27	28	25	24
57	鼻骨最小幅						8	9	8	9
60	上顎歯槽長									
61	上顎歯槽幅									
62	口蓋長									
63	口蓋幅									
47/45	Kollmann 顔示数							89.0		
47/46	Virchow 顔示数							126.5		
48/45	Kollmann 上顔示数							52.4		
48/46	Virchow 上顔示数							74.5		
52/51	眼窩示数（左）					87.8		81.4		
	眼窩示数（右）						81.4	71.4		
54/55	鼻示数							51.9		50.0
40+45+47/3	顔面モズルス							126.0		
61/60	上顎歯槽示数									
63/62	口蓋示数									
64/63	LI 蓋高示数									
40/5	顎示数							96.3		
50/44	眼窩間示数							22.5		21.9
50/F.	鼻根湾曲示数						74.1	82.1		87.5
65	下顎関節突起幅							142		125
65（1）	下顎筋突起幅								106	107
66	下顎角幅		106							
69	オトガイ高		30	30	30		31	38	40	34
69（1）	下顎体高（左）		32				32	39	38	34
	下顎体高（右）	36	30		29		32	36	39	33
69（3）	下顎体厚（左）		15				11	15	15	15
	下顎体厚（右）	15	15		14		12	14	14	14
70a	下顎眼高（左）							60		58
	下顎眼高（右）								58	58
70	下顎枝高（左）		62					67		65
	下顎枝高（右）								64	
71	下顎枝幅（左）		35					34		38
	下顎枝幅（右）		35						37	
71a	最小下顎枝幅（左）		35					34		38
	最小下顎枝幅（右）		35						37	
68	下顎（体）長								85	
68（1）	下顎長							113	115	111
79	下顎枝角（左）							125		120
	下顎枝角（右）								123	
71/70	下顎枝示数（左）		56.5					50.7		58.5
	下顎枝示数（右）								57.8	

付表 2.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の顔面頭蓋計測値（mm）及び示数

	人骨番号	島内 100-1	島内 106-2	島内 106-3	島内 106-4	島内 107-1	島内 127-2
	性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
M No.	年齢	壮年	熟年	老年	壮年後期	熟年	壮年
40	顔長				95		101
45	頬骨弓幅			122	123	131	134
46	中顔幅		94	102	91		93
47	顔高				99		103
48	上顔高		61		61		66
51	眼窩幅（左）		43		40		43
	眼窩幅（右）				42		42
52	眼窩高（左）		34		34		32
	眼窩高（右）				35		32
54	鼻幅		27	28	28		29
55	鼻高		47		46		49
H.	NLH 鼻高		47.0		46.5		49
43	上顔幅				102	103	102
44	両眼窩間幅				98		101
50	前眼窩間幅		20		20		20
F.	鼻根横弧長		22		21		25
57	鼻骨最小幅		9		10		12
60	上顎歯槽長						
61	上顎歯槽幅						
62	口蓋長						
63	口蓋幅						
47/45	Kollmann 顔示数				80.5		76.9
47/46	Virchow 顔示数				108.8		110.8
48/45	Kollmann 上顔示数				49.6		49.3
48/46	Virchow 上顔示数		64.9		67.0		71.0
52/51	眼窩示数（左）		79.1		85.0		74.4
	眼窩示数（右）				83.3		76.2
54/55	鼻示数		57.4		60.9		59.2
40+45+47/3	顔面モズルス				105.7		112.7
61/60	上顎歯槽示数						
63/62	口蓋示数						
64/63	口蓋高示数						
40/5	顎示数				102.2		101.0
50/44	眼窩間示数				20.4		19.8
50/F.	鼻根湾曲示数		90.9		95.2		80.0
65	下顎関節突起幅			116			
65（1）	下顎筋突起幅						83
66	下顎角幅			101			
69	オトガイ高	31			28		28
69（1）	下顎体高（左）	31	26		27		28
	下顎体高（右）			23	28		26
69（3）	下顎体厚（左）	14	14	14	12		13
	下顎体厚（右）			14	13		13
70a	下顎頭高（左）			46	45		
	下顎頭高（右）			47			
70	下顎枝高（左）		55	52			
	下顎枝高（右）			50	54		
71	下顎枝幅（左）		30	33			
	下顎枝幅（右）				27		32
71a	最小下顎枝幅（左）		30	33			
	最小下顎枝幅（右）				27		32
68	下顎（体）長			71			
68（1）	下顎長			96			
79	下顎枝角（左）			122			
	下顎枝角（右）			123			
71/70	下顎枝示数（左）		54.5	63.5			
	下顎枝示数（右）				50.0		

付表 3.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の顔面平坦度計測値（mm）及び示数

人骨番号	島内 125-2	島内 126-1	島内 126-2	島内 127-1
性別	男性	男性	男性	男性
年齢	壮年	壮年	壮年	壮年
前頭骨弦		102.7	99.7	
前頭骨左辺		56.5	52.6	
前頭骨右辺		53.5	50.9	
前頭骨垂線		19.7	13.9	
前頭骨平坦示数		19.2	13.9	
鼻骨弦	7.8	9.0	8.2	8.8
鼻骨左辺	5.3	6.0	4.5	4.7
鼻骨右辺	4.2	6.5	4.6	4.7
鼻骨垂線	2.7	4.3	2.0	1.7
鼻骨平坦示数	34.4	48.1	24.1	18.8
頬上顎骨弦		99.5		
頬上顎骨左辺		55.4		
頬上顎骨右辺		54.1		
頬上顎骨垂線		22.9		
頬上顎骨平坦示数		23.0		

付表 3.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の顔面平坦度計測値（mm）及び示数

人骨番号	島内 106-2	島内 106-3	島内 106-4	島内 107-1	島内 107-2	島内 127-2
性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
年齢	熟年	老年	壮年後期	熟年	熟年	壮年
前頭骨弦			96.6	94.8	103.5	99.7
前頭骨左辺			49.6	50.3	53.6	53.3
前頭骨右辺			51.7	48.6	53.8	51.5
前頭骨垂線			15.2	14.1	14.3	16.1
前頭骨平坦示数			15.8	14.9	13.9	16.2
鼻骨弦	9.3		9.6		13.9	12.1
鼻骨左辺	5.5		4.8		7.9	8.5
鼻骨右辺	5.5		5.6		6.5	7.9
鼻骨垂線	2.9		2.0		1.9	5.5
鼻骨平坦示数	31.6		20.8		13.5	45.7
頬上顎骨弦	92.8	100.7	92.5			91.6
頬上顎骨左辺	52.3	54.6	53.3			49.8
頬上顎骨右辺	53.9	53.5	53.0			48.2
頬上顎骨垂線	25.8	19.7	26.2			17.4
頬上顎骨平坦示数	27.8	19.5	28.3			19.0

付表 4.1. 島内地下式横穴墓群出土男性人骨の頭蓋形態小変異の出現状況（1）

	人骨番号	島内 100-3		島内 101-2		島内 101-3		島内 103-2		島内 104-1		島内 105-4		島内 109-1		島内 110-2	
	性別	男性		男性		男性		男性		男性		男性		男性		男性	
	年齢	熟年		熟年		壮年		熟年		壮年		壮年後期		熟年		若年 (18-20歳)	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨								−				−		−		
2	ラムダ縫合骨														−	−	
3	インカ骨												−		−		
4	横後頭縫合痕跡																
5	アステリオン小骨							−	−								
6	後頭乳突縫合骨							−	−								
7	頭頂切痕骨							−	−								
8	頭頂孔																
9	冠状縫合骨																
10	前頭縫合残存	−		−		−		−				−					
11	眼窩上神経溝								−								
12	眼窩上孔				−	−	+		−								
13	前頭孔				−				−								
14	二分頬骨					−											
15	横頬骨縫合痕跡					−											
16	頬骨顔面孔欠如																
17	口蓋隆起																
18	内側口蓋管骨橋					−	−										
19	外側口蓋管骨橋					−	−										
20	歯槽口蓋管					−	−										
21	顆管欠如																
22	後頭顆前結節																
23	第３後頭顆																
24	後頭顆旁突起																
25	舌下神経管二分		−	−	−	−	−	+						−	+		
26	頸静脈孔二分																
27	偏側頸静脈孔優位																
28	外耳道骨瘤			+	−	+	−	+				−		−			
29	フシュケ孔				−	−	−	−				−		−			
30	ベサリウス孔				−	−	−	−									
31	卵円孔形成不全					−	−	−									
32	棘孔開裂					−	−	−									
33	翼棘孔						+	−									
34	床状突起間骨橋																
35	左側横洞溝優位									r		l		r			
36	鱗状縫合骨																
37	矢状縫合骨																
38	プレグマ小骨																
39	後頭顆二分																
40	副オトガイ孔					−	−									−	
41	下顎隆起					−	+									−	−
42	顎舌骨筋神経管					−	−										
43	副下顎管					−	−										

付表 4.1. 烏内地下式横穴墓群出土男性人骨の頭蓋形態小変異の出現状況 (2)

	人骨番号	烏内 110-4		烏内 125-2		烏内 126-1		烏内 126-2		烏内 127-1	
	性別	男性		男性		男性		男性		男性	
	年齢	熟年		壮年		壮年		壮年		壮年	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨			−		−		−		−	
2	ラムダ縫合骨			+	+	+	+	+	+	−	+
3	インカ骨			−		+		−		−	
4	横後頭縫合痕跡	−	−			+	+	−		−	−
5	アステリオン小骨	−	−			−	−	−			−
6	後頭乳突縫合骨	−	−			−	−	−			+
7	頭頂切痕骨	−	−	−		+	−	−			+
8	頭頂孔										
9	冠状縫合骨										
10	前頭縫合残存		−		−		+		−		−
11	眼窩上神経溝	−	−				−	−	−	−	−
12	眼窩上孔		+	−	−	−	−	−	−	−	−
13	前頭孔		−	−	−	−	−	−	−	−	−
14	二分頬骨		−	−		−	−		−		
15	横頬骨縫合痕跡	+	−	−		+	−		−		
16	頬骨顔面孔欠如										
17	口蓋隆起		−			+		−		+	
18	内側口蓋管骨橋	−	−	−			−	−	−	−	+
19	外側口蓋管骨橋	−	−	−			−	−	−	−	−
20	歯槽口蓋管			−			−	−	−	−	−
21	顎管欠如	−	−				−	−	+	−	+
22	後頭顆前結節	−	−				−	−	+	−	−
23	第3後頭顆		−			−		−		−	
24	後頭顆旁突起	−	+				−	−	−		
25	舌下神経管二分	−	−	−			+	+	−	−	−	−
26	頸静脈孔二分	−	−				−	−	−	+	−	−
27	偏側頸静脈孔優位		−			−		r			
28	外耳道骨瘤	+	−	+			+	+	−	−	−	−
29	フシュケ孔	−	−	−			−	−	−	−	−	+
30	ベサリウス孔	+	−	−			−	−	−	−		+
31	卵円孔形成不全	−	−	−			−	−	+	−		−
32	棘孔開裂	−	−				+	+	−	−	−	−
33	翼棘孔						−	−	−	−	−	−
34	床状突起間骨橋						−	−	−	−	−	−
35	左側横洞溝優位		l		r			l		r		−
36	鱗状縫合骨											
37	矢状縫合骨											
38	プレグマ小骨											
39	後頭顆二分											
40	副オトガイ孔				−	−	−	−	−	−	−	−
41	下顎隆起				−	−	−	+	+	+	+	+
42	顎舌骨筋神経管						−	−	−	−		−
43	副下顎管						−	−	−	−		−

付表 4.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況（1）

	人骨番号	島内100-1		島内103-1		島内103-3		島内104-4		島内106-2		島内106-3		島内106-4		島内107-1	
	性別	女性		女性		女性		女性		女性		女性		女性		女性	
	年齢	壮年		老年		壮年後期		熟年		熟年		老年		壮年後期		熟年	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨							−		−							
2	ラムダ縫合骨							−	+								
3	インカ骨					−		−		−		−					
4	横後頭縫合痕跡							−	−	−	−	−	−				
5	アステリオン小骨							−	−	−	−	−	−	−			
6	後頭乳突縫合骨							−	−	−	−	−	−	−			
7	頭頂切痕骨							−	−			−	−	−	−		
8	頭頂孔																
9	冠状縫合骨																
10	前頭縫合残存			−					−		−			+		+	
11	眼窩上神経溝							−	−		−			−	−	−	−
12	眼窩上孔								−		+			+	+	−	−
13	前頭孔								−		−			−	−	−	−
14	二分頬骨							−	−					−	−		
15	横頬骨縫合痕跡								−					+	+		
16	頬骨顔面孔欠如																
17	口蓋隆起								−		+		+		−		
18	内側口蓋管骨橋									−	−	−	−	−	−		
19	外側口蓋管骨橋								−	−	−	−	−	−	−		
20	歯槽口蓋管								+	−		−	−	−	−		
21	顎管欠如			−	−			−	+					−	−	−	+
22	後頭顆前結節							−	−			−	−	−	−	−	−
23	第３後頭顆								−				−		−		−
24	後頭顆旁突起							−	−					−	−	−	−
25	舌下神経管二分	−	−	−	−			+	−	−	−	−	−	−	−	−	−
26	頸静脈孔二分				−			−	−					−	−	−	−
27	偏側頸静脈孔優位								−						r		r
28	外耳道骨瘤	+	+		−			++	−	+	−	++	+	+	−	−	−
29	フシュケ孔	−	−		−			−	−	−	−	−	−	−	−	+	−
30	ベサリウス孔							−	−	+	−			−	−	−	−
31	卵円孔形成不全							−	−	−	−			−	−	−	−
32	棘孔開裂							−	−	−	−			+	+	−	−
33	翼棘孔							−	−		−			−	−	−	−
34	床状突起間骨橋					−	−	−	−	−	−			−	−	−	−
35	左側横洞溝優位								r		l		r				
36	鱗状縫合骨																
37	矢状縫合骨																
38	プレグマ小骨																
39	後頭顆二分																
40	副オトガイ孔										−	−	−	−	−		−
41	下顎隆起							−			+	−	−	−	−	−	−
42	顎舌骨筋神経管										−	−	−	−			
43	副下顎管									−	−	−	−	−			

付表 4.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況（2）

	人骨番号	島内 107-2		島内 108-1		島内 110-3	
	性別	女性		女性		女性	
	年齢	熟年		熟年		壮年	
		右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨		−				
2	ラムダ縫合骨						
3	インカ骨		−				
4	横後頭縫合痕跡						
5	アステリオン小骨						
6	後頭乳突縫合骨						
7	頭頂切痕骨						
8	頭頂孔						
9	冠状縫合骨						
10	前頭縫合残存		−				
11	眼窩上神経溝	−	−				
12	眼窩上孔	−	−				
13	前頭孔	−	−				
14	二分頬骨						
15	横頬骨縫合痕跡						
16	頬骨顔面孔欠如						
17	口蓋隆起						
18	内側口蓋管骨橋						
19	外側口蓋管骨橋						
20	歯槽口蓋管						
21	鞏管欠如			−	+		
22	後頭顆前結節				−		
23	第３後頭顆				−		
24	後頭顆旁突起						
25	舌下神経管二分	−	−	−	−		
26	頸静脈孔二分						
27	偏側頸静脈孔優位						
28	外耳道骨瘤	−	−	−	−	-++	
29	フシュケ孔	+	−	−	−		
30	ベサリウス孔			−	−		
31	卵円孔形成不全			−	−		
32	棘孔開裂		−	+	+		
33	翼棘孔		−	−	−		
34	床状突起間骨橋						
35	左側横洞溝優位		−				
36	鱗状縫合骨						
37	矢状縫合骨						
38	ブレグマ小骨						
39	後頭顆二分						
40	副オトガイ孔					−	
41	下顎隆起					+	+
42	顎舌骨筋神経管					−	
43	副下顎管						

付表 4.3. 烏内地下式横穴墓群出土性別不明成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

	人骨番号	烏内 101-1		烏内 105-2	
	性別	?		?	
	年齢	熟年		壮年	
		右	左	右	左
1	ラムダ小骨				
2	ラムダ縫合骨				
3	インカ骨				
4	横後頭縫合痕跡				
5	アステリオン小骨				
6	後頭乳突縫合骨				
7	頭頂切痕骨				
8	頭頂孔				
9	冠状縫合骨				
10	前頭縫合残存			−	
11	眼窩上神経溝				
12	眼窩上孔				
13	前頭孔				
14	二分頬骨				
15	横頬骨縫合痕跡				
16	頬骨顔面孔欠如				
17	口蓋隆起			+	
18	内側口蓋管骨橋				−
19	外側口蓋管骨橋				−
20	歯槽口蓋管			−	+
21	顆管欠如				
22	後頭顆前結節				
23	第３後頭顆				
24	後頭顆旁突起				
25	舌下神経管二分				
26	顎静脈孔二分				
27	偏側頸静脈孔優位				
28	外耳道骨瘤	+			
29	フシュケ孔				
30	ベサリウス孔				
31	卵円孔形成不全				
32	棘孔開裂				
33	翼棘孔				
34	床状突起間骨橋				
35	左側横洞溝優位				
36	鱗状縫合骨				
37	矢状縫合骨				
38	プレグマ小骨				
39	後頭顆二分				
40	副オトガイ孔				
41	下顎隆起				
42	顎舌骨筋神経管				
43	副下顎管				

付表 5.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の上腕骨計測値（mm）及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号		島内 101-2	島内 101-3	島内 105-4	島内 125-2	島内 126-1	島内 126-2
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢		熟年	壮年	壮年後期	壮年	壮年	壮年
1	最大長	左						
		右					294	
2	全長	左						
		右					290	
5	中央最大径	左				22		22
		右	25	21	25		26	
6	中央最小径	左				18		18
		右	17	18	18		19	
7	骨体最小周	左						62
		右	71	59	65			
7a	中央周	左				67		66
		右	62	64	72		73	
6/5	骨体断面示数	左				81.8		81.8
		右	68	85.7	72		73.1	
7/1	長厚示数	左						
		右						

付表 5.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の上腕骨計測値（mm）及び示数

上腕骨 M No.	人骨番号		島内 103-1	島内 106-3	島内 106-4	島内 108-1
	性別		女性	女性	女性	女性
	年齢		老年	老年	壮年後期	熟年
1	最大長	左				
		右				
2	全長	左				
		右				
5	中央最大径	左	19	19		
		右				
6	中央最小径	左	14	14		
		右				
7	骨体最小周	左	52	53		53
		右		53	55	
7a	中央周	左	55	54		
		右				
6/5	骨体断面示数	左	73.7	73.7		
		右				
7/1	長厚示数	左				
		右				

付表 6.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の橈骨計測値（mm）及び示数

橈骨 M No.	人骨番号 / 性別 / 年齢		島内 105-4 男性 壮年後期	島内 125-2 男性 壮年	島内 126-1 男性 壮年	島内 126-2 男性 壮年	島内 127-1 男性 壮年
1	最大長	左					
		右		227			
2	機能長	左					
		右		215			
3	最小周	左				41	
		右	41	41	46		41
4	骨体横径	左				17	
		右	17	11	17		
5	骨体矢状径	左				12	
		右	11	16	14		
4a	骨体中央横径	左					
		右		15			
5a	骨体中央矢状径	左					
		右		12			
5 (5)	骨体中央周	左					
		右		42			
3/2	長厚示数	左					
		右		19.1			
5/4	骨体断面示数	左	64.7				
		右		145.5	82.4		
5a/4a	中央断面示数	左					
		右		80			

付表 6.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の橈骨計測値（mm）及び示数

橈骨 M No.	人骨番号 / 性別 / 年齢		島内 103-1 女性 老年	島内 108-1 女性 熟年
1	最大長	左		
		右		
2	機能長	左		
		右		
3	最小周	左		36
		右		
4	骨体横径	左	14	14
		右		
5	骨体矢状径	左	10	10
		右		
4a	骨体中央横径	左		13
		右		
5a	骨体中央矢状径	左		10
		右		
5 (5)	骨体中央周	左		36
		右		
3/2	長厚示数	左		
		右		
5/4	骨体断面示数	左	71.4	71.4
		右		
5a/4a	中央断面示数	左		76.9
		右		

付表 7.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の尺骨計測値（mm）及び示数

尺骨 M_No.	人骨番号		島内 125-2	島内 126-1	島内 126-2	島内 127-1
	性別		男性	男性	男性	男性
	年齢		壮年	壮年	壮年	壮年
1	最大長	左				
		右				
2	機能長	左				
		右				
3	最小周	左				
		右	38	39		39
3'	中央周	左				
		右	48			
11	尺骨前後径	左				
		右	14			
12	尺骨横径	左				
		右	17			
11'	中央最小径	左				
		右	13			
12'	中央最大径	左				
		右	16			
3/2	長厚示数	左				
		右				
11/12	骨体断面示数	左				
		右	82.4			
11'/12'	骨体断面示数	左				
		右	81.3			

付表 7.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の尺骨計測値（mm）及び示数

尺骨 M_No.	人骨番号		島内 108-1
	性別		女性
	年齢		熟年
1	最大長	左	
		右	
2	機能長	左	
		右	
3	最小周	左	31
		右	
3'	中央周	左	40
		右	
11	尺骨前後径	左	11
		右	
12	尺骨横径	左	13
		右	
11'	中央最小径	左	11
		右	
12'	中央最大径	左	13
		右	
3/2	長厚示数	左	
		右	
11/12	骨体断面示数	左	84.6
		右	
11'/12'	骨体断面示数	左	84.6
		右	

付表 8.1. 島内地下式横穴墓群出土男性人骨の大腿骨計測値（mm）及び示数

大腿骨 M No.	人骨番号		島内 101-3	島内 103-2	島内 105-4	島内 110-2	島内 110-4	島内 126-1	島内 126-2
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
	年齢		壮年	熟年	壮年後期	若年（18～20歳）	熟年	壮年	壮年
1	最大長	左	380						423
		右		408					
2	自然位全長	左							
		右		404					
6	骨体中央矢状径	左	29				29		28
		右		28		27	28	29	
7	骨体中央横径	左	24				27		27
		右		25		24	26	28	
8	骨体中央周	左	85				90		86
		右		83		80	87	91	
9	骨体上横径	左	31		30	30			31
		右				23	33		
10	骨体上矢状径	左	24		24				24
		右					24		
8/2	長厚示数	左							
		右		20.5					
6/7	骨体中央断面示数	左	120.8				107.4		103.7
		右		112.0		112.5	107.7	103.6	
10/9	上骨体断面示数	左	77.4		80.0	76.7			77.4
		右					72.7		

付表 8.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の大腿骨計測値（mm）及び示数

大腿骨 M No.	人骨番号		島内 103-1	島内 106-3	島内 106-4	島内 107-2	島内 108-1
	性別		女性	女性	女性	女性	女性
	年齢		老年	老年	壮年後期	熟年	熟年
1	最大長	左			398		
		右				415	
2	自然位全長	左					
		右				410	
6	骨体中央矢状径	左	24	24			
		右		23		26	
7	骨体中央横径	左	26	22			
		右		21		25	
8	骨体中央周	左	76	72			
		右		71		79	
9	骨体上横径	左	34	28			28
		右		27		29	
10	骨体上矢状径	左	19	20			21
		右		19		24	
8/2	長厚示数	左					
		右				19.3	
6/7	骨体中央断面示数	左	92.3	109.1			
		右		109.5		104.0	
10/9	上骨体断面示数	左	55.9	71.4			75.0
		右		70.4		82.8	

付表 9.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の脛骨計測値（mm）及び示数

脛骨 M No.	人骨番号		島内 101-2	島内 105-4	島内 110-4	島内 126-1	島内 126-2
	性別		男性	男性	男性	男性	男性
	年齢		熟年	壮年後期	熟年	壮年	壮年
1	全長	左					
		右					
1a	最大長	左					
		右					
8	中央最大径	左		32			29
		右					
9	中央横径	左		21			21
		右					
10	骨体周	左		81			81
		右					
8a	栄養孔位最大径	左	35	36	33	40	35
		右	32				
9a	栄養孔位横径	左	24	21	22	24	21
		右					
10a	栄養孔位周	左	91	90	88	100	90
		右	87				
10b	骨体最小周	左					
		右					
9/8	中央断面示数	左		65.6			72.4
		右					
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	68.6	58.3	66.7	60.0	60.0
		右					
10b/1	長厚示数	左					
		右					

付表 9.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の脛骨計測値（mm）及び示数（1）

脛骨 M No.	人骨番号		島内 100-1	島内 103-1	島内 104-4	島内 106-3	島内 106-4	島内 107-1	島内 107-2
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	年齢		壮年	老年	熟年	老年	壮年後期	熟年	熟年
1	全長	左					330		
		右							
1a	最大長	左					335		
		右							
8	中央最大径	左		27	25		26		29
		右					27		26
9	中央横径	左		19	19		19		21
		右					19		21
10	骨体周	左		76	70		71		81
		右					73		78
8a	栄養孔位最大径	左	35	29	28	26			
		右			28		29	25	34
9a	栄養孔位横径	左	22	20	19	19			21
		右			18		10	19	21
10a	栄養孔位周	左	92	79	76	71			
		右			73		80	72	88
10b	骨体最小周	左		66	65		66		68
		右				60			70
9/8	中央断面示数	左		70.4	76		73.1		72.4
		右					70.4		80.8
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	62.9	69.0	67.9	73.1			
		右			64.3		34.5	76.0	61.8
10b/1	長厚示数	左					20.0		
		右							

付表 9.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の脛骨計測値（mm）及び示数（2）

脛骨 M. No.	人骨番号		島内 108-1	島内 110-3
	性別		女性	女性
	年齢		熟年	壮年
1	全長	左		
		右		
1a	最大長	左		
		右		
8	中央最大径	左		
		右		
9	中央横径	左		
		右		
10	骨体周	左		
		右		
8a	栄養孔位最大径	左	29	31
		右		
9a	栄養孔位横径	左	20	18
		右		
10a	栄養孔位周	左		81
		右		
10b	骨体最小周	左		
		右		65
9/8	中央断面示数	左		
		右		
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	69.0	58.1
		右		
10b/1	長厚示数	左		
		右		

付表 9.3. 島内地下式横穴墓群出土性別不明成人骨の脛骨計測値（mm）及び示数

脛骨 M. No.	人骨番号		島内 125-1
	性別		?
	年齢		壮年
1	全長	左	
		右	
1a	最大長	左	
		右	
8	中央最大径	左	
		右	
9	中央横径	左	
		右	
10	骨体周	左	
		右	
8a	栄養孔位最大径	左	30
		右	
9a	栄養孔位横径	左	20
		右	
10a	栄養孔位周	左	79
		右	
10b	骨体最小周	左	
		右	
9/8	中央断面示数	左	
		右	
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	66.7
		右	
10b/1	長厚示数	左	
		右	

付表 10.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の腓骨計測値（mm）及び示数

腓骨 M. No.	人骨番号		島内 110-4
	性別		男性
	年齢		熟年
1	最大長	左	
		右	
2	中央最大径	左	
		右	
3	中央最小径	左	
		右	
4	中央周	左	
		右	
4a	最小周	左	35
		右	
3/2	骨体中央断面示数	左	
		右	
4a/1	長厚示数	左	
		右	

付表 10.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人骨の腓骨計測値（mm）及び示数

腓骨 M. No.	人骨番号		島内 106-3	島内 106-4
	性別		女性	女性
	年齢		老年	壮年後期
1	最大長	左		320
		右		
2	中央最大径	左		13
		右		
3	中央最小径	左		10
		右		
4	中央周	左		39
		右		
4a	最小周	左	32	29
		右		
3/2	骨体中央断面示数	左		76.9
		右		
4a/1	長厚示数	左		9.1
		右		

付表 11. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の鎖骨計測値（mm）及び示数

鎖骨 M No.	人骨番号		島内 125-2	島内 126-1	島内 126-2
	性別		男性	男性	男性
	年齢		壮年	壮年	壮年
1	最大長	左			
		右			
4	中央垂直径	左	11	11	
		右		12	11
5	中央矢状径	左	13	14	
		右		16	17
6	中央周	左	40	43	
		右		47	47
6/1	長厚示数	左			
		右			
4/5	中央断面示数	左	84.6	78.6	
		右		75.0	64.7

付表 12.1. 島内地下式横穴墓群出土男性成人の身長（cm）

人骨番号		島内 126-2
性別		男性
年齢		壮年
身長（ピアソン式）「大腿骨最大長から計算」	左	160.8
	右	

付表 12.2. 島内地下式横穴墓群出土女性成人の身長（cm）

人骨番号		島内 106-4	島内 107-2
性別		女性	女性
年齢		壮年後期	熟年
身長（ピアソン式）「大腿骨最大長から計算」	左	150.3	
	右		159.3

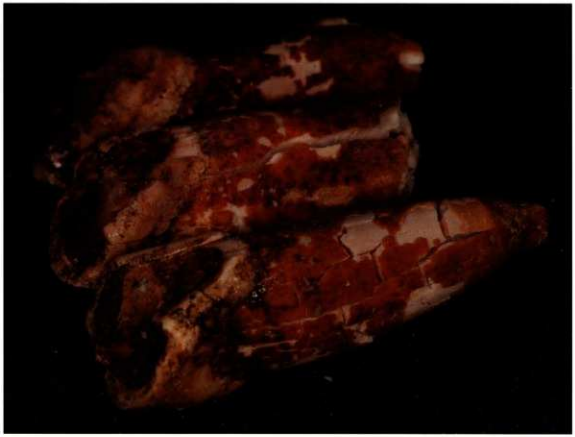


写真1　島内地下式横穴墓群101号墓2号人骨上顎前歯舌側面磨耗（上顎左右中切歯と左側切歯）

写真2　島内地下式横穴墓群103号墓1号人骨(女性・老年)右頭頂骨陥凹

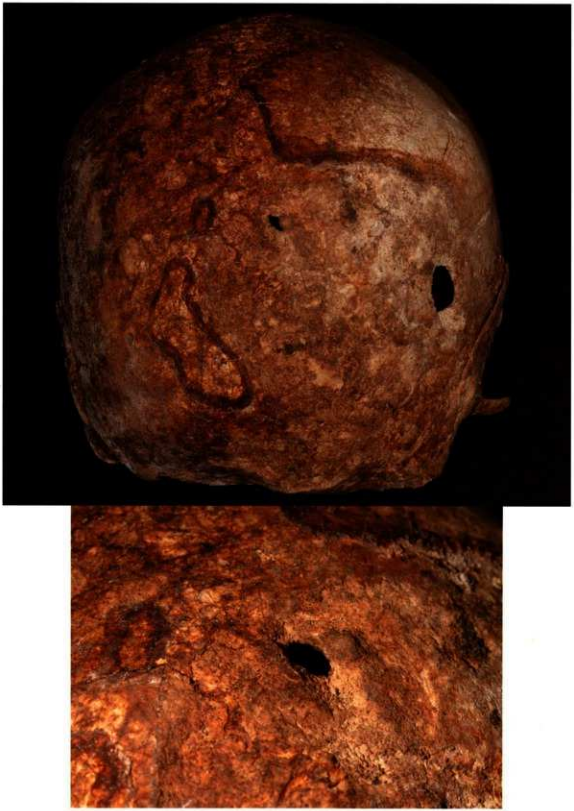


写真3　島内地下式横穴墓群104号墓4号人骨　頭蓋　右頭頂骨ラムダ付近の骨欠損

写真4　島内地下式横穴墓群106号墓2号人骨（女性・熟年）　頭蓋　正面観・左側面観・咬合面観

写真5　島内地下式横穴墓群106号墓4号人骨（女性・壮年後期）　頭蓋の正面観・右側面観　プレグマ後部の帯状の溝

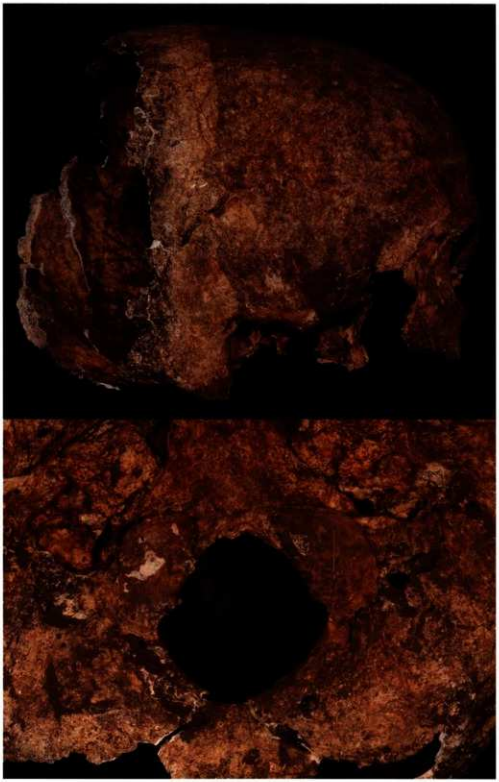


写真6　島内地下式横穴墓群107号墓1号人骨(女性・熟年)　頭蓋の右側面 観(プレグマ後部の帯状の溝)と後頭顆の変形性関節症

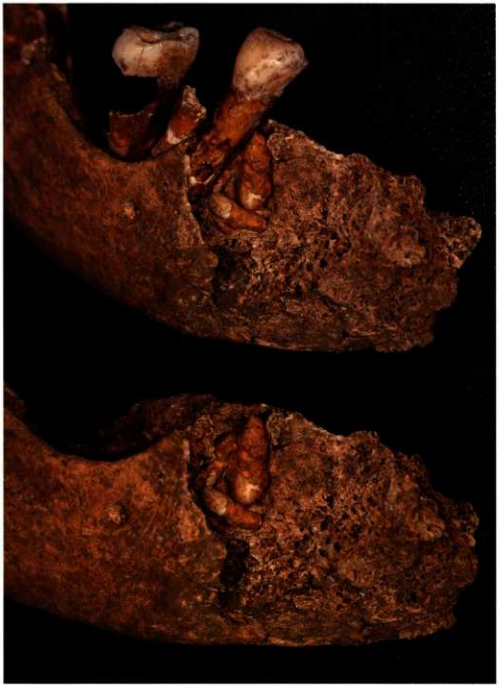


写真7　島内地下式横穴墓群109号墓1号人骨(男性・熟年)　集合性歯牙腫

写真8　島内地下式横穴墓群110号墓3号人骨(女性・壮年)　右外耳道骨腫

写真9　島内地下式横穴墓群126号墓1号人骨（男性・壮年）　頭蓋の正面観・右側面観・上面観

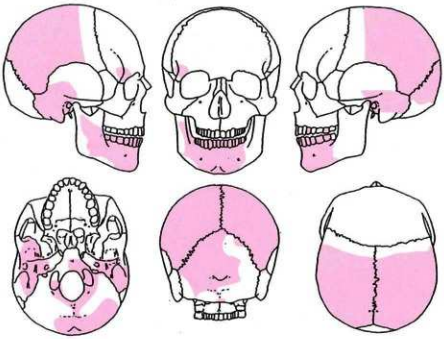
写真10　島内地下式横穴墓群126号墓2号人骨（男性・壮年）　頭蓋の正面観・右側面観・上面観　前頭部の受傷痕

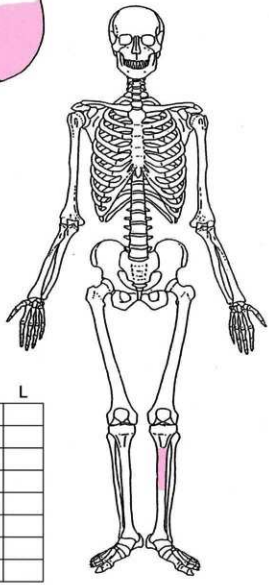
写真11　島内地下式横穴墓群127号墓2号人骨(女性・壮年)　頭蓋の正面観・右側面観・上面観

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨遺存部位

島内地下式横穴墓群遺跡　100号墓　1号人骨　性別　女性　年齢　壮年

・各骨の遺存状況





・体幹体肢骨の保存状態

脊柱	頸椎		
	胸椎		
	腰椎		
	仙骨		
	尾骨		
胸郭	胸骨		
	肋骨		

		R	L
上肢	肩甲骨		
	鎖骨		
	上腕骨		
	橈骨		
	尺骨		
	手根骨		
	中手骨		
	指骨(指)		

		R	L
下肢	寛骨		
	大腿骨		
	膝蓋骨		
	脛骨	△	
	腓骨		
	足根骨		
	中足骨		
	指骨(足)		

・各骨の遺存状況

・体幹体肢骨の保存状態

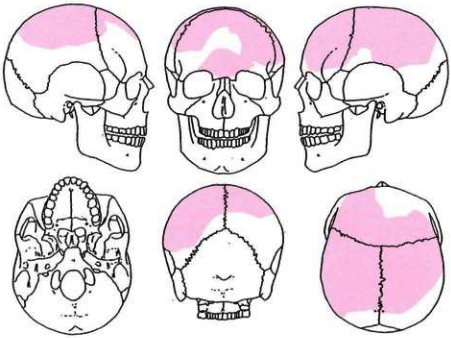
脊柱	頸椎		
	胸椎		
	腰椎		
	仙骨		
	尾骨		
胸郭	胸骨		
	肋骨		

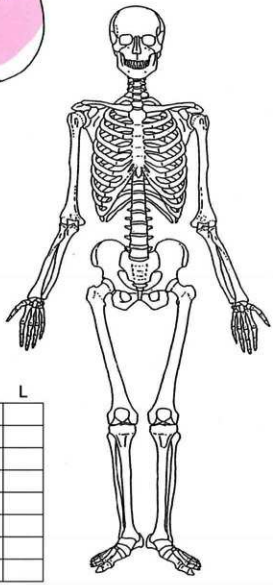
		R	L
上肢	肩甲骨		
	鎖骨		
	上腕骨		
	橈骨		
	尺骨		
	手根骨		
	中手骨		
	指骨(指)		

		R	L
下肢	寛骨		
	大腿骨		
	膝蓋骨		
	脛骨		
	腓骨		
	足根骨		
	中足骨		
	指骨(足)		

島内地下式横穴墓群遺跡　100号墓　3号人骨　性別　男性　年齢　熟年

・各骨の遺存状況





・体幹体肢骨の保存状態

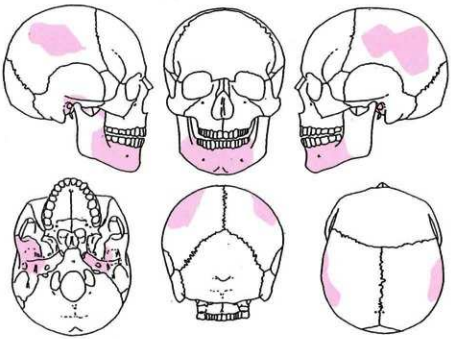
脊柱	頸椎		
	胸椎		
	腰椎		
	仙骨		
	尾骨		
胸郭	胸骨		
	肋骨		

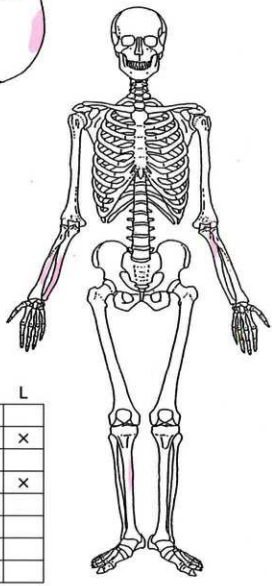
		R	L
上肢	肩甲骨		
	鎖骨		
	上腕骨		
	橈骨		
	尺骨		
	手根骨		
	中手骨		
	指骨(指)		

		R	L
下肢	寛骨		
	大腿骨		
	膝蓋骨		
	脛骨		
	腓骨		
	足根骨		
	中足骨		
	指骨(足)		

島内地下式横穴墓群遺跡　101号墓　1号人骨　性別　不明　年齢　熟年

・各骨の遺存状況





・体幹体肢骨の保存状態

脊柱	頸椎	
	胸椎	
	腰椎	×
	仙骨	
	尾骨	
胸郭	胸骨	○
	肋骨	△

		R	L
上肢	肩甲骨	×	
	鎖骨		
	上腕骨		△
	橈骨	△	
	尺骨	△	△
	手根骨		
	中手骨		
	指骨(指)		

		R	L
下肢	寛骨	×	
	大腿骨	×	×
	膝蓋骨		
	脛骨	△	×
	腓骨		
	足根骨		
	中足骨		
	指骨(足)		